



あやのこ

第三号

ひとよの縁食

7

小夜紫雨

吐くなよ

33

田中楓夏

宙ちゅうの踊り子

61

千紘

ある背景のほんの一例

89

阿智坂しゆき

化けの皮

119

吹風佐梨

夢のまにまに

149

藍錆薰衣

二万歩の足跡

175

入鹿るいか



あやいと
第三号



刊行の辞

『あやいと』という名称は、先生のお名前が含まれている「綾糸」に由来しており、「美しい色とりどりの糸」や「あやとりに使う糸」「機織り機の掛け糸」という意味を持っています。

『あやいと』創刊号より

この度、二〇二三年度田中綾ゼミより、文学誌『あやいと』第三号を刊行いたしました。ゼミ誌としては第十三号となります。無事に刊行し、貴方に届いたことを大変嬉しく思います。

田中綾ゼミでは三年次から創作を行っており、十三人がお互いに作品を読みあい、創作に励んできました。どの創作もそれぞれにしか描けない魅力的な物語ばかりです。何を思い描き、どのように言葉を紡いでいくのか、当たり前のことだと言ってしまうようなものかもしれませんが時には、はっと気づかされることがあります。そうであるならば、当

たり前のことなんてないのではないかと思ってきました。

私たちの学年は新型コロナウイルスの流行が入学と被ってしまい、なかなか思い描いたような学生生活は送れなかったかもしれないかもしれません。友人がいなく不安を抱えたこともあるでしょう。

そのような状況で私たち十三人は同じゼミで出逢い、今、本誌を刊行することができました。『あやいと』が刊行されるのは今年度が初めてというわけではもちろんありません。世界中には読み物で溢れていますから、全くご存じない方が見れば何物でもないかもしれません。それでも、お手に取ってくださった貴方にとって、この一冊が貴方の限りある時間を彩り照らすことができると信じています。

それぞれの持ち味を生かし、それぞれの色をまとった作品が詰まっています。物語の世界に飛び込んで浸るもよし、お腹を空かせ、味わってしまうもよし、背筋がぞわっとする感覚を求めてもよし。ぜひお気に入りの物語を見つけてみてください。

また、本誌からペンネームを使用することになりました。加えて、それぞれの作品の後に解説・あとがき・短編小説など書かせていただきました。そちらも物語と併せて見てい

ただければと思います。

本誌刊行に際しまして、お力添えいただいた皆様やお手に取っていただいた皆様へ、誠にありがとうございます。

私たちの物語が繋ぐ未来に想いを馳せ、感謝の言葉を以て結びとさせていただきます。心より御礼申し上げます。

北海学園大学人文学部一部田中綾ゼミ

『あやいと』第三号 ゼミ及び編集長

四年 児島菜津子 拝

『あやいと』第三号 目次

刊行の辞

目次

【ひとよの縁食】	小夜紫雨	7
【吐くなよ】	田中楓夏	3 3
【宙 <small>ちゆう</small> の踊り子】	千紘	6 1
【ある背景のほんの一例】	阿智坂しゆき	8 9
【化けの皮】	吹風佐梨	1 1 9
【夢のまにまに】	藍錆薰衣	1 4 9
【二万歩の足跡】	入鹿るいか	1 7 5
【サークル@オンライン】	九条桜蘭	2 0 1
【『地球の歩き方 改訂版』】	ニコゴリ	2 3 1
【スパイスラック】	百珈	2 7 1

目次

【咲いて灰になる	そして春になる】	階口窓	2
【胡蝶の夢】		黒土萌音	9
【第一稿】		濡羽天	7
編集後記			
ごあいさつ			
			4
			3
			1
			9
			2
			0
			3
			6
			1
			3
			3
			5
			2
			9
			7

ひとよの縁食

小夜
紫雨

「ごちそうさまでした! また来ます!」

読むタイプのごはん
あなたのこころとおなかを満たす
やさしいおいしい物語



駅前の街灯と繁華街に群生するネオンの数々が街全体を鮮やかに彩っている。深夜とは思えないそのにぎやかさと眩しさに私は思わず目を細める。そのおかげか、頭の中に薄くぼんやりかかっていた靄が少しずつ晴れていく。

今、私が置かれている状況は何かの間違いではないかと、淡い期待を込めて駅前の大時計に目を向ける。大時計の二つの針は綺麗に十二を指していて、新たな一日のはじまりを静かに告げていた。

「はあ……」

やはり私の置かれた状況に対する認識にズレはなかったらしく、大きなため息とともに宙を仰ぐ。

今日は人生でこれ以上ないくらい最悪な日だ——……。

今日、いや正確には昨日、七月二十八日は金曜日で、待ちに待った華金（しかも、プレミアム）のはずだった。世の学生や会社員たちは、一週間の疲れを吹き飛ばすべく大いに羽を伸ばしている頃だろう。

私、大黒みのり（御年二七）も華金を楽しみにしていたごく普通のOLのひとりであり、

家に帰って溜まりに溜まった今期のドラマを消化しようと思っていた。朝の時点での私の計画では、今頃エアコンでキンキンに冷えた部屋で、ふかふかのソファに腰かけながら、お酒とおつまみ片手にドラマを見ている、そのはずだった。

それなのに、同じ営業先を担当している三つ年上の上司に、資料作りの仕事を押しつけられ、残業をする羽目になった。アイツは取引先と約束があるとかなんとか言っていたが、昼休みに今日はキャバクラで飲みあかすと同僚にひけらかしていたのを、私はこの地獄耳でばっちり聞いていた。そもそも、同じ営業先なのだからそういう約束があるなら私の耳にも入っているはずだ。だから、絶対にアイツはキャバクラに行っている。後輩に仕事を押しつけて自分は華金を満喫するなんてクズにも程がある。

しかし、私の不幸はこれで終わらなかった。怒りをエネルギーに替え、何とか残業を終わらせた私は、絶対に終電だけは逃すまいと小走りで最寄り駅に向かっていた。

駅が目前に迫ってきて何とか間に合いそうだと安堵していたそのとき、突然彼氏から電話がかかってきた（彼氏用の着信音を設定していたのですぐに分かった）。正直に言っただけ視したかったが、さすがにそれは可哀想かなと思いい電話に出てしまった。その親切心もむなし、一方的に『俺たち、別れよう』と告げられた。あまりに突然の電話とその内容に

思わず足を止めてしまい、そのまま口論を続けていたら、目の前で終電が通り過ぎていった。

たしかに、私たちの関係は冷え切っていて、近いうちに関係が終わるのではないかと薄々感じていた。しかし、なぜ今このタイミングなのか。しかも、そんな重要な内容を電話で。仮にも四年付き合ったのに。私の親切心を返してくれ。

そして、泣く泣く（別れたことではなく終電を逃したことに對しての泣き）駅前広場に移動し、今に至る。どうして悪いことってこう立て続けに起こるのだろう。理不尽な残業も終わらせて一生懸命頑張ったというのに。こんな仕打ちはあんまりじゃないですか様。あなたには人の心つてもうがないんですか。

そんなことを心の中でぶつくさ愚痴りつつ始発までどうしようかと途方に暮れていた、そんな時だった。この状況に追い打ちをかけるようにして、私のお腹がよくテレビのSEで聞くのと同じような音をたてて鳴った。幸い周囲に人はおらず、ホッと胸をなでおろす。

「はぁ、お腹すいたな……」

今にも消え入りそうな声で言葉が漏れ出る。思い返してみると、今日の昼休みにおにぎりを二個食べてから何も口にしていなかった。残業の合間に会社近くのコンビニで、おに

ぎりなり菓子パンなりを買って食べればよかったのだが、その時の私は早く家に帰ってド
ラマを見ながらご飯を食べたいと思っていたし、何より、食欲以上に残業を押しつけられ
た怒りの方が勝っていて、残業を絶対終わらせてやるというゾーンに入っていた。

そして、一連の怒りがピークを過ぎて、ようやく私は十二時間ほど何も食べていなかっ
たこと、空腹が限界を迎えていたことに気が付いた。それを意識するとさらに猛烈な空腹
感に見舞われた。始発まで時間を潰しつつこの空腹を満たせる場所——……。私は三十秒
ほど考えを巡らせる。

そもそも、こんなところに突っ立ってないで、タクシーで家まで帰ることができるなら
そうしたい。でも、会社から自宅までは四十分ほどかかる距離にある。その距離をタクシ
ーなんて使ってしまったら、いったいいくらかかるのか……。それに、会社の付き合いで
使う訳でもないから、あとで経費として請求もできないだろう。うん、お金がもったいな
い。やっぱり始発で帰った方がいい。

始発まで時間を潰すとして、こういうときは、漫画喫茶やネットカフェ、ファストフー
ド店で適当に過ごすというのが定石だ。しかし、この街のそういった建物は中心部の繁華
街に存在する。加えて、そういった場所には、必ず酔っぱらった輩がいて十中八九で絡ま

れる。心に余裕でもあれば適当にあしらえるだろうが、この限界突破した空腹による極限状態の中で、世界一ムダなことをする気力はない。

それに、こんな深夜にジャンキーなものを食べる気にはあまりなれない。チェーン店の料理というよりは、五臓六腑にじんわりと染み渡るようなものが食べたい。

私はすぐさまバッグからスマホを取り出して、ゴーゴロに『居酒屋 近め うまい』とIQゼロの単語を打ち込んで検索にかける。一番上に出てきた信用度圧倒的一位飲食店評価サイト（私調べによる）の『うまログ』をスクロールしていくと、『家庭料理居酒屋 わがや』という店名が目に入った。どうやら深夜営業の居酒屋で、繁華街を少し外れたところにあるらしかった。名前も家庭料理居酒屋とあって何かそそられる。よし、タクシーでこの居酒屋まで乗せてもらうことにしよう。

ちよつとの距離ならタクシーを使ってもいいだろうと自分を甘やかし（そもそも歩く気力がない）、駅前の広場で待機していたタクシーを捕まえて乗り込み、席に座る。

「東区2丁目の『家庭料理居酒屋 わがや』という店のあたりまでお願いします」

「かしこまりました」

運転手とのやり取りを終え、ほどなくしてタクシーが発進した。外の煌びやかさとやか

ましきから隔たれた静かな車内の中で、私は、腹の虫が鳴かないように気を配りつつ、半日ぶりにありつけるまだ見ぬ料理たちに少し心を躍らせながら、目的地の居酒屋へ運ばれていった。

目的地の居酒屋には、タクシーで五分経つか経たないかの時間で到着した。場所的に会社と駅から大きく離れているわけではないが、中心部から少し外れた場所にあるからか、かなり静かな場所だ。お店は二階建ての戸建て住宅で、一階が店で二階が住居であることが見てとれた。ドアや小窓からは橙色の灯りがじんわり漏れ出ている、あたたかみを感じる。

正面の左側には、こげ茶色の木製のガラス引き戸が立てつけられていて、外壁は、アイボリーの塗料を用いてリシン仕上げで塗られていた。中心部のビル群が醸し出す近未来的な雰囲気とは打って変わって、どこかレトロな雰囲気を感ずる懐かしさのある外装だ。

排気口から香ってくる匂いは、いつも居酒屋で嗅ぐような食べ物と煙草の混じったジャンキーな匂いとは異なり、夕飯の支度をしている台所から漂ってくる匂いのような、どこ

か家庭的な要素を含んだ匂いがして安心感を覚える。この匂いを嗅いでいたらさらに空腹感が増してきた。早く中に入ろう。私は、はやる気持ちを抑えつつ足早に入口へと向かい、静かに引き戸をガラガラと引いて店内に入った。

「ごめんください……」

抑えめに声をかけると、この店の女将さんだと思われる五十歳くらいの少しふくよかでおとな女性がこちらにやってきて、気さくな感じで話しかけてきた。

「あら、いらつしやいませ！ おひとり様かしら？」

「はい、そうです。予約とかしてないんですけど、席は空いてますか？」

「ええ、大丈夫よ！ カウンター席で大丈夫かしら？」

「はい、大丈夫です！」

「それじゃあ、こちらにどうぞ！」

女将さんは手際よく対応を済ませ、コの字の形をした木造カウンターの真ん中の五席のうち左から二番目の席に案内してくれた。

「注文が決まったら声をかけてくださいね」

女将さんはそう告げると、私の席から右にひとつ空いた席（つまり、左から数えて四番

目の席)に座っている常連と思われる男性とその隣に座っている大学生っぽい女性との会話を再開した。

会話の邪魔をしちやつたかなと思いつつ、少し硬めのクッションが敷かれた背もたれのあるイスに腰かけ、さつそくカウンターに立てかけられている丁寧なラミネートされたおしながきを手に取る。おしながきは横長のA4くらいのサイズ感で、表にはメインとなる料理が、裏にはドリンクと軽いおつまみ系のメニューが、手作り感たつぷりの丸っこい筆文字で書かれていた。

早速、『第一回 居酒屋オーダー会議』と称した脳内会議が始まる。

まずは、最初に何を頼むか、そのスタートダッシュが肝心なところである。もう空腹も限界を超えているのでさつそく料理といきたい。しかし、お腹を満たせるようなメイン級の料理は時間がかかるのが定説だ。ここはメインの料理の調理時間を計算して、一緒に飲み物とつなぎとなるおつまみを注文すべきではないか。

そうになると、まずは飲み物だが、夜も遅く寂れた気分なのであまりビールという気分ではない。いっそアルコールではなく手堅く緑茶でも良いが、この身に降りかかった不運な悪運なりを浄化するためにアルコールは摂取したい。いや、しないとやっつけられない。

あれやこれやと議論を展開しつつメニューを眺めていると、ふと梅酒の二文字が目に残る。梅酒ってあんまり自分じゃ飲まないからなんかいいかも。しかも梅ってなんかめたいし浄化してくれそうだ。ロックやソーダ割りなど、色々な飲み方があったが、炭酸はあまり好きではないのでロックにする。

次はおつまみだが、これはもうポテトサラダに決めている。理由は単純で、さつき男性客がすごく笑顔で食べていたのがおいしそうだったからだ。

次はメインディッシュを決めようとおしながきを表に返そうとしたそのとき、とある料理の写真が目に残った。それはだし巻きたまごだった。写真のだし巻きたまごは、四センチほどの厚みがあり、ぎっしりながらも見るからにふわふわしていた。たまご焼き自体は、ひよこのようなやわらかな黄色をしていて、焦げ目ひとつなく、A4の画面のなかでひと際輝きを放っていた。

ここで、優柔不断が発動する。ポテトサラダかだし巻きたまごか、どっちにすべきだろうか……。早く注文して食べたいのに、そう考えるほどドツポにはまって決められなくなる。少し考えたが、考えるのも面倒くさくなってきたので、どっちも食べちゃおう。少々強引ではあるけど、欲望には忠実に、ちよっとくらい自分を甘やかしてもいいでしょうと

いうことにした。

今度こそおしながきを裏返してメインディッシュを決める。ここにはひと際強調された文字で『おすすめ』と書いてあり、その下に『牛もつ煮込み』と書いてあった。おすすめと言われたらおすすめを選ぶしかない。初めて来たお店だし、ここは丁寧な誘導に乗っておくべきだ。

五分ほどかかった脳内会議の結果、梅酒ロック割り、ポテトサラダ、だし巻きたまご、牛もつ煮込みという深夜には結局重いオーダーに決まった。早速、女将さんに注文をする。

「すみません、梅酒のロック割りとポテトサラダとだし巻きたまご、あと牛もつ煮込みをお願いします」

「梅酒のロック割りとポテトサラダとだし巻きたまごもツ煮ね！ 少々お待ちください！ あんたあ、だし巻きたまごもツ煮ひとつお願いーい！」

「はいよー」

女将さんは注文を受けると、店の奥の厨房に向かって声をかけた。口ぶりからして、旦那さんが料理をつくる担当なのだろう。そんなことをぼーっと考えていると、常連客と

思われる、まるで七福神のように幸福オーラ溢れるこれまたふくよかな男性が話しかけてきた。

「お嬢さん、今日は一人でここに来たのかい？ あんまり若い子はこの店に来ないからびつくりしたよ」

「ちよつと、ほてーさん、いきなり話しかけたらなにこのおじさんって思われるって！ お姉さんもちよつと困ってるじゃん！ほんと酔っぱらったらすぐ誰にでも話しかけるんだからもー。ごめんなさいお姉さん。このおじさんただのお人よしの酔っ払いおじさんだからあんまり気にしないで」

「いやいやえみりちゃん、僕は夜も遅いから心配で……」

「あ、全然大丈夫です、ははは……。ちよつと残業で終電を逃しちやって始発までどこかで時間潰したいなーと思つてたらここを見つけたので来ました」

本当のことを言うとどんな空気になるか想像もつかないので、ここはやんわりとしたことだけ伝えておく。

「残業かあ、お嬢さんも大変だねえ」

「えー、残業とか大変ですね金曜日なのに。社会人てツラー……」

「えみりちゃんもそのうち社会人になるんだから、他人事じゃないんだよ。よし、そんなお嬢さんにお酒を一杯プレゼントしよう。えーと、お嬢さん名前は……」

「あ、大黒みりです。あの、お気持ちは嬉しいんですけどまだ……」

布袋さんの気持ちは嬉しいのだが、まだ注文した梅酒が来ていないのでその状態で二杯目を頼むのは忍びない。かといって好意を無下にすることもできない。どうしようかとあたふたしていると、助け船がやってきた。

「はい、お客さん梅酒のロック割りとポテトサラダね！」

店の奥から出てきた女将さんの声とともに、梅酒のロック割りと小鉢に盛り付けられたポテトサラダが運ばれてきた。

「あ、まだ頼んだやつが来てなかったのか。いやー、申し訳ない！」

「ほんとにもー、布袋さんはすぐ突っ走るんだから。みりちゃんほんとごめんねー」
そう言うと、えみりちゃんは布袋さんに対して子供に対して言うようにぶんすかと叱り始めた。さつきサラッと名乗ったばかりなのにもう自然と名前と呼ばれてるし、何十歳も年上の人とまるで友達のように会話している。これが今時の女の子のコミユカなのかと内心驚きつつ、運ばれてきた梅酒とポテトサラダに目を向ける。

梅酒は少しでこぼこしたグラスに注がれており、その中心にはまるで氷山のようにゴツゴツとして透き通った氷と、うぐいす色をした梅の果実がふよふよとひとつ浮かんでいた。早速こぐりと一口飲む。サラツとした口当たりの良さに加えて、梅の自然な甘みと酸味が丁度よいバランスで感じられ、身体の中のありとあらゆる不純物が一気に浄化されるようなさわやかさが口の中に広がった。

その流れのまま、手をグラスから箸に持ち替え、ポテトサラダを一口分取る。具は、じやがいもときゅうりとにんじん、そして玉ねぎとハムといったオーソドックスなもので、まさに家庭のポテトサラダといった感じだ。そのまま口の中に箸をダイブさせ、味わうようにしてやわらかく嚙むと、マヨネーズのコクが一晩おいた煮物のようにしっかりと染み込んでおり、疲れ切った身体にじんわりと沁みるおいしさだ。小鉢に入っているから、お酒の肴として飽きずに食べ進めることができそうだ。

「おいしい……」

思わず声が出る。

「ははは、みのりちゃん。ここの料理はおいしいよなあ。僕もはじめて来たときは感激したものだよ。都会でこんな家庭的な味の料理がたらふく食べられるなんてね。特にポテ

トサラダなんて味付けが絶妙でさあ。僕のお気に入りの料理なんだよねえ」

「はい、もうすごくおいしいです。女将さん、梅酒もポテトサラダも最高です。なんとなくか、食べると身体に沁みわたってエネルギーが出てくるような……。そんな感じがします。すごく元気が出ました」

聞かれてもないのに、女将さんにペラペラと感想を言ってしまった。なんかうざかったかなと思つたが、女将さんをはっこりと微笑みを浮かべていた。

「あらやだ、そんなこと言ってくれるなんて私も嬉しいわあ。実はお店に来たときかなり疲れた顔をしていたから心配していたのよ」

「あ、女将さんもそう思つてました？　なんかすごい負のオーラが出てましたよね。私が期末課題ギリギリ間に合わなくて絶望してるくらい暗黒のオーラを感じました」

その例えはいまいちよくわからなかったが、とにかく初対面で心配されるほどに疲労感が出ていたらしい。

「そんなに疲れてるのがまるわかりだったんですね。なんか恥ずかしいです」

「いやあ、なんだかすごく疲れてるなあと思つたよ。そりゃあ残業で終電逃したら疲れよよねえ」

「いや、実は残業といつても上司に仕事を押しつけられた残業で終電を逃してしまつて……。本当は間に合いそうだったんですけどちよつと電話にでてたら目の前で電車が……」

「えー！ その上司超サイテー！ 今回の時代にそんなことする人なんているの!! 働くつて怖……。みのりちゃんも引き受けちゃだめだよそんなクズの頼みなんてー。ハッ、お姉さんつてもしかして俗にいう、しゃち……」

「こらこらえみりちゃん。仕事を頑張つてる人にそんなこと言うもんじゃないぞ。それにしてもせつかくの金曜日に残業なんてつらいなあ。他の人とか手伝つてくれなかつたのかい。僕なら手伝うけどなあ」

うちのクソ上司も布袋さんみたいな互助精神を持ち合わせていたらどんなに良かったことか。爪の垢でも煎じて飲ませてやりたいというのはまさにこのことか。全ての元凶であるヤツのことを考えたらまたマグマのようにふつふつと怒りが湧いてきた。このままだとすべてを呪詛のように吐き出してしまふそうだ。いつそ吐き出してしまおうか。怒りではらわたが煮えくり返りそうになっていると、女将さんがだし巻きたまごを持ってきた。

「お待たせしました、だし巻きたまごです！」

実物は写真で見た以上にぎっしりと密度がありながらもふわふわとしていた。ほんの少



し鼻から息を吸ってみると、程よくあたたかさを保ったほんのりとした出汁の匂いが香ってきて恍惚とする。さらに、皿の端には大葉に敷かれた大根おろしが添えてあり、彩りが豊かでさらに食欲をそそった。

すぐに箸を手に取り、すでに五等分にされただし巻きたまごのうちのひとつを優しくつかみ、さらに半分に割って口に運ぶ。口に入れた瞬間、かつおだしと白だしの香りがふわつと広がった。あまりにもふわふわで溶けてしまいそうなたまごをひと噛みすれば、さらに味が広がった。

「はあ、おいしい……」

怒りを抑え込むようにして、ポテトサラダと交互にバクバクと食べ続けていると、布袋さんが箸を置いて神妙な顔をして話し始めた。

「こういうときはちよつとプラスに考えてみるのもありじゃないかなあ。僕はよくやるんだけど、あのとき良くないことがあったからこそ今この経験ができているって捉えるようにしてるんだ。あのときのミスのおかげで今の事業が成功したとかね。今回の場合でいくと例えば……、残業がなかったらここに来て美味しい料理を食べることもできなかった……、とか」

励ましになつてゐるかな、ははは、と布袋さんは頭を掻きながら照れくさそうに言った。
「そうねえ……。私は悪いことのあとには良いことがあると思つてゐるのよ。それじゃないとなんだか釣り合わないでしょう？ だからきつとあなたにも絶対いいことが待つてゐるわよ」

「たしかに私も今日ちよつと運悪いなーって日があつても大体一週間以内くらいに今日ちよつと運良いなつて日があるかも。だから、みのりちゃんにもそのうちビッグなことが起きますよ！ ね、元氣出してよ！」

私のやけ食い姿を見かねたのか、気づけば布袋さんを皮切りにその場にいたみんなが私にこれでもかというほど励ましの言葉をかけてくれていた。何よりもその優しさがじんわりと心に沁みわたつた。

「みなさん、ありがとうございます。華金に残業とかいう最悪なことがあつたからこそ、この街にこんな良い居酒屋があることが知れて、おいしい料理と良い人達に会えて、気持ちも少しずつ消化できたのかもしれないですね。ありがとうございます」

「あらやだ、えみりちゃん。嬉しいこと言つてくれるじゃないの〜！」

「さあさあ、夜はまだまだこれからなんですからもつといきましょー！ もつとみのり

ちゃんの話聞きた〜い！」

「そうそう、あと五分くらいでモツ煮が完成するからもう少し待っててね」

「モツ煮かー、渋いねえ。ここのモツは本当にふりふりしててやわらかくておいしいんだよ」

「えーそうなんですか！ 早く食べたいです！」

「ていうかみのりちゃんってどんな仕事してるの？」

「えーと私は営業系の仕事をしてて……」

「はー、営業か。それ大変だなあ。僕も昔は営業をやっててねえ……」

こうして、お酒と料理とそれぞれの話の相乗効果に居酒屋内はどんどん盛り上がっていき、私のお腹と心はいつの間にか満杯に満たされていった。

あれから会話と箸がさらに進み、気が付けば朝の五時になるうとしていた。名残惜しいが、始発の時間が迫っており、そろそろここを出なければならぬ。

「女将さんすみません。もうすぐ始発なのでお会計お願いします」

「あら、もうこんな時間なのねえ。ちよつと待つてね、お会計はええと、一千五百円ね」

「ああ、みのりちゃん、まとめて僕が出すからいいよ」

「え、そんな悪いですよ」

「あー、みのりちゃん大丈夫大丈夫。布袋さん経営者だから。全然気にしなくていいよ！私もおごってもらったりしてるし。あ、いつもじゃないからね!!」

「はっはっは、ご飯食べながら楽しく会話させてもらったからね。そのお礼だよ」

「じゃあ、お言葉に甘えて！ ごちそうさまでした！ また来ます！」

「ありがとうございます！。またいらしてね！」

「みのりちゃんまたねー！」

そう言うと女将さんたちは私に向かってひらひらと手をふった。私も同じように手を振り返し、店を後にした。

外に出ると、すでに太陽が顔を出し始めていた。

それにしても、この街にこんな安くて美味しくて人がいいお店があつたなんて新しい発見だった。街って私が思うよりずっと広いんだなあ。そんな街の中に新しい居場所ができたみたいでホクホクした気持ちだ。また行きたいな。

それに、女将さんたちも言っていたが、奇しくもこの出会いは、先輩に仕事を押しつけられた挙句彼氏にフラれて終電を逃したことがきっかけだ。今思い返してもあのクソ野郎たちとあまりの出来事のひどさにげんなりするし簡単に許せるものじゃない。でも、女将さんたちの顔に免じて少しプラスに捉えてやることにする。

悪いことのあとには良いことがあるというのもあながち間違いではなく、その大きさ分ちやんと返ってくるのかもしれない。おいしい居酒屋知って新しい友人が増えて、お腹も心も満たされた。ものは考えようだ。この理論ならアイツらにもあとで天罰がくだるはずだ。いや、くだるに違いない。

そんなことを考えながら道なりに沿って歩いているうちに、最寄り駅が目前に迫っていた。駅前には、数時間前の景色からは想像もつかないくらいになんともすがすがしく静寂な空気が満ち満ちていた。今度こそ我が家に帰ることができる。そう思うと今にも踊りだしたい気分になった。

家に帰ったらとりあえずお風呂に入って寝て、起きたら今度こそ溜まった録画を消化するんだ。私に待っている良いことがたくさんある。帰ったあとのことに期待と想像を膨らませ、それを走力に変えるようにしてコンクリートを強めに蹴っていく。

ひとよの縁食

今日という一日はまだ始まったばかりだ。

ごちそうさまでした

たべる、というのはとてもむずかしい。

生きていくうえでどうしても避けられない食事。寧ろ避けようとするほどつまらなく、苦しくなっていく食事。私はこれがどうも苦手です。「食べる」って意味と選択肢がありすぎて、正直に言えばすごく面倒臭いことだと思います。

まず身体のことだけを気にするのなら、面倒だから食べないというわけにはいかない。しかしながら食べすぎてもいけない。おいしいものだけ食べるのもため。でもおいしくないものはおいしくないし、たべたくないし。変な時間に食べたら太るし。でも食事中心に一日の行動計画を立てられるわけもない。考慮しないといけないことがあまりにも多い。とても一日に三回実行すると想定されたシステムとは思えない複雑さ。いつ、どこで、なにを、どう食べるかで栄養も難易度も心持も変わる。

そう、心持も変わる。変わってしまう。これが一番厄介です。体のことだけ心とお腹は繋がっていて、そのせいで、あるいはそのおかげで、私たちは食事と真剣に向き合わざるを得ない。お腹が飢えれば心も飢えて、お腹が満たされれば心も満たされる。ストレスは

胃に穴をあけるし、おいしいものが楽しませるのは舌だけではない。その日の心の具合のせいでおいしいものをおいしく食べられなかったことや、逆に失敗した料理でも楽しく食べられたことが、きつと誰しもあるのではないだろうか。くやしいことに、ごはんアンチの私にも好きな食べ物とおいしい思い出があります。

さて、本編では主人公の大黒みのり（御年二七）がおいしそうに、そして楽しそうにごはんを食べていました。ロツクの梅酒、ポテトサラダ、だし巻きたまご、牛のもつ煮込み。どの居酒屋のメニューでもよく見るような品々。けれどこれらのごはんが彼女にとつてどれだけの救いになったのかは、ここで改めて語るまでも無いと思います。

ここまで長々と書いてきて、今更ふと思いました。もしかまだ本編を読んでいない人、先にあとがきから読むタイプの人もいたりするのでしょうか。もしそんな人が今この頁をつまんでいるのなら、まだ間に合います。あなたにとつてのおいしいものを片手に、本編へ移ってみてください。あるいはもう本編を読み終わってここにいらっしゃる方は、きつともう既においしいものを食べたい気持ちになっていることでしょうか。ということ、あとがきはこのへんで締めさせていただきます。こうと思います。

それでは、おそまつさまでした。

濡羽天

吐くなよ

田中
楓夏

男子生徒の黒く光る真っ直ぐな瞳を見て、
1匹のバツタのことを思い出した。

吐くなよ

鬱然とした森の中に、寂れた小屋がひとつ――

高校最後の茹だるように暑い夏の日、試合は三回の裏をむかえていた。

「なあんで野球部でもねえのに夏休み潰して応援しに行かなくちゃなんないんだよ、なあ渉？」

「カッコつけんなよ。休みだったってお前、どうせ一日中寝てるだけだろ？」

「暇人扱いすんなよ、俺だつてやらなきゃいけないことたくさんあんだよ。あー、どうせ応援するなら女バレとかがよかったなー」

球場は、七月の暑さに加えて観客たちの熱気で煮えたぎっていた。貴重な夏休みの一日を犠牲にして、たいして仲良くもないクラスメイトの応援に来た和田渉は、試合の進行よりも明日発売される予定の漫画のことを考えていた。それにしても、今年の夏は一段と暑い。渉は首に巻いた白いタオルで滴る汗を拭きながら、ふと後ろを振り向いた。変な話だが、なぜか自分の背後から視線を感じたのだ。

(まあ、気のせいだろう)

そう思っていた渉は思わず固まってしまった。

目が合った。三メートルほど離れた観覧席にいる見知らぬ男子生徒がこちらを見ている。気のせいじゃない。確かにこちらを、渉の顔をじっと見つめているのだ。

渉は思わず目を逸らしてしまった。男子生徒の黒く光る真つ直ぐな瞳を見て、一匹のバツタのことを思い出したせいかもしれない。それは、渉が小学三年生の夏、田舎に住んでいた祖父の家に遊びに行つたときに出会つたあの大きなバツタだ。

祖父の家の周りには、帰省してきた親戚の車が何台も停まつていた。

同じ年ごろの親戚がいなかつた渉は、遊び相手の必要ない「虫取り」をして毎日を過ごしていた。

昼ご飯を終えてしばらく経つた後、渉は今しがた捕まえたばかりのバツタを入れる虫かごを探しに、納屋の中へと入つた。渉は左手にバツタを持ちながらしばらくの間歩き回つていたが、納屋の中には祖父が仕事で使う肥料やスコップがあるばかりで、渉が求めている物はどこにもないようだった。納屋を出ようとしたそのとき、渉は部屋の隅に、一匹の黒い小さな蜘蛛を見つけた。その蜘蛛はひどく弱っているようで、手足をピクピクと震わせたかと思うと、急に動かなくなつたり、何かを探しているかのように巢の端から端までを行つたり来たりしていた。何分もの間観察しているうちに、渉はその蜘蛛が可哀そうに思えてきた。

涉は自分の左手に目を向けた。手の中には、一匹の大きな緑色のバツタが蠢いている。涉は右手の親指と人差し指でそのバツタの腹を掴み直し、そのまま蜘蛛の巣へと放り投げた。蜘蛛の巣に引つ掛かったバツタは、すぐさま左右二本ずつついている細い手足を懸命に動かし脱出を図った。しかし、動かせば動かすほど透明な糸はバツタの体を離すまいと絡みついた。

巣の端から糸を伝って蜘蛛がゆっくりと近づいてくる。迫ってくる闇を横目に、バツタは糸の中で必死にもがき続けた。涉はその光景がひどく恐ろしく思えて、納屋の外へと駆け出した。途中、納屋の中に置いてあったバケツに躓き膝を擦りむいたが、涉は気にも留めずに一目散に重い扉に飛びついた。しかし、扉が閉まるまでの一瞬の間に、涉はつい振り返って蜘蛛とバツタのいる方を見てしまった。

バツタはもう手足を振り乱して暴れるようなことはしていなかった。その代わりに、死んだように固まったまま、納屋のすぐ外にいる涉の目をじっと見つめているのだった。

その後、涉は祖父の手伝いで何度か納屋に出入りした記憶はあるものの、そのバツタがどうなっていたのか覚えていない。だが、涉は九年経った今でもなぜかあのときのバツタの黒く光る瞳だけは忘れることができなかった。

「うえっ……!!」

カキーンツと球を打つバットの音とともに、渉はその場にしゃがみこんだ。

「げっ! どうした渉、またか?! 吐きそうなのか?!」

「持病」と呼ぶには少し大げさかもしれないが、定期的にやってくる病名のつかない吐き気は、七年もの間渉をひどく悩ませていた。

「大……丈夫……トイレ、行ってくる……」

手洗い場で、渉は額の汗を拭った。

「はあっ、くそっ、なんだよもう!」

一週間に一度はこの吐き気に襲われる。この症状がいつくるかわからないことも渉を苦しめていたが、一番つらいのは吐きたくても吐けないということだった。いつもそうだった。胃の中のもものが込み上げ、喉元まで上がってくるのがわかるが、どう頑張っても吐くことができない。

(七年前の事件がなければ……)

思い出したくない記憶と一緒に濡れた手をズボンで拭おうとした。

「ハンカチ貸そうか」

顔を上げると、ついさつき自分を見つめていた男子学生が鏡越しに映っていた。彼の背丈は渉よりも五センチほど高く、ツヤのある黒髪はきれいに整えられていた。

「い、いや……大丈夫です」

渉がそう答えると、男子学生は右手に持っていた黄緑色のチェック柄のハンカチをズボンの右ポケットにしまいながら渉に向かって言った。

「和田くんだよ。嵩田小学校の」

「え？」

「青木綾斗、覚えてるでしょ」

「あ……」

青木綾斗——その名前を聞いて、渉はようやく思い出した。青木綾斗は、小学五年生のとき約一年間だけ渉と同じクラスだった生徒だ。渉は当時の綾斗がどんな顔をしていたかは覚えていなかったが、青木という名前を聞いて、彼が当時の人気アニメ『ゴツチャマン』のキラキラと銀色に光る大きな腕時計型の玩具をいつも学校に身に着けていって、先生に怒られていたあの生徒だということはどうすらと思いつくことができた。戦隊ヒーロー

ものなどどつくに卒業していた十一歳の渉にとって、いつまでも幼少期の趣味に固執する同級生の姿は印象的だったのだ。

「久しぶりだね、和田くん全然変わってないからすぐわかった。気分……大丈夫？」

「大丈夫……大丈夫。全然。それより、ほんと久しぶり青木くん、だけど……よく僕のこと覚えてたね」

「そりゃあ覚えてるよ。一緒の係だったし……それに、渉くん急にいなくなっちゃったからなおさら」

〈急にいなくなつた〉その言葉を聞いて、渉は再び自分の顔色が悪くなるのを感じた。

「和田くん？」

「大丈夫、ちよつと暑くて」

「大丈夫？ まあ、この暑さだもんね。そうだ、ちよつと冷たいものでも飲みにかない？」

試合も終盤に差し掛かるころ、駅前のファミレスは暇を持て余している学生たちで賑わっていた。



渉の元クラスメイトの「青木綾斗」は、親の仕事の都合で今は仙台の高校に通っているらしかった。東京に住んでいる彼の従兄弟の野球の試合を観戦するために、夏休みに二週間だけ東京へ遊びに来たのだが、肝心の従兄弟は練習中に足を骨折してしまい、今現在も都内の病院に入院しているそうだ。

二人はドリンクバーとフライドポテトをつまみに、運動会の組体操で骨折した長谷部という男子生徒の話や、当時嵩田小学校で一番怖かった沼津先生の話で盛り上がっていた。小一時間ほど昔話をした後、担任の吉野先生が夏祭りの金魚すくいで獲ってきた一匹の金魚の話になった。

「名前はたしか……」

「金太郎！」

「そう！ てか、そのまんますぎるよな。どうせならもつと凝った名前にすればよかったのに」

「ええ？ 名付け親は和田くんじゃなかったっけ？」

「違うよ！ 青木くんがどうしても言うから金太郎にしたんじゃない」

渉は同じ生き物係だった綾斗と代わりばんこに餌をやったり水槽掃除をした小学校の

頃の記憶を思い出した。金太郎は、片手に収まるほどの小さな橙色の金魚で、五年三組の生徒たちに金ちゃんの愛称で可愛がられていた。しかし、夏の暑さに耐えられなかったのだろう。夏休みの間に金太郎は死んでしまった。それを知った日、渉は一日中泣いたことを今でも覚えていいる。

金太郎の話をした後、渉たちは新作のゲームの話や昨日見たテレビ番組の話や陽が沈むまで話していた。

ファミレスを出る頃、外はすっかり涼しくなっていた。家までの道中で、渉は今日あったことを思い返していた。思い返しながら、また例の胸のムカつきが襲ってくるのを感じた。旧友と思い出話をするのは楽しいが、小学五年のときの話をしていると、どうしてもあのことを思い出してしまう。

和田渉は小学五年の夏休みに誘拐された。

複数いたと見られる犯人たちは、身代金五〇〇〇万円を和田家へ要求し、全額を受け取り後、渉の手足を縛っていたロープを解きはしたものの、渉をひとり森の中へ置いて行っ

てしまった。渉は身代金の受け渡しがされてから数時間後、森の中を彷徨っていると、山菜取りに来ていた住民に発見された。

犯人たちはなぜ金持ちとは言い難い、ごく一般家庭の和田家を狙ったのか、渉はそのキツカケになったであろう五年三組での会話を思い出した。

「すげー！ ニジイロクワガタだ！」

渉のクラスメイトの村本武蔵が、クワガタの入った薄茶色の箱を、休み時間にクラスのみんなに見せびらかしていた。

「昨日、お父さんに頼んで買ってもらったんだ」

「村本くん家お金持ちだねー！」

そのうち、クラスは自分がどれだけお小遣いを貰っているかという話になった。

「おれ一〇〇〇円！」

「うち二〇〇〇えーん！」

クラスメイトたちは競うように自分のお小遣いの金額を自慢げに叫びだした。

「ぼく一〇〇〇〇円！」

涉は嘘をついた。同級生に比べて、月に二〇〇円しか貰っていなかったことがひどく恥ずかしかったのだ。

「嘘だあ！ 涉くんDS持ってないし、涉くん家一つしか車ないじゃん」

「ほ、ほんとだよ、この前宝くじ当たったんだから！」

このときクラスで話した話がどこからか漏れて悪人の元へ伝わってしまったのだろう。少なくとも警察はそう踏んでいるようだった。

事件の翌日、涉のクラスメイトである石橋一生の父、石橋一郎が逮捕された。近所の目撃証言と、石橋家の納屋から事件に使われたロープが見つかったことから容疑者に浮上したのだ。しかし、石橋が頑なに容疑を否認したこと、納屋には石橋家の住民とは異なるサイズの靴跡が見つかったことから不起訴となった。

結局、涉の命は助かったものの、親戚中から掻き集めた身代金は全額奪われ、警察は犯人の逮捕はおろか、七年経った今でも未だ目星をつけられずにいた。

「うっ、だめだ、吐きそう」

渉は自分の胃のあたりを右手で何度かさすり、なるべく他のことを考えるよう自分に言い聞かせながら、まだ明るい街の中を歩いていった。

メールアドレスを交換した二人は、その後も何度か会うようになった。ときにはゲームセンターで、ときにはカラオケ屋やラーメン屋で、漫画や映画や好きなアーティスト等々、取るに足らない話を長々と語り合った。

そして、一日の最後は決まって、自販機で買った飲み物を近くの公園のベンチで飲みながら駄弁っていた。

この日は、話し始めてから一時間もしないうちに、自転車に乗った警官が二人のもとへ歩いてきた。

「君たち、もう暗いんだから、早く帰りなさいよ」

警官は大きな目でジロリと睨み、厳しい口調で二人に向かって言った。

「はい。青木くん、もう帰ろうぜ。補導されたらたまったもんじゃない」

渉はメロンソーダの入った缶を持ちながら立ち上がった。

「わかった。でも、別に悪いことしてるわけじゃないんだし、補導されても困ることないけどな」

「何言ってんだよ、めちやくちやめんどいぞ、きつと」

「和田くん補導されたことあるの？」

「補導は……ない……けど」

「……あ……誘拐されたときの……話？」

「うん、まあ……あの後、ちよつと脱水がひどくて、一日だけ入院して、退院してすぐ警察に事情徴収されて……そうそう！　ほんと何時間も聞かれてさあ、何人いたとか、犯人の顔とか」

「見たの？」

「犯人の顔」

綾斗が聞くと、渉は飲みかけたメロンソーダの入った缶を口から離した。

「俺、あの事件のことはほとんど思い出せないんだよね。なんか、ぼやけてて……思い出そうとすると下から得体の知れないものが込み上げてくる感じがして、気持ち悪くなっちゃってどうしても……思い出せない」

嘘じゃない。覚えていなかった。確かに覚えているのは、じめじめした暗い部屋と全身を覆う汗と、部屋の柱に書かれた下手くそなウサギの落書きだけだった。そんな断片的な

気持ち悪さが今でもまとわりついているだけで、事件の詳細はぼんやりと霧がかったように見えなかった。警察にも幾度となく聞かれたが、犯人の声も顔も記憶の奥深くに埋もれて見えなくなってしまった。

渉は俯いたまま、自分の足の親指に這い登ってくる一匹の蟻に目を落とした。綾斗の視線が俯いたままの自分の顔に向けられているのを感じていたが、渉は顔を上げられずにいた。これ以上あの事件について問いただされるのが怖かったからだ。

しばらくしてから、綾斗の「帰ろうか」という言葉で二人はようやく帰路についた。

夕飯のカニクリームコロッケとカボチャコロッケを交互に啄みながら、渉は綾斗のことを考えていた。ここ一週間ちよつとで数回会っただけなのに、昔から親友だったかのように仲良くなっていたことが少し妙だった。そもそも、渉は綾斗と自分が特段仲が良かったという印象はない。もちろん、同じ係をする中で距離は縮まったが、学校終わりに一緒に遊んだり、休日にごどこか出かけたったりしたことは、渉の記憶にはなかった。それが七年も経ってこんな仲になるんだから人間って不思議だよなあ、とテレビに映るハンバーガーのCMを見ながら考えていた。

「母さん、青木くんって覚えてる？」

渉はふとそう言いかけて口をつぐんだ。子供が誘拐される以上に恐ろしいことがこの世にあるだろうか。渉は病院へ駆けつけた父と母のやつれた顔を、一生忘れることはないだろうと思った。加えて、特に母は嵩田小学校にいた頃の話が極端に嫌がった。事件があったからすぐに隣町へ引越したのも、なるべく思い出したくなかったのかも知れない。だから、渉はあの事件を想起させるような言葉を彼らに投げかけるわけにはいかなかった。綾斗が仙台に帰る前日の朝、あと一つだけ連れて行きたい場所があると、綾斗からメールが届いた。

「ちょっと歩くけど、どうしても一緒に行きたい場所があったって」

「いいよ、どうせ夏休みの間は全部暇だし」

このとき渉は、綾斗が自分をどこへ連れて行こうとしているのか大方見当がついていた。なぜなら、降車した駅が渉と綾斗の通った嵩田小学校の最寄り駅だったからだ。

俺らが行くことは小学校に連絡したのだろうかとか、担任だった吉野先生はまだあの学校にいるのだろうかとか、昼休みに遊んでいた遊具はまだあるかなとか、渉はそんな些細

な疑問を頭の中でぐるぐると考えていた。

しかし、渉の予感は見事に外れた。綾斗は小学校を横切り、薄暗い森の中へと入っていったのだ。気温は三二度。流れる生ぬるい汗を薄手のシャツで拭いながら、二人は森の中を歩いて行った。森の中は木々の葉でところどころ日陰になっていて、思いのほか涼しかったが、砂利や斜面が渉の体力をひどく奪った。

「もう少しで着くから」

そう綾斗に言われて一〇分ほど歩いた後、目的地にたどり着いた。そこはひどく寂れた小屋だった。中はコンビニほどの大きさで、壁や床はポツポツとカビで覆われていて、窓ガラスは割れ、蜘蛛の巣があちらこちらに張り巡らされていた。

「青木くん、ここ、どこ……？」

この小屋に足を踏み入れた瞬間から、渉は全身に虫が這うような居心地の悪さが襲ってくるのを感じていた。ここにはいけない。ここにいることを身体が拒否している。渉は思わず小屋の中心に建っている柱に寄りかかった。そして、寄りかかるや否や、柱に書かれた小さなウサギの落書きが渉の目に入った。

「ここは……」

「覚えてないんだもんね」

綾斗が渉の背後からひどく落ち着いた声で話しかける。

「なんでここに」

「なんでここに連れてきた！」

「なんでっ、うっっ」

ズズズッと込み上げてきた吐き気に、渉は思わず自分の口を両手で押さえつけた。そんな渉をよそ目に、綾斗は話し続ける。

「君が誘拐されたのは八月一〇日だった」

「はあっ、はあっ、はあっ」

「調べたけど、気温も今日と同じ三二度だったらしいよ」

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ」

「もし誰にも見つからなかったら、君は死んでいたかもしれないね」

渉は一刻も早く小屋の外へ出ようと扉へ向かって走り出したが、それを阻むように綾斗が扉の前に立ち塞がった。綾斗の射るような眼差しが渉を貫いた。

「なんで、どうしてこんなことするんだよっ……」

「どうしても君をここへ連れて行きたかった」

「君があの日のことを思い出さないせいで」

「君が苦しんでいたから」

汗がばたばたと床に落ちる。渉は口を両手で押さえつけたまま、崩れるように床に両膝をついた。

「ぐっぐっぐっぐっ」

渉は小屋の真ん中に、虫のように小さく丸まっていた。

「知らない、知らない、知らない、知らない、知らない」

そう何度も小さく呟く渉に、綾斗はゆっくりと近づいた。

「いや、君は知ってるはずだ」

「和田くん今までごめんね」

綾斗は渉の縮こまった左肩に右手を置き、耳元で囁いた。

「もういいよ」

綾斗がそう言ったと同時に、渉の口から大量の吐しゃ物が吐き出された。

「いた」

寂れた小屋の中は、夏の騒がしさなどまるで知らないかのように、暗く冷え切っていた。渉は四つん這いになったまま、綾斗を見上げて言った。

「青木くんがいた」

あの日、この小屋の引き戸の隙間から、一人の少年が手足を固く縛られている渉を覗いていた。顔は逆光でよく見えなかったが、引き戸にかけた少年の右手に、見覚えのある銀色の玩具が光るのを渉は見た。

「兄ちゃん、なにしてるの？」

「おい、綾斗！ ついて来るなつつつたる！ あっち行つてろ！」

長い金髪を後ろにまとめた二〇代くらいの男が、小屋の外で突っ立っている綾斗に向かって叫んだ。

「やばいな、どうする？」

男たちは額から汗をたらしたまま、二言三言話した後、ゆっくりと渉へ視線を向けた。金髪の男が渉の胸ぐらを勢いよく掴んで鼻先まで顔を近づける。渉の小さな瞳に、男の

歪んだ口元が映った。

「おい、ボウズ、ここで見たこと聞いたこと、誰にも言うんじゃねえぞ。じゃねえと、お前の父ちゃんと母ちゃんがどうなっても知らねえからな」

「絶対に吐くなよ」

怖かった。だけどほんとうにヤツらがお父さんとお母さんを殺しにくるとは思わなかった。きつとケイサツがお父さんとお母さんを守ってくれてくれるって信じてたから。

だけど僕は言わなかった。だって青木くんもそうしてくれたから。夏休みが始まってすぐのある日に、僕がエアーポンプのスイッチを入れ忘れたせいで、金太郎は死んでしまった。青木くんはそれを知っていたのに、誰にも言わずに黙っていてくれた。だから、僕も何も言わなかったし、間違っ言ってしまわないように、あの日あの場所に青木くんがいたことを、記憶の底へ一生懸命押し込めた。

僕にも見つからないように。

小屋の中には渉の泣き声だけが静かに響きわたっていた。

それから一週間も経たないうちに、渉の証言を基に青木綾斗の兄とその友人たちが逮捕された。しかし、それと同時に渉に事件の真相を思い出させてくれた綾斗は、あの日を境に渉の前から忽然と姿を消してしまった。

彼はどうして僕に近づいたのだろう。警察は彼の兄たちを容疑者に挙げることはおろか、名前さえ把握していなかったのだ。しかし、青木くんは逃げるどころか、自分の家族を犠牲にしてまで僕に真相を知らせようとしていた。罪の意識に耐えられなくなったのだろうか、身内の犯した罪を、誰かに裁いてほしかったのだろうか。

そんな答えの出ない問いを抱えながら、渉は学校から家までの道のりを、一ヶ月前に買ったばかりの自転車と一緒に走っていた。コンクリートやタイルの剥がれた悪路がガタガタと渉の身体を激しく揺さぶるが、もう胸元から込み上げてくる苦痛に怯える必要はなかった。

夕方六時の空に浮かぶ赤みがかかった雲が、渉の頭上を流れていった。

帰宅後、同じ地区に越してきた友人の子供にあげるからと、渉の中学時代の制服を出すよう母親に頼まれた渉は、和室の中にある押し入れを開けた。押し入れの中は何年も使われていない客人用の布団や、かなり前に捨てたと思いついでいた怪獣のおもちやで溢れかえっていた。それらをなんとか端へよけようと奮闘していると、奥の方に見覚えのある段ボール箱を見つけた。

渉は埃に覆われた箱の中から嵩田小学校の卒業アルバムを取り出した。渉はあの事件の直後に転校してしまつたため、写真はほとんど掲載されていなかったが、当時担任だった吉野先生が「楽しかった思い出もあるはずだから」と、渉へ送ってくれたのだった。事件のことを思い出してしまつたから今まで一度も開いたことがなかったが、なぜか捨てられずに取っておいたのだ。

アルバムのページを何枚かめくると、そこには六年三組の生徒たちの写真と名前が五十音順で並んでいた。生徒たちは皆、いかにも子供らしい、屈託のない笑顔で写っている。クラス全員が揃った写真を見るという行為は、（ああ、こんな子いたな）とか、（そういえば、この子に貸した漫画まだ返してもらってないな）とか、忘れていた記憶が一気に蘇ってきて、一人だけの同窓会をしているようで案外楽しいものだと思つた。

そんな調子でのん気に写真を眺めていると、左上の端に青木綾斗の名前を見つけた。と同時に涉は息を呑んだ。

別人だ。写真に写っている「青木綾斗」は、涉がここ最近まで会っていたあの「彼」とは似ても似つかなかった。

「そ、そんなはずは……」

涉は自分の額に冷たい汗が滲んでいるのを感じながら、アルバムの中にいる少年と、頭の中にいる青年を見比べた。

「そんな……」

アルバムを持つ手を震わせながら、涉は二人を必死に重ね合わせようとしたが、やはり、輪郭、眉の形、歯並び、雰囲気までもが別人だった。

その代わりに、「あおきあやと」の隣には、「彼」とそっくりな顔をした生徒がこちらを見つめていた。

或る黒山の「正体」に迫る

吐き気がする。それも強烈な。

誰しもが経験したことがあるだろう。吐き気、実に不快な感覚である。私も小学生の頃は胃腸が弱く、よく胃腸炎にかかり吐き気を催していたものだ。烈しい日射しが差し込むトイレの、冷えた便座を覗き込んで、喉奥に詰まった不快の正体を必死に吐瀉しようとしていた。あの時一生分の胃腸炎にかかっていなければ、私は成人した今でも胃腸が弱いままだったかもしれない。

『吐くなよ』は、吐き気をトリガーとした気味の悪さと儚さとが、精巧なバランスで組み合わされた物語だ。主人公の和田渉は、原因不明の吐き気によく襲われている。そんな彼は、ある蒸し暑い夏の日、どこか惹きつけられる黒々とした瞳を持つ小学校時代の級友と再会する。その再会が涉にとって吉と出るか凶と出るかは、ここであえて明言しないでおくが、この出会いをきっかけに、渉は自身が誘拐された忌々しい過去と向き合うことになっていく。

ここからはぜひ、本作を読んでからお付き合いいただきたい。

さて、ご一読いただけただろうか？ では続けよう。

記憶は魂の一部と言っても過言ではないのかもしれない。例えば、記憶喪失になった男が、記憶喪失以前とは全く違う性格になってしまったとしよう。果たしてこの「男」は、記憶喪失以前の「男」と全く同じ人物であると言えるのだろうか？ 性格の核となるもの、その人をその人たらしめるものを記憶と定義するならば、記憶は魂と同義だと言ってもあながち間違いではないだろう。

渉の深層意識は、事件の記憶、言うなれば自身の魂の一部を抑圧している。しかし、渉の身体は、抑圧された魂の一部を意識の奥底から引き摺り出そうとする。一部であっても魂なのだ。必然の現象として、身体はそれを取り戻そうとする。そこに生まれる意識と身体のずれ——これこそが本作における「吐き気」の正体なのではないか。

最後に、絡み付くような暑さと鬱然とした森の織りなす不快感だけで終わらないのが、本作の魅力であることをお伝えしておきたい。

実は彼の正体はすでに作中で明かされているのだ。彼とは、そう「彼」のこと。僭越ながら、田中氏からのヒントをここに共有させていただくが、卒業アルバムの「あ」の次は

解説

「あ」が続くのではなく、「い」である。その秘密に触れた時、物語はさらに速度を増し、最後には吐き終えた後のような寂寞が訪れるだろう。

夏影に潜む秘密の静けさが、私の心を掴んで離さないのだ。

階口窓

宙ちゆう
の踊り子

千紘

「—— そうだ、宇宙旅行の行き先は・
エラダにしよう——」 (本文より)

死を決意した私の最後の宇宙旅行……
「幸せ」を探しているエラダ人・カーリュ……

出会うことのない二人の
美しくも不思議な宇宙列車が
静かに発車した……

今でこそ私は『作家』と言われることも多くなりましたが（こんなことを言うとは他の文壇の先生に嗤われそうです）、私にも下積み時代というものはあるのです。出した本が売れると「天才」だの、「文才がある」だの、皆さんおっしゃるのですが、この『下積み時代』がなければ私は今頃この世にはいません。今回はその下積み時代の話を是非してほしいと編集のMさんに頼まれました。Mさんに頼まれたのならやるしかありません。Mさんは大学の先輩で、どうしようもない私を幾度も救って下さった方ですから、頭が上がらないです。それこそ、下積み時代からの仲なのです。

どこから綴ればよいものか、今思うと、幼少期から作家の真似事が好きだったように思います。尋常小学校の頃から、自分で考えた御伽噺のようなものを書いては級友に見せていました。実を言うと作家を志そうと思ったことはありません。この真似事を続けていたら、気がついたら今日になっていたのですから。

こう言うのと自慢のように聞こえてしまうかもしれませんが、勉強で困ったことはありませんでした。家も周りとは比べると裕福でしたから、運よく帝国大学まで進めてしまったのです。そこで私は、自分の真似事がどこまで通用するのか試してみたくまりました。とあ

る先生（プライベートがありますから、名前は伏せますが、当時から相当有名な方でした）のもとへ自分の書いた原稿を送ってみたのです（今思うと、なんて失礼なことをしたでしょう）。数日後、なんとその先生からお手紙が来たのです。是非会ってみたい、と書いてありました。そこからその作家の先生との交流が始まったのです。私が書いた作品を先生が手直しして、先生の名前で出たことも幾度ありました。

そこですっかり私は作家気分になってしまいました。ろくに大学も行かず、真似事ばかりしていたものですから、両親からは随分怒りの葉書が来ていました。そしてそのうち勘当されていました。

毎日書き物ばかりしているものですから、日常で刺激がなくなったのだと思います、全然書けなくなっていました。そうなると先生の名で本も出せなくなる、稼ぎもなくなる、下宿のお金も払えなくなる、そこでしばらくMさんの下宿部屋に居候させてもらいました。当時Mさんはもう出版社に勤めていましたから、稼ぎがない僕に幾つか翻訳の仕事を紹介して下さいました。そこである程度暮らしていける銭をためて、（いつまでもMさんの邪魔になる訳にもいきませんし、ここには書いていませんが、これ以前にも大変お世話になっていたのです）、Mさんのもとを出ていきました。

Mさんのところを出てからまた自分であちこち原稿を持って行きました。それもうまくいかなくて、乞食にまでなりました。人の心は弱いものです、否定され続けると、書く気すら起きなくなる、書かないから持つて行く原稿もなくなる、何かする気も起きなくて、どんどん落ちぶれていく。しかし体は案外丈夫にできているらしい、そう簡単には壊れません。いつそ壊れてくれたらと、何度も思いました。

耐え忍ぶのにも飽きがきて、ふと頭に死が過ぎる。私は近くの橋まで歩きました。どこかの有名な話のように、隣に愛した人はいませんが、とても暑い日でしたから、川に飛び込めば涼しいまま死ねると思いました。これでやつと楽になれる。そう思って川底を覗くと、川が月の光に照らされてきらきらと光っているのです。上を見上げると、満天の星が綺麗でした。幼少期、家族で宇宙旅行に行った時の汽車で同じ気持ちになったのを思い出しました。

死ぬ前にもう一度、宇宙旅行に行きたい。それが私の原動力となりました。次の日から私は仕事を探して必死に働きました。最初は日雇い労働で、大工から下駄直し、紙屑拾い、人力車夫、靴磨き、とにかく何でもやりました。ある程度生活していけるようになったら、Mさんに何度目かわからない頭を下げて、翻訳の仕事や雑誌の記事の執筆などをもらって

稼ぎました。

翻訳の仕事の中で、とても美しい星話を訳したことがありました。それは『エラダ』という星の民話でした。エラダには、二十五歳になるまでに結婚できなければ、占いで結婚相手を決める、という掟があり、体の痣が原因で気味悪がられて二十五歳まで結婚できなかった男のエラダ人が、盲目のエラダ人の女性と六月に星の掟で巡り合って結婚し、とても幸せになる、という話です。

なんて美しい話だろう、運命があればこのことだ。私はひどく感銘を受けました。そう、宇宙旅行の行き先はエラダにしよう。そう思い、私は早速Mさんに、エラダに旅行に行くにはどの程度金があれば行けるのかを尋ねました。エラダは物価が安い星だから、エラダ往復の汽車代は高くつくが、それ以外は安く済むことも考えるとだいたい三十六万あれば一週間は滞在できる、とのことでした。なるほど、なかなか手が出る金額ではないが、貯金も少し貯まってきたところでしたし、もう少し仕事を増やせば、ちょうど六月頃にエラダに行ける算段が立ちました。

さて、ついに三十六万円が貯まって、出発の日がやってきました。小さな旅行鞆を一つ、

最低限のものだけ持ちました。この旅行が終わったら死ぬつもりでしたから、すべて引き払って、整理もして、この旅行鞆の中身が私の全財産です。一番後ろの車両の、一番後ろの窓際の席に座りました。

「まもなく、四番線から、土星行き、普通宇宙列車が、出発します。ご注意ください」
妙に区切りの多い駅員の声がホームに響き渡り、汽車は煙を揚げこの惑星を発ちました。エラダに行くにはこの惑星から直接行けませんから、土星で乗り継ぎをしなければなりません。まずは土星まで十時間ほど汽車に揺られました。

汽車の中は同郷の者ばかりではありません。宇宙人も多く乗っていました。土星行きの便ですから、やはり土星人が多いです。土星人は見た目はほぼ我々と近いのですが、頭上に天使のように輪が浮いているのです。天使は、実は土星人だったのではないのかしら。そうしたら、天から来るのも輪があるのも納得がいきましよう。しかし彼らにはもう一つの天使の象徴である羽がありません。服の下に巧妙に隠してあるのではないかしら。よほど彼らに聞いてみようかと思いましたが、私は土星語が話せませんから、それは止めました。

鞆の中には二冊の本とエラダ語の辞書を入れていました。二冊の本のうち、一冊は例の

エラダ語の本、もう一冊は私がそれを訳したものです。エラダに着くまでにもう一度星話を確認しておきたかったものですから、まず土星に着くまで辞書と原語の本でエラダ語を確認しました。エラダ語の翻訳を幾つか頼まれていましたから、挨拶くらいは喋れるのですが、せつかく一週間も滞在するので、誰とも何も話さない、なんてことはないようにしたかったのです。

お昼頃、火星に停車しました。お腹が空いたので、駅弁を一つ買いました。火星の名物の野菜が多く入った弁当でした。火星には極冠という北極や南極のような場所があり、その極冠に近い地域で育った越冬した野菜はとても甘くて美味しいと、主婦向け雑誌の記事を書いた時に見ました。実際、本当に甘くて美味しい野菜でした。

土星に向かう道中は流星群を見たり、星間渡り鳥の群れを見たり、なかなか楽しいものでした。無事夕方ごろに土星に着き、エラダ行き寝台列車に乗り換ええました。

私は一番安い客室の切符を購入していましたから、切符の番号をなぞっていくと、一区切りの空間に二段ベッドが二つの四人部屋に着きました。結局私の他にはもう一人しかいませんでした。もう一人は同郷の男で、年は私より少し上の人でした。寝る前に少し話をしましたが、愛する人を迎えに行くのだと言っていました。

目を覚ますと、また違う景色が広がっていました。土星に向かう時は寒い地域なので白い星屑が多かったのですが、エラダは暖かい地域にあるため赤っぽい星屑が多いのです。顔を洗い、食堂で軽く朝食を済ませた後は、日本語訳の星話を今一度確認しました。

ホームに降りると、そこには冬になったのかと錯覚するかの如く真白な景色が広がっていました。多くの人が結婚装束に身を包んだ人々でした。目を見開いて呆然と立ち尽くす私の耳に、皸枯れた声が入ってきました。

「お前さん、これを見るのは初めてかい？」

振り返ると、そこにはハンチング帽をかぶった老人が立っていました。

「俺の髪が黒かった頃から六月には駆け落ちが多かったが、この“ステーション”ってやつができてからはこのザマさ」

「駆け落ち、ですか？」

「ああ、此処にいる奴等は、二十五歳になるまでに結婚できなければ占いで結婚相手を決める、というエラダの掟に抗う奴等なのさ」

「何故抗うのですか？ この掟で幸せになる人はいないのですか？」

私はひどく興奮して手に持っていた本をめいっばい強く握りました。それに気付いた老人は言いました。

「その本はこの掟に希望を持たせる教訓みたいなものさ。現実はどううまくはいかない。いろんな事情でこの結婚をしたくない奴等がここにいるんだ」

そう言いながら、老人は意味ありげに動く純白を見つめていました。動く純白は必ずしも二人組とは限りませんでした。来る途中ではぐれてしまった様子の者、待ち合わせしている様子の者、中には涙目で相手の名前を叫んでいる者もいました。

流れる白を見つめていると、急に後から肩をつかまれました。振り返らされた視線の先には、浅黒いが透き通った肌に純白のドレスがよく映える、ブロンドの髪のエラダ人の女性がありました。何か名前のような単語を叫んで私を見たのですが、希望に満ちた彼女の顔は私の姿を確認した途端、暗い表情になってしまいました。私を相手の男性と勘違いしたらしいのでした。

「ラキア、ラキアを知りませんか！ 貴方によく似た、青い瞳のエラダ人です」
彼女は、息を切らしながら私を見つめて言いました。

「悪いなお嬢さん、こいつはさつきエラダに來たばかりの観光客だ。それにこんな人混

みじゃあ、なかなかあんたの連れを見つけるのは難しいよ。もしかしたらもう汽車に乗っているかもしれない、乗り場へ急いだほうが良い」

「そう、ですよ、ごめんなさい、ありがとう」

お礼を言つて彼女は去つて行きました。エラダ人も我々とそう変わりませんが、特徴的なのは横に長く先端が尖つた耳です。肌の色は様々いますが、彼女のような浅黒いのは珍しそうです。

私はたいへん複雑な感情でいました。必死に錢を稼いでやつとの思いで死ぬ前に来た宇宙旅行の地で待つていたのが、憧れとはかけ離れた現実だったのですから。

「この掟で幸せになつた方々はいないのでしようか」

「そりや、中にはいるだろうな。俺もその口だ」

「駆け落ちする人と、幸せになる人、どちらの方が多いのですか」

「その『幸せ』つてやつが何なのかにもよるが、その間の甘んじて受け入れている奴等が一番多いと思つぜ。この星で独り身の奴は、鰥夫あかもめか訳アリだからな」

「駆け落ちした人達は、何処へ行くのです」

「さあな。駆け落ちした奴等のことは詮索しないのが暗黙の了解だ。あまり用意もでき

ないまま知らない土地で暮らすんだ、苦勞はすると思つぜ」

ジリリリリリリリ

けたたましく鳴るベルの音がホームに響き渡りました。

「まもなく、三番線から、宇宙列車が発発します。ご注意ください」

放送に合わせて一斉に人がどつと汽車に乗り込みました。その時私も人混みに押されて、その老人とははぐれてしまいました。

押されるままに進んで行くと、汽車に乗り込んでしまったのでした。出ようにも、次々と人が乗り込んできて、降りられないまま汽車はエラダを出てしまいました。

私が押し込まれたのは先頭車両だったので、ぼうつとしていたうちに、全員が後続車両に移動してました。私は、何処か座れる場所を探そうと歩き始めました。皆あの混沌の中無事に相手を見つけられたようで、安堵の表情や嬉し涙をしている者もいました。よく見ると、エラダ人の男女二人組だけではありませんでした。片方が異星人の恋人、男同士、女同士の二人組も時々ありました。なるほど、あの老人が言っていた「いろんな事情でこの結婚をしたくない奴等」とはこういうことだったとは。我々の惑星では珍しい光景ですから、最初のうちは面喰いましたが、皆不安ながら幸せを噛み締めている様子を見る

と、性別や種族なんてものはどうでもよくなりました（やはり実際に見ると違うものです。皆さんも今は気持ち悪がったりしているかもしれませんが、異文化というのは最初は嫌悪感を示されるものなのです。実際に見て感じて見れば、存外、完全な悪というものは少ないのかもしれない）。

そんなことを思っているうちに、一番後ろの車両まで来てしまいました。一通り車内を見渡すと、一番後ろの通路側の席が空いていました。隣を見ると、先程私に声を掛けてきたエラダ人の女性が座っていました。俯いていて、表情はよく見えません。とりあえず座るために、私は彼女に声を掛けてみました。

「すみません、お嬢さん、隣はあいていますか？」

たどたどしいエラダ語で声を掛けると、彼女はゆっくりこちらを見ました。私の顔を見て先程のように一瞬目を見開いて驚きの表情を見せましたが、また期待を裏切られて泣き出してしまいました。

「ごめんなさい、私は離れます」

そう言って私はこの車両を離れようとしたが、

「待ってください、隣は空いています。どうぞ座ってください」

と、彼女が言ってくれたため、とりあえず彼女の隣に座ることにしました。エラダ語の辞書を引きながら、何とか彼女と会話を続けました。彼女の名前はカーリユと言います。彼女には愛し合っていた恋人がいましたが、両親から結婚を反対されて、二十五歳になつてしまったそうで、この結婚式の日には駆け落ちをしようという約束をしていたそうです。そしてその相手、ラキアが私そっくりということでした。

「この汽車の中にラキア氏はいましたか？」
彼女は首を振りました。

「私も、一番目の車両から順にここまで来ましたが、私に顔が似ている人は見ませんでした。もしかしたら、この後の汽車で来るかもしれませんよ。この後二人で行く場所は決まっていたのですか？」

「エレオスという星に行こうと言っていました。そこではこうして駆け落ちしてきた人達を支援している人がいると聞いたことがあるの。この汽車を途中下車してエレオス行きの宙船に乗り換えようと思つていたんです」

「では私達はエレオスに向かいますよ。もしかしたらそこでラキア氏と落ち合えるかもしれない」

「ついで来て下さるのですか？」

「私は貴女を二度も失望させてしまった。だから、貴女が幸せを掴むお手伝いをさせて下さい。乗り掛かった舟だ、最後までお供しましょう。安心して下さい、お金なら一週間エラダに滞在できる分と、帰りの切符代くらいはありますから」

私の言葉を聞いた彼女は不安げな表情のままお礼を述べました。

「そうだ、小指を出して」

私は小指を立てた左手を彼女に差し出しました。不思議そうに彼女は同じように左手を差し出します。失礼します、と言って、私は彼女の小指に私の小指を絡ませました。

「私、西園寺晃は、カーリユさんがラキア氏に出会うまでお供しますー指切りげんまん嘘吐いたら針千本飲まず、指切った」

彼女は董色の綺麗な瞳を見開いて、暫く自分の小指と私の小指を交互に見ていました。私はその様子を見て、この『指切り』は我が国の特殊なものだということを思い出しました。途端に恥ずかしくなって、私は必死に彼女に指切りの意味を説明したのでした。納得したのか彼女は私のあまりの必死さに注意がいつて、笑い出しました



こうして、私達の奇妙な宇宙旅行が始まったのです。

まず私達は、途中のステーションで降りて、カーリュの旅行支度を整えました。カーリュは南国の外国人のような容姿ですから、洋服がよく似合います。それに、肌は綺麗な浅黒さがありますから、白がよく似合うのです。洋服をよく見ていたら、白もただ一色ではなく、黄色味があった白から青みがあった白まで様々あるとわかりました。カーリュは青みがあった白だとか、混じりけのない純粋な白が似合いました。それに、赤だとかオレンジだとか、そういう暖色よりは、青だとか紫だとかの寒色の方が似合うのです。

白が似合うカーリュの性格も、色で例えると純白というほどに清廉で純粋でした。かといつて子どもっぽいこともなく、思慮深く礼儀正しい、生命としてあるべき姿だとまで思いました。

宙船に乗ってからは、エレオスに着くまで三日かかりました。その間に私は色々な話をカーリュから聞きました。生まれから今までの話、ラキアとの日々のお話も聞きました。カーリュは踊り子、ラキアは舞台の俳優をしていて、とある公演の際に共演したことが出たきつかけだそうです。ラキアは駆け出しの俳優だったけど人気があつて、公演後には

プレゼントの山が出来上がるのだそうです。「君も美しいから、人気があつたらう？」と聞くと、恥じらいながら否定しました。パトロンのようなものはすべて断っていたようです。私の話を聞かれた時にはぐらかしたり誤魔化したり、カーリユの方に話が行くようになりました。これから死にゆく人の話なんて聞いても退屈でしょうから。

宙船の旅はとても素晴らしいものでした。星屑の波に揺られながら、天の川を下り、道中に宇宙紫陽花の群生地もありました。帰りは宙船で帰るのもありだと思いました。

そうこうしているうちにエレオスに着きました。エレオスは我が惑星で言うところ地中海の辺りのような景色の星でした。透き通る青い海に白い砂浜、緑の葉の間からはオレンジのような実やオリーブのような実がのぞいています。

しばらく星を探索していると、エラダ人のような男女を見つけました。すかさずカーリユが二人に声を掛けました。

「すみません、エラダの星の民ですか？」

「ええ、そうです……、もしかして、駆け落ちしてきた方ですか？」

「そうです。あの、こちらで支援を受けられるとお聞きしましたの。何か知っていることがあれば教えていただきたいのですが……」

二人は、私とカーリユが恋人同士で駆け落ちしてきたのだと勘違いしたらしいのです。確かに、異星人同士の男女二人が不自然にこの星にいと、そう間違えるのが普通でしょう。もちろん、私の目的はカーリユとラキアが会おうまで見守ることですが、どこかこのまま勘違いが続いてしまえば良いのに、と思ひもしました。

「アキラさん、行きましよう。あちらの島で支援を受けられるそうです。お二人がボートを貸して下さいましたわ」

私達は二人にお礼を言つて、ボートを漕いで島に渡りました。島は歩いて一周できる程の小さな島で、森の中に白い土壁の教会のような建物が建っていました。私達は恐る恐る、木の扉をノックしました。

返事をしながら出てきたのはエレオス人の男性でした。うさぎのような耳が横に広がつていて、顔つきはうさぎのような山羊のような、とにかく草食系の獣星人の顔でした。彼は私達を見るとにこりと微笑んで、

「よく来たね、ようこそエレオスへ。どうぞ中に」

と言つて、奥にいた奥方と思われる女性にお茶を出すように言いました。奥方はエラダ人でした。エレオス人の主人、エラダ人の奥方、カーリユ、私の四人にお茶が出そろつた

ところで、話が始まりました。

「僕はルーラ、此処エレオスの出身だ。こちらは妻のソフィ。貴女と同じエラダ人だ。此処は、辿り着いた人なら誰であろうと受け入れる、駆け込み寺のような場所なんだ。去る者は追わず来る者は拒まず。でもひとつだけ約束してほしい。嘘はつかないこと。それがここに居るためのルールだよ。良いかい？」

私達は静かに肯きました。

「有難う。君達の事情を聞かせてくれるかな？」

カリーユは今までのいきさつをすべて話しました。ラキアと合流できるまではここで過ごさせてほしい、自分にできることならなんでもするからとにかく居させてほしいと涙目で訴えました。なるほど、そういうことか……と受け止めた後、ルーラは言いました。

「僕等がしている支援は、僕等の支え無しでも自立していけるようにするものなんだ。だから、此処へやって来た人達の話を十分に聞いて、必要があればもとの星へ帰すこともある。話を聞いたところ、ラキア君が此処へやってくる保証はない。だから、期限を設けよう。一週間。一週間で、ラキア君と何かしら連絡を取れるようにする。まずこれが第一目標だ、いいね？」

「はい、ありがとうございます」

「そしてアキラ君、君はどうする？ カーリユさんの身の振り方は決まった訳だが……」

「私は、カーリユとラキアが再開するのをこの眼で見届けるまで一緒にいると約束しました。だからそれまで一緒にいるつもりです。私は対象外でしょうから、此処に居られないのなら他に泊まれるところを探します」

「もちろん君も対象内さ。『辿り着いた人なら誰であろうと受け入れる』と言っただろう。こうして、エレオスでの滞在が始まったのです。

まず私達はラキア氏に向かって手紙を書きました。カーリユが直接書くとは破棄されてしまう可能性がありますが、私がラキア氏の友人のふりをして書いたのです。それから、我が故郷へ帰るための銭を稼ぎました。エレオスに来るまでに用意した旅費はほとんど使ってしまったから、そうする必要がありました。エレオスは実に美しい星で、此処で死んでも良いかと思いましたが、最期は生まれ故郷の土に還りたい気持ちがありました。

朝は、朝陽とともに起きて朝食の前にサンドジュエリイを集めました。晴れの日の海辺で星の形をした砂が朝陽を浴びると、綺麗な水晶に変わります。これはエレオスでしか

採れない石で、サンドジュエリイと言うのです。朝食後は集めたサンドジュエリイを買い取ってくれる業者のもとへ売りに行きます。ここまででいただいた午前中が終わります。昼食後はルーラ夫妻の畑を手伝います。夕方には皆で夕食の準備をして、四人で食卓を囲みました。こんなに心穏やかな日があることを、私は知りませんでした。

穏やかな日々の反面ラキア氏の便りは来ず、カーリユは、花が一枚一枚花卉を落として枯れていくように、日に日に翳りを帯びていきました。暇があれば郵便受けを確認し、対岸や空に彼の影を探していました。その頻度は日を追うことに増していきました。

こうして七日目の夜は明け、八日目の朝を迎えました。例の如く二人でサンドジュエリイを集めに行き、帰って来て、出る時も確認した空の郵便受けをもう一度確認した後、覚悟を決めたようにカーリユは言いました。

「アキラさん、朝食をいただきに行きましょう。朝食後、ルーラ夫妻とお話があります」と、私の瞳をしつかり見つめて言ったのです。

朝食後、ルーラ夫妻との話し合いが始まりました。

「さて、カーリユ。これから君はどうしていききたい？」

「アキラさんが私に約束して下さいましたの。『カーリユさんがラキア氏に出会うまでお供します』と」

彼女は私をじっと見つめて、言いました。

「だから、もう一度私がラキアと会えるまで、アキラさんについて来ていただくことにしました。約束して下さいましょう。お請けしていただけないのなら、この場で針千本飲んで下さい」

「確かに約束しましたが……」

私は意を決して本当のことを話しました。本当は死ぬ前の宇宙旅行で、死ぬ前に人助けをしても良いと思ったのだと言いました。

「では、私をラキアに会わせてからそのことは考えて下さい。それとも、あの約束は嘘だったのですか？」

カーリユの莖色の瞳が、私の心臓を真直ぐ射貫きました。もつとこの瞳を、満足するまで眺めていたい、死ぬ前に見るのは星空よりも彼女の笑顔が良いと思わされました。

「いや、確かに約束しました。カーリユさん、貴女がもう一度ラキア氏に会うまで、お

供させて下さい」

「ええ。宜しくお願い致します。小指を出して。指切りしましょう」

私達はもう一度小指を絡ませ、約束を交わしました。私は言い逃れしないよう、ルーラ夫妻に証人になっていただきました。

こうして私は生き永らえて、今に繋がっているのです。彼女は駆け落ちで星を出たばかりですぐにはエラダに戻れませんでしたから、一度こちらについて来てもらいました。もうお気付きの方もいるかもしれませんが、この宇宙旅行の話を基にして書いたのが、私の代表作『六月の花嫁』なのです。

こうして私達はお金を貯めてはラキア氏を探しに宇宙旅行へ行き、その体験を基に私は物語を書いています。こうして私が今日活動できているのも、彼女との約束の御かげなのです。

先日、珍しく宙外からの依頼がありましたね。私に演劇の脚本を書いて欲しいそうです。こんな機会はめったにありませんから、お話をお請けしました。今はその脚本を執筆中です。色んな星の出身の役者を集めて行うから、なるだけ多くの宇宙人が出る脚本にしてく

千紘

れと頼まれてましてね、ですからルーラ夫妻をモデルにした物語を書こうと思っています。
主演はエラダ出身の方だそうです。

情緒的な、余りに情緒的な

以前、千紘先生の作品を読んだことがある。今作とは系統が異なるが作品で、ユニークな世界観にたちまち魅了されたことを覚えている。その唯一無二な世界観と、近代文学の融合は、先生が織りなす美しい言葉と情景描写によつて、見事なシンフォニーを創造した。近代文学を愛し、なおかつ先生の宇宙を望んでいた私にとつて、願ったり叶ったりな作品だったのである。

読後、あとがきを書くに際して、先生にいくつか気になる点やこだわりを聞いた。それはまるで映画を観た後にパンフレットを開き、撮影の裏側を知るような「答え合わせ」と「新たな発見」の連続だった。そこから見えてきたのは、先生の文学体験や人生観がつぶさに投影されているのがこの『宙の踊り子』だということだった。

物語の序盤、作家志望の主人公が、生きることへの不安や倦怠感から死を決意する。その姿は、『人間失格』の大場葉蔵と重なる。また、この「宇宙列車」の由来は宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』であり、タイトルは川端康成の『伊豆の踊子』からきている。先生の文学体験がこのわずかな情報だけでも理解できる。私は、はじめの一文で、正確には一節と言う

べきかもしれないが、「近代文学の風」を目で、肌で感じた。厳選された言葉、言い回しその全てが、近代文学でしか見ることの出来ない、死語の数々である。それを生きた言葉として作品に散りばめ、奥深い味わいを創り出している。先生が培ってきた近代文学の世界を、読者である我々が追体験できるのである。

さらには、この作品の一つのテーマでもある「人生」についても言及しておきたい。自殺を決意していた作家志望の西園寺晃。死ぬ前に巡り巡って行きずりの異星人・カーリユと恋人探しの旅に出る。そしてその異星人をモデルに書いた本がきっかけで、彼は文壇で確固たる地位を築く。先生は、西園寺が希死念慮、つまり自殺願望を心のどこかで永続的に抱いており、おそらくその漠然とした不安は、今後消えることがないと語っていた。それでも、そのような不安の中でカーリユとの約束を守るため、奔走する姿に人としての魅力を感じるのである。では、彼はカーリユとの約束を果たした後は念願の死という選択肢を取るのだろうか。いや、おそらく彼は生き続ける。新たな生きる意味を見つけ、希死念慮を抱きながら、美しくも残酷な現世をさまよい続けるのではないだろうか、と考えるのである。

ある背景のほんの一例

阿智坂
しゆき

次の問題は
あなたの過去から
一部抜粋している……
かもしれません。

兄弟の
仲良し度
★★★

すぐに
差がつく
実践編



本作の内容 練習試合の朝に忘れ物をした拓実のため、「マドンナ」を連れて、誠は自転車で追った—

教科書やワークに載っている問題に、文句はいくらでも言える。でもその背景なんて空想したことはない。

「あのさあ、まこと誠」

「ん？」

帰り道の途中、横を歩く友達が少し嫌そうな顔をして話かけてくる。帰宅部の醍醐味は心身ともに自由で開放的な放課後にある。

「好きな子が彼女に送ったLINEとかをさあ、未来の高校生に読まれてたらどうする？
古典の時間にプリントで配られたりして」

「……え？」

「これは当時の高校生が恋人に送った言葉です。このやり取りをみて問題に答えなさい、とか。この言葉の意味として正しいものを選びなさいの。パターンもあるか……」

「へー、今日の古典は珍しく起きてたようで。なによりです」

これを皮切りに駅で別れるまでもうでもいいことを話した。

「じゃ、また明日。あ、弟のくえつと……そう、たくみ拓実くん！ 応援してるって言つといてく。試合も機会あれば見に行きてえわく」

「試合なあ……まあ見に行けそうなのあったら誘うわ」

「……誠く、あんま緊張すんなよ？」

俺の性格を知っていてこうやってからかってくる。友人と別れてからは妙に緊張して、電車のスピードがいつもよりもずっと遅く感じた。でもやっぱりいつも通りの時間に最寄り駅に着いた。

拓実なら大丈夫って思っているのも事実、でも気にかかるのもまた事実だった。

「誠ー！ ユニ！ もらえた！ レギュラー！」

部活で疲れているはずなのに、どこにこんな大声を出す元気が残ってるんだか。広いサッカーコートでよく通る声も、ここでは騒音でしかない。でも靴を脱ぎ捨てる乾いた音、部屋に部活指定のリュックを置くじつとりと重い音は弾んで嬉しそうな音にも聞こえる。リビングにバタバタと走ってくる音はとんでもなくうるさいけど。

「うるせーって、ご近所迷惑です」

「ごめんって！ それよりもらえたんだって！ もらえるとは思ってたけどさあ！ ほ

ら！」

これぞ青春という顔つきだった。ソファに座る俺の足元に置かれたエナメルバックに、拓実が手を伸ばす。黄色いユニフォームが闘牛士の赤いケープのように飛び出し、目の前に掲げられる。背面にはテカテカとした緑字で8とあって、なんとなくメッシュ生地を少し触ってみた。

「おゝ良かったじゃん！ てかもらえるとは思ってた、って聞くとすげえな。さすが拓実って感じ？」

「そんならい練習したってこと。俺だって、なんもしてないのに自信だけあるやべえやつじゃないよ」

「わーかってるよそのくらい」

「矢野先生だつてさ、いいかい、自己肯定感と自信は違う！ 履き違えるなよ！ っていつつも言うし。言いたいことわかるっしょ？」



拓実が担任の声真似をしながらユニフォームを身につける。俺はサッカーには詳しくないが、8はエースでもキーパーでもない番号だ。確か、多分だけど。でもそんな役割より、強豪校でレギュラー入りしたという事実、つまりユニフォームが今日の前にある。それを俺に報告してくれることがただ嬉しかった。

「あ、そういえばプロテイン届いてたからキッチンのとこ置いといたわ」

「さんきゅー」

意気揚々とキッチンに向かう日に焼けた首を見ていると、思わず昨日の夜のことを思い出す。

いつも早めに寝る拓実が、昨日の夜は珍しく遅い時間まで起きていた。控えめな鼻歌に合わせ、LEDに照らされた褐色の首が左右に揺れていた。そして独り言なのか、俺に言ったのかわからないようなぼんやりとした声で

「明日レギュラー発表になったさ。ちよつと緊張する」

と拓実が言った。

「レギュラー!?!」

ドキッとすると同時に、小テストのノリで呟く拓実にギョツともした。

「うん、今日言われた。ミーティングで。三年も引退したし、もうそろ練習試合もあるから決めとかなきゃなんじゃね」

「まーじか……」

「まじまじ」

こんな単調であつさりとした会話なのに、眠気に包まれかけていた目と頭を覚醒させるには十分すぎた。

そんな昨日の夜がもはや懐かしくなるほど、今の今まで俺の方が緊張していた。だって拓実が自主練や体力づくりをしていたのは監督やコーチ、チームメイトよりも知ってるから。だからこそ心臓は飛び跳ねるように動く。まあレギュラーに入りたいなら当然の努力だと思う。ただ、まず取り組んでみて、改善して、また調整して継続するという努力のサイクルは並大抵のことではないと思う。

拓実は好きなことにはのめり込むタイプだ。それに現実主義的というか実力主義的というか。そんなタイプだから自分の実力も客観的にわかっていないはずだ。

こんなに緊張しているのは俺だけ。拓実にも、なんでそっちが緊張するのと若干ウザがられている。いつもなら拓実のことでこんなにも緊張しないけど、今回は特別だった。な

にせ拓実の口から緊張という言葉が飛び出したのは久しぶりだったから。いつもはこいつなら大丈夫だつて気にかけるまでもないし、そういう兄弟の信頼があった。

「なんかさあ」

少し落ち着いた感慨深そうな声が、ぼーっと思いつに浸りながらユニフォームを眺めていた俺を呼び戻す。拓実はちりりともこちらを見ていない。この部屋のマドンナだけが俺らの視線を集めている。

「やっぱうちのユニの色さあ……バナナみたいな配色じゃね。南国〜って感じの色？」

昨日の夜の再来。何も考えていないような軽いその言葉の破壊力に、飲んでいたお茶が変な場所に入って咳込んでしまった。

それから数週間経った練習試合当日の朝、当然のように慌ただしい朝、俺らのマドンナはツヤのあるエナメルバックにいらつしやった。拓実は目覚まし時計かのように慌ただしく、けたたましい音を立てて準備をしている。目の前で慌ただしく動き回っているが、ウオーミングアップということにしたい。そうなると怒りを含んだお母さんの大きな声は指

示を出す監督やキャプテン、といったところだろうか。まったく面白くない例えだけど、寝起きだとこのくらいしか思い浮かばない。

「なんであんた昨日のうちに準備しとかないの！ 準備しときなさいよって言ったしよ！」

「だーいじようぶだつて！」

「忘れ物もあれだけど間に合うの、あんた！ 遅刻するよ！ レギュラーになったのに初っ端から遅刻かい！」

「そんなことしないって！ 間に合うから！」

トーストにたっぷり甘いジャムを塗るように、爽やかな朝に騒がしい声がこれでもかと思われたくらわれていく。

「誠お！ スマホとつて！」

半ば投げるようにして拓実にはすと、ぶつぶつと口に出しながら持ち物チェックをはじめた。こういう持ち物チェックというのは入れながらやるんだ、拓実くん。特に拓実の性格上、入れてからのチェックは間違いなく危険だ、入れた気になつてから。

「タオルは入れた、すねあて入れた、シューズも弁当も入れた、ポカリは入れて……ない！」

あつぶね！」

急いで冷蔵庫を開けて二升のペットボトルを取り出し出している。中身を移し換え、エナメルバックに半ば投げるようにして入れていた。エナメルバックからは水筒の底が逆さになつてみえる。

あの拓実が珍しくハプニングを起こさず、順調に準備をしている。その様子をソファからのんびりと眺めていた。しかしもうそろそろ家を出るといふ頃、俺もせつせと準備を手伝うはめになった。なんでって、拓実の水筒がしつかりと閉まっていなことが原因だった。

「うわっ、何分に出るんだっけ!! 十五分じゃなかった!!」
時間は進みすぎていた。

「あーやばいやばい、やばすぎる……誠! ほんとありがと! いつてくる!」
「いつてら! 遅刻すんなよ!」

前日に荷物くらい用意しておくと正直言いたかったが、まあそんな時間は当然ご用意されてない。ドア越しにいつてきますと大声が聞こえ、お母さんの大きな声もそれに答えた。玄関のドアが閉まる音に安心するが、疲れも一気に押し寄せてくる。

すっかり結露だらけの、まだほんの少し冷たい麦茶をソファで一口だけ飲む。一仕事を終えたとっても過言ではない疲れで、ソファの柔らかさが心地いい。

それにしても……いやあ、俺なら朝から緊張しまくり、というか寝ても覚めても、いいや一週間前から緊張と不安でいっぱいだと思う。周りに俺くらい緊張しいな男はいないくらいだ。桁違いに緊張しいな俺と違って、拓実は漢気と自信があつて、言いたいこともはつきりと言う。そのサバサバした性格は我が弟ながら尊敬する。

「いやーほんとに朝から騒がしい子、いつになったら前日に準備すること覚えるんだろうね」

ぬるくなった麦茶を飲んだとき、お母さんがリビングに戻ってきた。そのままキッチンに向かってブランチを作りはじめる。少し遅めに起きたうえ、朝からバタバタしたせいで朝ごはんを食べそこねていたからこれは絶好のチャンスだ。逃す手はない。

「俺も食いたい」

「はいはい」

手伝おうと立ち上がると

「簡単なものだから座っていいよ、こっちに二人いる方が邪魔だわ」

とのことで、お言葉に甘えてソファでスマホをいじっていた。そのうちいっぱい吸い込みたくなるバターのいい匂いがして、それからたまごの焼ける重低音がますます食欲をそそった。

ネットサーフィンとブランチの匂いを少しの間楽しんでると、母が怪訝な声で話しかけてきた。

「ん？ ちょっと、誠？」

「なに？」

「その椅子にかかっているのってユニフォームじゃない？ 拓実の」

早口気味のその言葉を聞いて息がはっと止まり、視線がきよろきよろと走る。慌てて振り返った。ダイニングにある椅子の背中には、目を引く蛍光色の黄色があつた。先ほどのある一場面がすぐ蘇り血の気が引く。ユニフォームの蛍光色の黄色、それが今は間違いない警告のイエローでしかなかった。メッシュでできた警告のイエローは風を受けて裾が揺れる、そのせいでセーフを示す緑色が飲まれそうになっていた。

「やばい、俺が入れ忘れた」

「なに、入れ忘れたって」

「あとで話すわ、それよりこれ拓実に渡さないと。あーどうしよ」

「お父さんが使ってるから車出せないし……タクシー呼ぶ方が遅くなるしね……」

「チャリで追いかけるわ、間に合うでしょ」

拓実が家を出てからまだ十分も経っていかない。自転車なら追いつける。

「でも、あの子走っていったんでない？」

「いや流石に自転車なら追いつくって、さすがに」

言い切る前に自転車の鍵をひったくるように取る。いつも冷たいと感じる鍵なのに、今はそれほど冷たく感じない。

「まあいいわ、なんかあったら連絡しなさいよ！」

「わかった！」

俺は玄関を飛び出した。

日射しが眩しい。初夏にしてはただでさえ高い気温なのに、無風がより暑さを感じさせる。でもそんな暑さが気になったのは一瞬だった。冷や汗が頭、顔から首、背中を伝って流れていく。その感覚が余計に焦りを自覚させて自転車に鍵がうまく刺さらない。焦れば焦るほど鈍い金属音が手元で小さく鳴る。最悪すぎる。最悪、最悪だ、よりにもよってユニフォームかよ。

「なんで入らないんだよ……!」

ガチャガチャと耳障りな音の何度目かでようやく鍵穴に刺さり、空気を入れたばかりの自転車でぐんぐん進む。ぐんぐんという響きはいいものの、土日の住宅地はやたらと車が出てくる。道は狭く、少し進んでスピードに乗ったと思えばすぐ足止めをくらうの繰り返しだった。急いでいる時ほどこういう現象に捕まるのはなんでなんだ、まじで頼むから早く行かせてくれ。黒い軽自動車で止まり、白のワンボックスカーで止まり、パステルブルーの軽自動車に至っては助手席の柴犬にやたらと吠えられまくった。

「吠えたいのはこっちだよ」

小声で悪態をつきながら四百mほどのアスファルトの直線をなんとか走りきり左折。拓実らしい後ろ姿は見えない。人気がないことを幸いに、そのままスピードに任せて立ち漕

ぎをした。脚がだんだんと重たくなってくる。目では拓実の後ろ姿を探し、脚は自転車のペダルを踏む。一心不乱だった。

でも少し進んだところでその脚も止まった。待てよ。よく考えたら、このまま行っても拓実はいないかもしれない。追いつくどころか会わないまま俺だけ高校に着くかもしれない。

「……どっちだ？」

高校までの道のりには大きく二つある。住宅街を通るから信号機がなく、ルートのには最短だけど運が必要な裏道。それと、信号機はあるが高校の門まで一直線の表の道だ。

裏道は高校までほぼ止まらずに行ける。ただ途中にある交通量の多い道路が鬼門で、頃合いを見計らって四車線を横断しなければならぬ。この道路をいかに早く渡れるか、というある種の運と賭けが必要なのが裏道だ。なんなら信号機指して表の道に変えた方が早いことだってある。

その表の道は、道幅はそこそこで交通量が多い。裏道と違って信号機が二か所あって、その一つ目は例の四車線道路にある。だから、車の量関係なしに二分くらい待てば鬼門をすんなり渡ることができる。そして校門まで一直線だ。

どっちの道も学校までは直線だ。でも四車線道路を突っ切るか、はたまた信号機に従うかの選択がタイムを左右するってわけ。ちなみに基盤の目状の住宅街を挟んでる道だから、信号機のタイミング以外で道を変更することはまずない。道変更するのに横道百mはあるからさ。

さて、拓実はどうちの道で行った？ 一本道とは言え信号機はまだまだ先にあつて、車の量は見えないから予想するしかない。こんな風に頭で考えている暇もないし、考えても仕方のないことなのはわかっている。時間が進めば進むだけ拓実も進む。

悩む時間もわずかに、結局俺は表の道を選んだ。住宅街や横を抜けていく車の量を見るに、間違いなく今日の交通量は多い。となると、裏道で行けば例の道路は突っ切れない。これは俺だけじゃない、裏道で行ったはずの拓実も同じだ。まあきつと、拓実は早く着ける裏道を選んだと思う。そしてなかなか例の道路を突っ切れず、焦って表の道にある信号機まで行く。そのまま表の道を行けば校門に近いし、わざわざ道は変えないはずだ。だから表の道を行けば見つけられる。これが俺の推理なわけだ。

手汗のせいで自転車のハンドルがいやに吸いつく感覚があった。照り付けるアスファルトの先の先をぐつと見つめて、思い切つてアスファルトを蹴り上げ自転車を動かす。二百

mくらい漕いだけなのに、もうやめてしまいたい衝動に駆られる。脚がさつきより重たい。少しだけ速度が落ちてきた。でも、カゴに入っているトートバッグからのぞくユニフォームをみると、重たい脚はふらふらと動いた。

踏んで踏んで、漕いで漕いで、一本道の少し先に拓実らしい後ろ姿を見つけたときは思わず声が出た。

「よかった……」

見つけた瞬間、漕ぐ脚はゆったりとした。

そのまま拓実を追いかけたところだったが、一つ目の信号機で停止した。案の定車は多く、裏道からこの道路を突っ切るのは難しいと思う。いい判断だったなあ俺。心のなかで安堵しつつ自身を褒めたたえた。褒美はアイスだな。

とはいえ、拓・実・は・こ・の・二・分・間・く・ら・い・の・間・に・も・先・へ・進・ん・で・し・ま・う。背中が妙に小さく見えてきて焦りが出てきた。光続ける赤色に徐々にイラつきと焦りが膨らんでくる。距離的に考えて、大声を出しても届かない。出してみる価値もないほど距離が開いている。歩幅の大きな拓実が、軽快に歩みを進めているのが車の隙間から見え、コマ送りに小さくなつて

いく。たったの二分が永遠に引き延ばされていく感覚だった。

その小さくなる背中を睨みつけるように見つめ、じれったく信号が変わるのを待つ。車の信号が青から黄色になり、少し間をおいて赤になった。そしてまた間をおいて歩道の信号が青になってすぐ、一度休息を挟んでずっしり重くなった脚を動かす。車の隙間から見えていた背中がどんどん拡大されていく。頑張るんだ俺、拓実にさえ追いつけばいい。

あと何度か踏み込んだら追いつく距離、その距離で住宅街から出てきた車に止められる。でも、この距離なら聞こえる。鼻から少し息を吸い込んで少しだけ大きな声を出した。

「たくみいー！」

車が半分ほどフェードアウトしたとき、こちらを見ている拓実と目があった。俺の顔を見るや否や眉と目があからさまに大きく動いた。

「え、誠お!! なにさ!!」

拓実に、追いついた。叫んだ俺が言える義理はないが、こいつ、声がでかすぎる。

「ユニ! ユニフォーム!」

「え、なにどういう? 俺持ってるよ?」

弾んだ息を整えつつ、かごに入れてあるトートバッグからユニフォームを取り出す。指の

間と手のひらが汗でぬめつく。焦りと申し訳なさから、それからエネルギー不足に加えて久しぶりの急激な運動で手が震えている。かつてのバレーボール部初日を思い出す震えと汗だ。

「さっき入れ忘れた……ほんとごめん」

「え」

拓実はユニフォームを受け取らず、エナメルバックの中身を控えめに確認しはじめた。こいつは目の前のユニフォームが二枚あると思っているのか？ 早く受け取って行かないと遅刻するだろ、と言いたいのには早い呼吸ばかりが繰り返される。

「ちよ、一応確認」

あのな拓実、確認するのは間違いなく今じゃない。今日の忘れ物に関してはあまりにもイレギュラーでダイナミックすぎた。エナメルバックの最深部まで荷物を調査し終えたらしい拓実が、ほっとした顔で俺を見てユニフォームを受け取る。

「ほんとだ……今心臓止まるかと思った」

「俺もついさっきまで心臓止まるかと思ってた。てか止まってたかも。は一間に合ってたわ……ほんと」

「届けてくれてありがと、音楽聞いてたのに誠の声聞こえたからまーじでビビった」
声でかすぎ、と状況に見合わず面白そうに笑っている。断りもなくエナメルバックをかごに突っ込まれ、派手な黄色は無事そのなかに沈んでいった。

「色々な意味ですいませんね、拓実さん。どうも二回も驚かせたみたいで」

「いや誠が謝ることじゃないっしょ、ユニフォーム入ってるか確認しなかった俺が悪いしまあ……そもそも水筒ちゃんと締めなかったのが、ね。やらかしたから。てか、そういうお人好ししかできない……なんていうの？ うまく言えないけど疲れるよ？ 確認くらいしろって怒ってもよくない？」

毒なのかドライなのか、サバサバしているのか……。俺がまだ息を整えているのをいいことに、そういう類の言葉が放たれる。そういうことを言いながら、エナメルバックの中で手元をせわしなく動かしている。

「いや……うん」

「でた、誠のお家芸、伝家の宝刀、はつきり言えないやつ」

見覚えのあるエナメルバックのチャックが閉められ、エナメルバックの重みがなくなつたかごが揺れる。

「今はそういうのいいからもう行けって、まじで遅刻する」

「だね」

「ほんと確認もしないで悪かった。頑張って、試合」

「だから謝らなくて……もういいや。頑張ってくるわ！ わざわざ俺のスニーカー履いて届けてくれてありがと！」

最後をわざとらしく大きな声で言い放ち、ワイヤレスイヤホンをつけて歩き始めた。生意気にこちらに手を振っている。頑張れの意味も込めて大きく振り返した。重すぎる脚の先を見ると、確かに拓実お気に入りのナイキのシューズがあった。

「どうりで自転車漕ぎにくいわけだ」

任務を達成した帰り道はやけに暑く感じた。あれほど情熱的に動いていた脚は優雅にゆったりと動く。脚が重すぎる、これは間違いなく筋肉痛まっしぐらだ。信号もまた捕まったが、今日は暑い、それにしても拓実には申し訳ないことをしたと思っっている間に青に変わっていた。

「ただいまー、死ぬかと思ったけど追いついたわ」

玄関でまだリビングにいるであろうお母さんに呼びかける。

「おかえりー、ユニフォーム忘れてたの気づいて良かったわー」

「ほんっと気づいてくれて良かった」

「して、なしたの？　なんか二人して準備してバタバタしてたしよ」

「それがさあ水筒の蓋ちゃんと締まってなくて。」

発端となった今朝の水筒事件をお母さんに話し始める。

「しかも逆さまにエナメルバックに入れてたから洪水になって。まあタオルの上で漏れたから、タオルがびちゃびちゃになったただけなんだけど。それで、そのタオルの近くにユニフォームがあったからさ、なんかちよっと湿ってて。なんとなく匂いついてたら嫌だなーって。……そこで良かれとね？　一応消臭スプレーして、椅子の背もたれにかけておいたわけ。それでもユニフォームは大丈夫ーってなって、忘れたわけです」

お母さんは時々相槌とリアクションを挟みながらホットサンド作りを再開し、スクランブルエッグを温めなおしてくれた。

「はー、それは災難だったね」

「うん、結構ね」

「準備不足と予想外の事なんて相性最悪だからね。あんなに二人して喜んできたユニフォームなのに入れたか確認しないの？」

「喜んできたから二人して当然入れたと思ってたんだって」

「まあ間に合ったからよかったね、とにかく」

パンにはホットサンドメーカー独特のきつね色の斜線が入り、包丁はサクッと入った。中から淡いチーズが雪崩のようにあふれる。俺はハムとチーズ、お母さんは俺とは具が違いうホットサンドだった。

「なにそれ」

「カルツォーネ風」

「カルツォーネ……ごめんわかんない」

「マルゲリータみたいな味」

「じゃあそれマルゲリータじゃないの？」

「レシピにはカルツォーネ風って書いてたの」

「ふーん。何入ってるの、それ」

「トマトでしょ、チーズとベーコン……それと、あれ、なんだっけパセリじゃなくて、うーんとあれさ」

「バジル？」

「それぞれ」

「やつぽぼマルゲリータじゃん」

白い皿に王冠のように輝くスクランブルエッグがトロトロと鎮座した。嗅いだだけで焼き色が思い浮かぶいい匂いはホットサンドだ。

安心したからなのか、机に並ぶ食事がごちそうにも思えた。

「それと、弟のために必死で追いかけたお兄ちゃんにサービス」

弟のお弁当の余りであろうたこさんウインナーが二つやってきて、つぶらで黒々としたゴマの瞳にじっと見つめられた。たこさんウインナーが俺を褒めちぎっている。その賞賛の視線を帰ってきた拓実に向けることを期待して、たこさんウインナーを仲良く口に入れた。

「じゃあ今日はー、五十九ページからだったねー。五十九ページだよー、五十九ページ」

元気も体力もありあまっている児童に負けない、はつらつとした女教師の声が教室に響く。その声に従って児童はさんすうの教科書をめくり、次の一声を待つ。

「みんな開いた？ じゃあ今日は四角二番からやるからねー、四角二番ー。……ひろきー、五十九ページだよー」

給食後の授業は数人がぼうつとしていて、必ずページで迷子になっている生徒がいる。先生が黒板に書いている今のうちだ、と言わんばかりにページを捲りまくる音が聞こえることも少なくない。優しい子がページを教えてあげる声もときたま聞こえる。

「よしじゃあ今日は二十四日だから……二十四番ゆうとー、四角二番読んでください」
「えっと……弟は、分速六十mで歩いて、家から、駅に向かいました。兄は、弟が家を出発してから、六分後に自転車で出発し、分速二百四十mで、弟の後を追いかけました。兄が、弟に追いつくのは、兄が、家を出発してから何分後ですか？」

指名された生徒はところどころ区切りながら、語尾が跳ね上がる可愛らしい読み方で文章題を読み上げた。

「はいありがとうございます！」

先生はしっかりと目をみてお礼を言ったあと、黒板に大きな白い字で今日のポイントを書

き黄色いチョークで囲んだ。それを見て生徒も同じようにノートに写している。先生が白チョークで文章題とヒントを書き、それをもとに生徒が問題を解こうと考え、発表する。そこに先生が説明を加えると四十五分はあつという間だった。

放課後、日陰のなかで水彩画のようにランドセルが二つ淡く浮かび上がり、楽しそうな話し声が聞こえる。

「さっきの問題さー、なんでお兄ちゃん弟のこと追いかけるんだらうねー」

「んー、すっごい大事なもの忘れちゃったとか」

「教科書とか？」

「そうそう！ でもうちのおねーちゃんだったら追いかけてくれない！ すっごい優しいおねーちゃんじゃないと無理だよ！」

「確かに！ うちのおにーちゃんもぜったい来てくれない！」

二人はおかしそうに声をあげて笑いあっている。さんすうの教科書も入った、淡く可愛らしい貨物列車をゴトゴトと揺らし、青になった横断歩道を少女二人は走っていった。

その横を、スーツを着たサラリーマン風の男が自転車を押しながらすれ違う。電話をしているようにやや焦っている様子だ。

「やっと出た！ あのさ、いやいいから聞けって！ 僕の家鍵！ 優希、間違えて持ってるだろ！ ……はあ、だよな。とりあえずそっちまで行くから。改札通らないで待ってて！」

電話を終えた男が高そうな自転車を漕いでいく。

この話は、よくある算数の問題の背景にあるかもしれない、あったかもしれない、ある一例に過ぎない。

一、〇〇〇字程度の自由記述解答

「教科書やワークに載っている問題」に対して、誰しも「文句」とまではいかないものの、「疑問」を感じたことにはあるのではないだろうか。筆者は所謂「無人島に何か一つだけ持って行けるとしたら、何を選ぶか」問題に対し、空気を読まずに「そもそも無人島に行くことになんてなるわけがない」と問題そのものの存在を否定してしまうような回答をしてしまう人間のため、在りし学生時代、様々な問題に触れては常に何かしらの「疑問」を抱いていたように憶えている。

毎年一月に行われ、全国の高三受験生の命運を分ける共通テストの問題に対しては、大概何かしらの「文句」あるいは「疑問」が大量に投げかけられる。もはや「物議」とも言えるだろう。国語の小説や古文の内容、英語のリスニングのイラストなど、問題の内容も多岐に渡る。今は亡きセンター試験時代には、地理Bや国語の評論問題などで勝手に登場させられた版權キャラクターの公式アカウントが、受験生や野次馬によって炎上したという事例もある。問題に何を感じようが個々人の勝手だが、その「お気持ち」の表明の仕方については、相手は自分と同じ生身の人間であることを前提に置いて考えるべきであろう。

ちなみに無人島問題で先のように回答すると相手から十中八九嫌われるので、同じ思考回路を持つ方は、是非筆者を反面教師にしていたきたい。一種のライフハックである。

さて、本文では主に算数の問題に焦点を当て、家を出発した弟・拓実の後を自転車で追いかける兄・誠が登場する。誠は『アキレスと亀』の二の舞にならずに、拓実に追いつくことができたのだろうか。是非本文^{本文}をじっくり読んで、その回答を探していただきたい。ところで、今年の四月から自転車のヘルメット着用が努力義務になったが、いずれきつと、完全な義務へ移行するものだと思う。自転車に乗る場面でヘルメットの描写がない新作も、いつかなくなってしまうのかもしれない。作者・筆者含め、我々も未来にとつての「過去」を生きているのだと痛感する。

なお、筆者は今まで数多くの黒歴史をシュレッダーに葬ってきたが、好きな子はおろか、友人に送ったLINEの内容が、教材として未来の高校生に読まれることを想像するだけで、胃が最高におかしくなりそうである。今後はデジタル方面も抹消していきたいが、思いつく度に過去の筆者が憎くて仕方なくなるので、いつそ筆者ごと葬っていただきたい。

化けの皮

吹風
佐梨



社会人女性が仕事のためにメイクにかける時間は平均十五分以内、というデータがあるらしい。ネットの海には「時短メイク」なるものの特集や動画が数多く放流されており、忙しい朝の時間を少しでも効率良く使えるよう、奮闘する女性たちの多さがうかがえる。彼女もその中の一人であった。

「うーん、なんかなあ……」

仕事終わりの彼女の姿は、●★ドラッグストアにあった。「TESTER」のシールが貼られた四色アイシャドウパレットの蓋を開け、指でとって手の甲にのせては、その質感や発色の具合に不満げな顔を浮かべている。そうしていくつか試していると、当然パレットの余白はなくなるため、彼女は近くのコットンとリムーバーを使ってまっさらな状態に戻していく。既に今日だけで五回目だった。

彼女はスマホを取り出すと、今度はそちらと睨めっこを始めた。ここ数日観てきた美容系インフルエンサーたちの動画を漁り、再びレビューを確認する。しかし、当たり前のことだが肌の色や発色具合は万人共通ではなく、また化粧品に求めるレベルは個々人によって変わってくる。彼女が今使っているアイシャドウは、容器の底面がほとんど見えている

状態であり、何らかの形で補充に迫られていた。妥協するしかないか、と彼女は試した中でもまだ使えそうと思ったパレットを買い物かごに入れた。かごの中は他に、オールーソワングジェルとSPF50+の化粧下地のみである。

きつと高望みのしすぎだ、と自らを納得させようとしていた彼女の前に、何やら店員がサンプルとチラシを持って寄ってきた。

「こんにちはー。試供品をお配りしていますので、ぜひお使いくださいー」

こういうのって貰っても実際使わないけど、かといって断るのもできないんだよね……
彼女は形ばかりの会釈をしてサンプルを受け取った。店員は続けて、

「あとこちら、現在テストターの募集を行っておりますので、もし良ければご協力ください」
そう言いながら満面の笑みをたたえて彼女にチラシを手渡した。サンプルを受け取ってしまった彼女に、チラシだけ断るといふメンタルはもちろんない。彼女は中身のない笑みのまま、ペラペラの再生紙を受け取った。店員はすぐに彼女から離れ、近くにいた別の人へ同様の声がけを始めていた。彼女はサンプルをバッグにしまい、まとめて入れようと思っていたチラシは、一旦しまわず申し訳程度に一瞥した。

「……『ミニットフェイスパック』？」

彼女はそのチラシから、次の内容を得た。

「ミニットフェイスパック」とは、●★ドラッグストアのプライベートブランドで開発された、これ一つで全てのポイントメイクができるフェイスパックのことである。スキンケア及びベースメイクを済ませたのち、このパックを顔の各パーツにぴったり合わせて貼りつけて十秒待つ。パックをはがすと、瞼や頬などの各パーツに色がのった状態になっている。単にはがしただけの状態だと、色の境界がくつきり見えて不自然であるため、上から指やブラシなどでぼかしを入れる。仕上げにパウダーを重ねることで、フルメイクが完成する。パックをつけてからメイクが仕上がるまで約一分ということから、その名がつけられた。個々人の希望に合わせて色や範囲のカスタマイズが自由にできる完全オーダーメイド製品で、現在一般販売開始を目指してテスターを募集している。

「——『謝礼あり。詳しくは従業員まで』……か」

彼女はチラシに記載された全文を読み、そのフェイスパックに興味を持った。彼女は朝の身支度に時間が取られることをとにかく嫌い、メイクが短時間でできるように模索を重

ねていた。眉毛には数日おきに夜寝る前ティントを塗り、一晩色素を定着させることで眉メイクを省略していた。彼女はビューラーでまつ毛を挟んで上げるのに時間がかかりすぎてストレスになっていたため、一か月半に一度パーマをかけることでまつ毛メイクも省略していた。

また彼女は仕事柄出張が多く、化粧品一式の面積を減らすことにもこだわっていた。実際、先述した彼女の底見えアイシャドウは、顔に立体感を作り出すシェーディングとしても使用できる影色のものであり、少ないコスメでフルメイクができるようにマルチユース製品を買うことが多かった。

時短メイクとマルチユース製品を求めていた彼女にとって、約一分でポイントメイクができあがるコスメの存在は理想そのものであった。彼女は勤め先が副業可であることを確認し、会計を済ませて店員に話しかけた。

後日、彼女は●★グループの事業所に呼び出された。

「お越しいただきありがとうございます。それでは、改めて製品テストの流れについてご説明します」

彼女は担当者から一連の詳細を聞き、質疑応答とテスター参加の同意確認を経て正式にテスターになった。まずはベースメイクのみの状態の顔を機械でスキャンされる。病院の検査のような感覚で、それが終わると彼女にはタブレットとタッチペンが渡された。画面には先ほどスキャンされた自身の顔が映っており、そこに自分好みのメイクになるよう、タッチペンで着色を施していく。顔は三六〇度スキャンされているため、顔の向きを変えながら着色を行うことで、どの角度から見ても違和感のないメイクに調整することもできるといふ。彼女は趣味でペイントソフトを使ったことがあったため、飲み込みが早く、グラデーションやぼかしもスムーズに行えた。色と範囲の微調整を繰り返してパックの処方を選定し、回答フォームからこの日のレビューを行って事業所を後にした。

数日後、彼女は店舗でパックの入った箱を受け取った。翌日から一日一枚五日間使用し、使い勝手やメイクの発色、時間経過による崩れ方、落としやすさなどの項目について毎日レビューを送信するらしい。彼女はテスターにしては随分短期間であるように感じた。

翌日、彼女はいつも通りのベースメイクを済ませ、念願のパックに対面した。化粧品がついているからか、パックにはそれぞれフィルムがついており、それをはがしてから顔に

貼りつけるのだという。パックには細かな切り込みが入れられており、顔の各パーツに貼ったりやすくなっている。その分、切り込み箇所付近は特に後でしっかりとぼかしてなじませる必要があるのだという。切り込みは、スキャンした顔の凹凸によって人それぞれ数や位置などの処方が異なっているため、これもレビューの項目になっているらしい。あまりにも手の込みようが凄まじく、この商品は企業側にとって利益が出るのだろうか、と彼女は心配に思った。

実際に貼りつけてみる。このパック一枚でアイシャドウもつくため、一般的なフェイスパックとは異なり上瞼の部分までパックがある。切り込みが入っているため、最後に目をつぶって上瞼の部分貼り付ける。顔にぴったりと合わせるのは結構難しいように感じた。貼って十秒待ち、力を入れずに優しくはがすと、しっかりと各パーツに色がついていた。既存の貼るアイシャドウと異なり、一回で使い捨てという仕様にはもったいなささを感じるが、はがした後のパックには色が残っていないかったため、まあ仕方ない。若干位置がずれたものの、発色具合も液晶で見たものと同じだった。指で色の境界線をとんとん叩くと、すぐに色がなじむためぼかしやすく、多少位置を誤っても修正がききやすい。仕上げにパウダーをのせて、彼女の顔面が完成した。

初日にしてはあまり手間取らずにできたうえに、「パックをつけてからメイクが仕上がるまで約一分」は実際慣れれば可能かもしれない。しかし、そもそもパックをつけること自体に時間が取られるため、「ミニットフェイスパック」という商品名は正直どうなんだろう、と彼女は思った。彼女は普段よりも余裕を持って出社し、昼休憩と帰宅後の二回チェックを行ったが、彼女のメイクはほとんど崩れていなかった。

二日目、三日目と日が経つにつれ、彼女はパックの扱いが上手くなり、最終日にはパックをつけること自体もスムーズにできるようになった。最終日は四日間に比べて暑くはじめとした一日だったが、帰宅後のメイクの崩れ方はさほど変わらなかった。彼女はメイクの持ちの良さに驚き、今まで買い物の際に●★ブランドのコスメなど眼中になかったことを悔やんだ。彼女は就職活動をしていた際、●★グループの説明会に参加したお礼として眉マスカラとリップを貰ったことがあった。しかし色が好みではなく、一度手の甲に試し塗りして友人に譲ったため、今回のテスターで初めて顔に使ったのだった。変な匂いもないし、肌への密着度が高い割にクレンジング後はしつかり落ちているのもポイントが高い。欲を言えば洗顔料だけで落ちてくれると完璧なんだけど、そうなると化粧下地を買い直す必要があるし、まあ十分か、と彼女は思った。

彼女は回答フォームにパックの総合レビューを打ち込み、最後の送信を行った。この時、レビューの自由入力項目にて、「ビューラーとマスカラを使う人の場合、この製品を使用しても到底一分ではメイクが終わらないため、製品名は再考の余地があるかと思えます。ですが製品自体はまさに私が求めていた理想そのものでした。テスターとはいえ、こんな素晴らしい製品を無料で使えるのは申し訳なさすぎますので、どうか一日でも早く販売を開始してお金を支払わせてください」などという少々熱量多めなお気持ち表明をしていた。

テスターが終了して二か月が経った頃、件のフェイスパックが正式に一般販売を開始した。彼女が事業所で行った顔のスキャン及び処方編集は店舗カウンターでできるようになり、わざわざ事業所に行く必要がなくなった。また、パック用のスマホアプリがリリースされ、一度顔のスキャンを行ったことのあるユーザーは、アプリからでもパックの編集や注文を行えるようになった。当初、企業が想定していたターゲットは、普段のメイクをより短時間で済ませたい社会人女性のみであった。ところが、舞台メイクやテスターといった様々な用途にも使えることがSNSで広まり、幅広く利用されるようになった。パックは五枚入と三十枚入の二つがあり、三十枚で税抜千円というリーズナブルな価格設定も、

人気を後押しした。彼女の自由入力欄を見た人がいたかは定かではないものの、商品名は「ミニットフェイスパック」から「メタモルメイクパック」に変わっていた。彼女はもちろんパックを利用し、普段の出勤前をはじめ、出張先でもその恩恵を受けていた。

「メタモルメイクパック」が発売してから数か月が経過した。とある週末、彼女は仕事上がりに●★ドラッグストアに向かった。先日ネットで注文していた翌月分のパックを受け取りに来たらしい。彼女は絶賛難航中のアプリ開発プロジェクトを抱えており、この頃は日々四時間近くの残業を行っていた。そのためか彼女はひどく疲れており、どうせいつもと同じように会員IDの確認をして、パックの確認をして、スマホで決済して……と流れがわかりきっていたこともあってか、店員とのやり取りも面倒で、おざなりな相槌ばかり打っていた。

それから数日経った月初の朝六時、彼女は先日受け取ったパックの箱を開け、すっかり習慣化したパックメイクを行った。いつもと切れ込みの数や位置が違うように感じたが、きつと仕様が変わったのだろうと彼女は気に留めなかった。パックを上からそとはがし、ブラシでサツサツと境界をぼかす。その上からパウダーを同じブラシにとってのせていく。

バックをはがした後は、もう顔を見なくても仕上げまでできるようになっていた。最後に確認として、彼女は洗面所の鏡に映った自分の姿を見た。

「……ん？」

さつきまでであったはずの鏡がなくなっている——いや、彼女の首から下の範囲については、鏡がすっかり鏡として職務を全うしていた。彼女は時間外労働に関する企業と国との取り決めである三六協定の上限ラインで反復横跳びしているような日々の業務に疲弊した結果、遂に幻を視るようになってしまったのかと感じた。一度目をしっかり閉じて、彼女はひと息ついてから目を大きく見開いた。

「え……誰？」

何度瞬きしても、鏡に映る彼女の姿は変わらなかった。

「え、うそ。ちよつ、は、何で、何で、」

彼女は鏡をまじまじと見つめた。彼女が昨日までしていた、オフィス用のブラウンメイクの面影はどこにもなかった。目尻に沿って細く引いていたアイラインは、幅が広がり上向きの緩やかな黒いカーブを描いている。瞼には赤のアイシャドウがのっており、単なる並行眉にしていたアイブローはアッシュブラウンに色を変え、角度を保って縦に短く横に

長くなっている。いつもより濃いシェーディングが、普段とは違う範囲に入っており、涙袋はキラキラ光るラメで強調されている。通常、ナチュラル見えするピンクの粘膜色を塗っていた唇には、存在感たつぷりの赤い艶リップがオーバーリップの状態でのついていた。頬は元々のメイクと変わらず、申し訳程度の薄さのピンクチークがのついている。

「……強い系？」

彼女は自分の顔面を見つめ、前にSNSで見た「強い女」メイクを思い出した。

「いや、待って、どうしよう。まずい」

彼女はこの顔面をどうしようか考えた。ジーンズOK・ネイルOK・金髪OKという見た目に寛容な職場に通っているものの、昨日までの好印象メイクをしたオフィスカジユアルな姿から、自分ウケをとことん貫いたような派手目な「強い女」メイクにいきなり変わるのぶっ飛んでいないだろうか。一度落として、改めてメイクをしようかとも考えたものの、諸悪の根源はついさつき開けた箱であり、他のパックも同じ処方ならまったく意味がない。なら残っている手持ちの化粧品で——とも考えたが、そもそも彼女はそろそろ入社する時間であり、悠長にメイクし直すような暇もなかった。彼女は仕方なく顔面を諦め、せめてこのバチバチなメイクに合うよう、プライベートで着ている服に着替えてダッシュ

で職場に向かった。

この日、彼女は職場で社員の注目的になっていた。むろん、見た目のせいである。彼女の近くを通った社員のほとんどが二度見し、中には入口の近くに貼られた座席表を確認しに向かう人もいた。彼女に用があった、直属の五十代半ばの上司は、彼女の普段の話しかけやそのような雰囲気や微塵も感じない、別人同然のその姿に化粧の恐怖を感じ、話すのをためらった。

「——あれ、せん……ぱい？」

彼女と同じ課の後輩が、おずおずと彼女に話しかけた。

「おはよう」

「わ、あ、おはようございます。今日の先輩、いつもと違いますねえ」

後輩は話しかけた相手が彼女で間違いなかったことに安堵した。

「あ……やっぱ全然違うかー」

「そうですね、あたしてつきり知らない人が先輩の席に座っているとびっくりしました。ま、声聞いたらすっかり先輩でしたけどね」

「え、私そんな特徴的な声してんの？」

「いや、そういうわけじゃないですよ……で、先輩その格好どうしたんですか？」

「ああ、これね……●★のバックで、ちよっと」

「先輩も使ってるんですね。……え、ああ、いや、あたしは使ってませんが、課の中にも何人か、使ってる方いらっしやるみたいで」

「へえ」

彼女は職場にバック仲間がいたことを初めて知った。

午後七時、彼女は残業を終えて帰宅した。彼女は真つ先に、朝に開封した箱からバックを全部取り出した。どのバックも彼女が朝つけたものと同じだった。そもそも色付きのバックなんだから、ちゃんと見ておけば良かった、と彼女は思った。彼女は箱の側面についたシールを確認した。このシールには会員IDのアルファベットが記載されている。

「えっと……待てよ、ID何だったっけ」

彼女はスマホを出してアプリの会員証を表示した。「THOKOEVS」とあった。

「あーコレだコレ。んで、こっちが……」

彼女は左手でスマホを持ちながら、目線を左右に動かしていく。T、H、O、K……。「あつ」

シールに記載されたIDは、「T-HOKODPG」だった。別の人が受け取るはずだった商品を、彼女は間違えて受け取ってしまったらしい。やっぱりか、と彼女は納得し、箱にバックを全てしまつて通勤用リュックの中に入れた。

翌日、彼女は数か月ぶりに手持ちの化粧品でメイクをした。ただでさえ入社時間がいつもより二時間も早い中、昨日まで睡眠に充てられた時間をメイクに使わざるを得なくなつたため、彼女は腹を立てながら出社した。昨日の面影は消え去り、また通常の彼女に戻つたため、引き続き職場の注目の的になっていた。彼女の直属五十代上司は、またしても彼女に話しかけることを躊躇していた。

彼女は仕事を片付けて午後六時に退社し、そのまま●★ドラッグストアへ向かった。パツクの受け取りを行ったカウンターで、彼女はパツクの箱を取り出し、店員に声をかけた。「すみません、これ、間違つて別の方の商品を受け取ってしまったみたいで、返品したいのですが」

「別のお客様の……ええと、一旦こちらで確認しますね。未使用ですか？」

「あ、一枚だけ使ってしまった……他は未使用です」

「わかりました。少々お待ちください」

彼女は箱を渡し、付近のコスメをじろじろ見ていた。その間、彼女と同じようにカウンターに箱を持って店員をきよろきよろ探していた明るい金髪の女性がいた。彼女は女性の存在に気づき、ちらりとその顔を見た。昨日、彼女が鏡で見た自分の顔面がそこにあった。

「あっ」

彼女は思わず大きな声を出した。二人には面識がないため、女性は若干驚きながら彼女を見た。女性は手に持っていた箱に目線を落とし、再び彼女の方に向けた。

「もしかして、あなたも……ですか？」

十分近く経って、確認を終えた店員が、もう一人別の店員を連れてカウンターに戻ってきた。彼女は引き続き待つことになり、先に女性への対応が始まった。どうやら女性も彼女と同様、別の人の商品を受け取ったらしいが、幸いにも、彼女は女性の注文した商品を受け取っていたため、取り急ぎ商品の交換という形で手を打ったようだ。



つまり、そういうことである。

「お客様、大変お待たせいたしました」

彼女が店員から受けた返答はこうである。まず、彼女が商品を受け取った先週の金曜日の夜は、とある大学生アルバイトがカウンター対応を行っていた。そのアルバイトが会員IDの確認を怠り、その時間帯にバック三十枚セットを受け取りに来た二十数人に対し、それぞれ別の会員IDの商品を渡してしまったのだという。その人数は、彼女の商品がバックにないことを確認した際に、店舗にあるバックのIDと、該当する客の決済履歴を照らし合わせたことでつい先ほど把握したらしい。そのため確認に時間がかかったとのことである。なお、受け取りの際にID違いを指摘され、正しい商品を渡せたケースもあったらしい、と店員は付け加えており、これに対して彼女は「おお客様にも非がある」と言われているように感じた。

「——というわけで、取り違いのあったお客様には、これから私どもの方で連絡を入れて対応していく所存でございます。この度は大変申し訳ございませんでした」

店員二人は彼女に深々と頭を下げた。

「ええっと、あのー……私が注文した商品って、今店舗にないんですね。あれって最短

何日でご用意できますか？」

彼女は今朝の会社準備を通して、バックが自身の朝にとってどれだけ大事なものを痛感した。もうバックがない社会人生活には戻れなかった。

「そうですね、改めて作るようになりますので、最短で明後日の昼頃にはお渡し可能です。ご
ざいます」

「じゃあ、同じ内容で三十枚セットをお願いします」

「かしこまりました。もちろん、料金はいただきますので」

そして二日後、彼女は店舗に向かい、今度は店員ともどもすっかり会員IDを確認したうえで商品を受け取った。次の会社日の朝、そのバックを使って普段通りの顔面になっていたため、彼女はようやくそこで一安心した。

彼女にとってささやかな平穏が、数日ぶりに戻ってきたのである。

「えっ!!」

その声で目を覚ました男は、様子をうかがいに目をこすりながら洗面所へ向かった。

「ふわゝああ……おい、どうし……だ、誰だ？」

男は完全に覚醒し、目を大きく開いて身構えた。

「お兄ちゃん、どうしよ、これ」

「あ、ああ、何だ、お前か。あービックリした」

男は年子の妹だとわかって安心した。それにしても、まるで別人のような顔つきである。

「もー信じらんない。あのバイト……やってくれたわね。そーいえば何かアプリからお知らせ来てたっけ……あーサイアク、久しぶりのお出かけだったのに」

男の妹は肺炎を患い、二週間入院生活を送っていた。無事に退院でき、この日は街で買い物をする予定だった。

「――待てよ、それならワンチャン……」

男は妹の顔を凝視しながら呟いた。「え、何……？」と尋ねる妹に、

「お願いがある」

男は深々と頭を下げた。

「今日の夕方、俺の彼女のふりをして大学に来て欲しい」

「はあ？」

「頼む、ちよつとワケありで」

男はこの頃、メンタルに難あり腕に傷ありな女から、ちよつとしたストーカー行為を受けていた。二人はある講義のグループワークで一緒になり、発表資料のことで連絡を取るだけの関係性だったものの、いつしかその女から好意を持たれてしまったらしい。男は告白されて断つたものの、女の諦めの悪さと都合の良い思い込みの激しさは一級品で、日に重みを増す愛に辟易していたという。

「ははあ、会えれば直接、もしくは周りが広めてくれれば……つまり魔除けてこと」

「話が早くて助かる。さすがにいつもの顔だとお前の身が危ないから」

「……はあ、いい迷惑じゃない。てか、家割れてないでしょうね」

「ああ、何とか撒いてるから、多分バレてないはず」

男の妹は半分呆れつつ、「そもそもこの顔だって、きっと誰かの——」と呟いていたが、

「な、今日の買い物代もつからさ」

男にそう言われたため、「来月の請求、覚悟しときな」と秒で聞き入れた。

夏至が過ぎたばかりで、まだ昼間のように明るいつ夕方、男の妹は五限終わりの男と敷地

内で合流した。男は美形で学内の有名人であり、家を出る前に「彼女と待ち合わせしてる」と口の軽い友人に流していたことも功を奏してか、嫌でも周囲の注目を集めている。

男は「来てくれてサンキュー。あ、荷物持つよ」と妹が肘に提げていた紙袋を三つとも貰い、自身の肩にかけると、改めて妹の顔面を見つめた。

「しかしやっぱ、その顔すげーな」

「いや、こっちは大変だったんだから。これに合わせる服なんてインターンのやつくらいしかなかったのよ」

「どーりで社会人みたいに見えるワケか。ま、いや、帰るぞ」

男は辺りを一通り見回し、妹の手を取って正門へ歩き出した。

「……あれ、走った方がいいやつ？」

「いや、大丈夫。あいつ六限あつから。今日模擬授業の担当らしいし、ブッチしねえだろ」
「えっ教職取ってんの。おもしれー女にも程があるわ」

二人は笑って話しながら敷地を出た。いつも通りの男と、仕事上がりのOLのようなブラウンメイクの妹の姿を、校舎の二階から見つめる人影があった。

「いやービックリしましたよ、恋人いたんですねえ」

彼女は出勤早々、デスクでカップ麺の出来上がりを待つ後輩からそう言われた。

「誰の話？」

「先輩に決まってるじゃないですか」

「え？」

彼女は何の思い当たりもなく、逆にあるなら母親を黙らせる材料にしたいくらいだった。

「最近先輩、やけに帰るのが早いなあとは思ってましたが、彼氏さんいるなら納得ですね」

「違う、それは残業のしすぎで今月はもう時短勤務しか……つとにかく、彼氏はいない！

もちろん恋人も!!」

「あーだから今日は昼出勤で……え、じゃあ一体アレは……」

「アレ？　そもそもどーやって知ったのさ」

「ゼミの後輩から送られてきたんですよ、校内の有名人に女がいた——って。コレです」

後輩は彼女にスマホの画面を見せた。そこには彼女との共通点しか見つからないほどの

人が、美形の男と手を繋ぎながら歩いている姿が映っている。

「は、知らん知らん。え、待ってこれいつのヤツ？」

「先週の金曜の、えーと、午後五時半過ぎ……らしいです。先輩確かその日、四時にはもう上がってましたよね」

「確かにそうだけど、私その後買い物行ってすぐ帰ったから、五時半過ぎにはもう家にいたし、人違いだって。まあ確かにこの人、私に似てるのは否めないけどさ」

「似てるっていうか、ここまでくるともはや先輩以外考えられないですよ？」

「でもこれ絶対私じゃない。まずこの人知らないし、この服も持っていないし……それにさ、よく言うじゃん、世界には同じ顔の人が三人いるって。偶然、偶然。そんなものでしょ」

「そうですね……先輩この前、——あっ」

先輩は丁度鳴ったスマホのアラームを止め、カップ麺のふたをべりつと剥がした。

「ま、そこまで言うなら本当は別人なんでしょうし。なーんだ、ちよつと残念」

「残念って、どういうことよ……あ、お知らせ見なきゃ」

彼女は「てかアレ、盗撮じゃないの……？」と呟きながら自席に座ってPCを立ち上げた。そんな彼女を横目に、先輩は同封の液体スープを混ぜて麺を勢い良くすすり始めた。「便利なものには裏がありますからねえ」

それから数週間経ったある休日の昼三時、彼女は行きつけのまつ毛サロンでパーマをかけ直してもらったついでに、業務スーパーで買い物をしていた。推しの誕生日を間近に控え、ここ最近推し活がまともにできていなかったこともあってか、当日は推しの好物を作ってお祝いしようと思われ彼女はスーパーを買いたい物かごに入れた。他にも特売の野菜や魚などを次々と手に取り、かごは商品でいっぱいになった。

スマホで支払いを済ませ、彼女はエコバッグを左肩に提げて地下鉄の出入口へ向かった。アーケード街をやや早足で進む彼女の背中に、突然ぐさりと包丁が刺さった。彼女のベージュ色のTシャツにはすぐに真っ赤なシミができ、彼女は意識を失ってその場に倒れこんだ。辺りが騒然とする中、彼女の背中に刺さった包丁を引き抜いた女は彼女に跨り、彼女の背中を何度も躊躇なく刺していた。女は自身の腕の傷が見えなくなるくらいの返り血を浴び、力任せに両手を上下に動かしながら、「あたしのカレを……っ許さない………絶対に許さない………!!」と繰り返していた。

彼女は女と面識がなかった。

後日、「メタモルメイクパック」は、諸般の事情につき販売終了となった。「人の問題であつて商品の問題ではない」という反対の声も若干数あつたものの、店の判断にはある程度妥当性があつた。こうして今までの苦勞が、数か月ぶりに戻つてきたのである。

ネットの海には今でも、美容系インフルエンサーによる「時短メイク」なるものの特集や動画が、時のコスメを交えながら、数多く放流され続けている。

便利な道具と量産されゆく個性

SNS世代であれば、誰でも一度はネット上で話題になった便利グッズやライフハックを試してみたいと思ったことがあるだろう。化粧品や美容法も同じだ。コスパが良くて時短になって、かつ自分に合ったメイクができると話題のパックがあれば、あなたも試してみたいかなるのではないだろうか。

この「メタモルメイクパック」一つあれば、毎日同じクオリティーで自分の好みに合ったポイントメイクがほんの数分で完成する。発色も化粧持ちも良く、それでいて学生にも有難い価格帯という優れものだ。

しかし、そんな便利で画期的な化粧品でも、頼りすぎには要注意である。毎日同じクオリティーの化粧をし、毎日同じ顔で外出する。やがて化粧で飾ったそれがその人の顔となり、個性となる。すると何が起ころか……。それはぜひ本編を読んで確かめていただきたい。

ところで、女性はなぜメイクをするのだろうか。綺麗でいたい、可愛く見られたいという個人的側面だけでなく、マナーや身だしなみといった社会的側面も大きいだろう。社会

に出たらマナーと言われるメイクが、学校では制限されるという問題に関しては、近年マスコミやネットを中心に議論が後を絶たない。

この物語の主人公ともいえるべき会社勤めの「彼女」もまた、どれだけ疲れていても、どれだけ忙しく時間を惜しんでいても、時短メイクを模索しながらしつかりとオフィスメイクをして入社する。一方、作中の学生である「男の妹」は、OLの「彼女」とは違う流行りのメイクを楽しんでいると推察される。女性たちはそれぞれの目的をもって、またそれぞれの感情を抱いて、日々メイクに励んでいるのだ。そうしてそれが、個性の一部となつてゆく。ここ数年、量産型と呼ばれるメイクをよく見かけるが、文字通り「量産」されてゆくのは、メイクだけでなく個性そのものではないかとも思われる。

時代や流行にとらわれず、好きなようにメイクを楽しみたい。とはいえ、こんなに便利なパックがあつたら、きつと使いたくなるだろう。SNSで「バズって」流行るだろう。もしかしたら、近い将来本当にこんなパックが誕生するかもしれない。そうなったとき、自分の個性をすつぽりと「化けの皮」に隠さないよう注意したい。

夢のままにまに

藍鏑 薰衣

目が覚めると、そこは
真っ白でキラキラした世界でした。

甘く、かわいらしい、おかしい世界に
踏み入れたなら、
この世界の虜になる……

無垢な少女と

『六の汚れなど知らない
『六のああの頭が動く』

無機物の友達が織りなす、

令和の・異界・小説！

鈍い眼がゆらゆらと上下し、幼い少女特有の大きな瞳がぼんやりと開かれる。リナが目を覚ますと視界の端から端まで広がる白。そのたった一色の世界だった。重力を感じないほどふわふわと漂い落ちる雪、ちらちらと太陽の光を反射させ銀箔衣装で踊る枝葉。円を描くように並ぶ木々たちは重そうに地面に向かって枝を伸ばしている。それはここに迷い込んでしまった少女に頭を垂れているようだった。

ここはどこなのかしら。見たことがない景色だわ。お休みの日は毎日お母さまが外に連れて行ってくれるのだけれど……。うん、やっぱりここは初めて来たわ。お母さまはどこかしら？

「やあ、こんにちは！ 君はどこから来たんだい？」

どこから現れたのか、足音も立てずにそっとやってきて、控えめな小さな口から発せられた言葉が鈴の音のようにやわらかくリナの元に届いた。彼の姿を一目見ればこの住民であることは誰にだってわかる。リナよりは少し背が高く、金色の髪の毛の隙間から、スカイブルーの瞳が覗く。透かせば向こう側が見えるようなシフォンのレース、舞い落ちる結晶がしみ込んだように輝く裾を揺らしてリナに近づき、首を傾げた。

「ええっと……気づいたらここにいたの」

「そうか！　そういうこともたまにあるよな！」

……そうかしら？　そうよね、そういうこともあるもの、うんうん。ここはきらきらしていてもキレイだし。絵本で見た魔法の国みたいなもの。ちよつとの不思議があってもおかしくないわ。

リナは非常に素直であった。そのうえ、細かいことにいちいちつかかるような偏屈な子ども、というわけでもなかった。ほどほどに明るく社交性もある。人見知りもなかなかしないため、友だちは多い……なんてこともなかった。子ども同士の喧嘩や言い争いというものはたかが知れているのかもしれない。しかし、リナはその素直な性格で同年代の子どもを傷つけることがまあまああった。いや結構頻繁にあると言っても嘘ではないかもしれない。兄はいるが年も離れており、事情が事情だけにここ数年は会っておらず、母や祖父、それとお気に入りの人形に囲まれて生活しているがゆえに遠慮というものをなかなか理解できない環境にいる。つまり、好き嫌いがはっきりしていると云っていい。

「ここはとでもすてきね。きらきらしていて。初めて来たのだけれど、ここはどこ？」

「うん、とても綺麗だろう。ここは氷雪の国、女王様のお城から、いち、に、さん！　三つ橋を渡ったらこの国さ。ほらこの服も素敵だろう？」

カチャカチャと食器をいじる音だけが部屋に響いている。ただいまの時刻、午後二時三〇分、昼食を終え、一息ついたころ、彼女のおやつにあわせて殆ど毎日催されている。今日も始まった、この時間とはつまりお嬢のティータイムなのだ。私、いや我々はこれを特別好んでいるわけではない。ほどほどに裕福なお嬢の家はそこまで窮屈ではないし（居心地がいいかどうかは別の話である）出てくる紅茶もお菓子も見慣れたものではないこともまあ、時々あつたりする。母親の手作りであつたり、お土産のちよつと高い焼き菓子であつたり、近所の駄菓子屋のチョコレートであつたりする。このティータイムとは何かつて、わかりやすく言ってしまうえば所詮、『おままごと』でしかないのだと私は思っている。参加者はお嬢とお嬢の友だち数名。その中でも私は常連のお客様と言ったところだろうか。招かれてはいるわけだから、まあ、お客様と言つてもいいはずだ。

小さな三つの椅子とこれまた小さな一つの丸い机、あまりに小さすぎて私の長い脚が机の下に収まらない。いつも膝を角にぶつけてしまうので、衣装が擦れないようにと私はどうにかこうにか居住まいを正したいのだが、お嬢はそれがあまり気に入らないようで椅子をありがたいことに後ろに引いたり、机をずらしたりしてくる。準備が整つたようだ。

お嬢の小さな手にも安心な大きさのティーカップが私の目の前に置かれ、次いでそれに見合ったお皿にハートや星型のクッキーが並ぶ（今日のお菓子はお嬢の母親の手作りのようだ）

「……で、これはジュリアぶんね！ これは、わたし！」

「ああ、ありがとう。今日はお母さんの手作りクッキーなんだな」

「紅茶、熱いから気を付けてね！」

彼女がこの部屋のお姫様である。（私はお嬢と呼んでいるが愛称は様々あるようだ。）あと少しで誕生日を迎える、六歳のかわいらしい女の子である。我々の主のような存在でもあるが友だちのような扱いを受けている。年相応にほどほど大切にしてくれていることは薄々感じられるため、私はそれで満足している。少々わがままであり、いたずらっ子の時もあるため、私は時々着せ替え人形にされてしまうことがある。しかし、それもヴォルによればまだかわいいもの、なのだそうだ。

今日のティータイムにヴォルはいない。実は今朝、肩をひねったか何かで爺様のところで見てもらっているところらしい。残念なことに彼から珈琲の話を書くのはまた今度ということだ。

ヴォルフガング、彼は爺様、つまりお嬢のおじいさんに育てられたと言ってもいいほどおじいさんに似ている。優しいところや少しお堅くてとつつきにくい所なんかが特に。初めは接しにくいと君たちも思うかもしれないが、共にいる時間がそこそ長くなれば非常に紳士的であると（経験上）私は思う。そして、無類の珈琲好きなのだ。彼が珈琲の話をし出すと紅茶も冷め（彼は珈琲について冷めてからがより美味しいと語っていたような気がするが私はあたたかいうちに紅茶を飲みたいのだ。）待ちくたびれたお茶菓子もひび割れいかにも美味しい時期を過ぎてしまったような、もしかするとひび割れたその隙間から「まだかしら……」という涙が零れ落ちてしまうのではないかと、そう思わないか？もしそんな摩訶不思議が起きたとしたって、驚きのあまり椅子やらティーカップやらをひっくり返さなくてもいいくらい、私は心の準備はできるだろう。そうやってチクタクと時計の針は進んでいくのだ。そんなこんなで、私は紅茶派なのだが、彼のおかげで珈琲に興味が出てきたところである。いつか自分で入れる日がくるのだろうか。

「ヴォルは、今日いないから。うん、今日はこの子に座ってもらおうかな」

「お嬢、流石にそれは……まあいいか」

……おい、ヴォルフガング。君の代わりはネズミのぬいぐるみらしいぞ、ふふつ。い

や、失礼。帰ってきたら教えてやろう。きつとあのお堅い口もすこしくらいは緩むだろう。いろいろな意味でね。

微笑みを浮かべガラス玉のような大きな瞳をきらめかせ、ジュリアは目の前のティーカップに視線を落とす。誰もがその瞳に吸い込まれそうなほどに深い群青色。そんな透き通った彼女の視線を今この瞬間だけはゆらりと波紋する朱色の液体が奪っていた。

「本日の紅茶は、ふむ。色も明るいし、なんだか甘い香りが漂っているような……もしかするとお嬢、ははあり、これはお母さんのティーポットから少々拝借してきたな？ 最近、流行りの……はちみつ紅茶。そうだろう？」

「ジュリア、見て、これね、とってもあまくて美味しいの！ この前、お母さんとおやつの際に飲んでね、すごくおいしかったんだよ、ジュリアにも飲んでほしくてこっそり持ってきちゃった！ おいしい？」

「そうか、ありがとう、それでは頂くね。うん、私には少し甘すぎるが……とても美味しいよ」

「うん、うん！ ジュリアも気に入ってくれて嬉しい！ よかったら」

そうして彼女らはしやんと背筋を伸ばし、賑やかなティータイムを始めた。

さて、途中まで話したかな。そろそろ皆、気になるであろうヴォルの話をしよう。彼は私よりも前からこの家にいる。お嬢が生まれる前、いや生まれたすぐくらいの頃だろうか。お嬢のお兄さんが爺様の家に行く途中で怪我をしようずくまっていたのを見つけたのだそう。お兄さんはボロボロになったヴォルを爺様の家へと連れて行った。爺様はとても驚いたが、どこか閑散としたこの空間に賑やかさがあればなあ、なんてことを思っていたところで、また何かにつけても優しい性根を持っていたためすんなりと受け入れることにした。爺様は傷だらけの彼に「ヴォルフガング」という名前を付けて診療所（ヴォル曰く、私は行ったことがない）に置いた。爺様の甲斐甲斐しい世話によつて、ヴォルは元気になるっていった。しかし、元から丈夫ではなかったのだろうか、何度も何度も怪我をしては爺様による治療が必要であった。そして月日が経ち、捨てられたとは考えられないくらいに綺麗でたくましい青年へと変わっていった。いつしか、あの優しい爺様はヴォルがお嬢の友だちになれないかと思つたらしいんだ。そうして、爺様に連れられてこの家にやってきたというわけだ。



「ただいま、ジュリア。変わりはなかったかい？」

「ええ、特に変わったことはないわ。ティータイムでお嬢がこっそりお高いはちみつ紅茶を持つてきたことくらいかしら。それと、ああ、見てあれ。ネズミよ」

「それはずいぶん悪い子だ。……なるほど、僕の代わりに盛り上げてくれたかな」

「肩の具合はどうだ、爺様にまた便利にされたか？」

（爺様は器用でな、前にヴォルの首がずれてしまった時にお腹の中をコーヒーミルに変えてしまったんだ。その時には既にヴォルもコーヒーの虜で、まあ、面白がっていたのだが。お嬢のお転婆なところは爺様に似たんだろう。）

「今回は遊びなしさ。もう大丈夫だよ、やはりおじいさんは天才さ。ところで、そろそろあの子の誕生日だろう？」

「そうね、今日もその話をしていたさ。よっぽど楽しみなんだろうね。きっとその日は賑やかになるわ」

「ひようせつ……んー、毎日こんなに真っ白なの？」

「そうだよ、だからそういったら？」

「冬なら寒いけれど、ここはあまり寒くないのね」

「だって、氷雪の国だからね」

「そういうものなの？」

「ああ、そういう、ものだろう？」

氷雪の国は、祭りの真っただ中にいた。なんでも掟を破ったものがいたらしい。そんな時は掟が破られたことを無かったことにしてしまう、そのための祭りなのだ。

「あれはなに？」

「あれは罰当たりな者がやってきたから懲らしめてるんだ」

黒いジャケットに赤いシャツ、ピカピカの革靴をはいた男が両腕をつかまれ引つ張られているところだった。

「罰当たりって。彼は何をしたの？」

「彼は赤いシャツに黒いジャケットを着ているだろう！ ここでは赤と黒の服を一緒に着るのはだめなんだ！ 当たり前だろう？ あ、そうか、ごめんよ。君はこの国を知らな

いんだったな……」

彼の言う罰当たりな男が両腕を掴まれ、広場の真ん中の丸椅子に座らされ、ちようどりナにもはつきり見えるくらいまでやってきた。

「え、あれって、ヴォルみたいじゃない？ 私よりも背が高かったかしら」

どこか怪我をしているのだろうか、痛そうに顔を歪めながら男は俯いた。ヴォルと似たその男を不憫に思ったのだろうか。リナの胸にもやもやとした気持ちがあらわれた。

「ねえ！ ただみんなと違う服を着ていただけでしょう？ あんなに酷くしなくったっていいじゃない！」

リナは住民らに詰め寄り睨んだ。そこそこかわいらしく、珍しい異国人に珍しく責められて驚いた氷雪の国の住民はたじろいだ。なんなら転げてしまった者もあった。

「あーわかった、わかったよ。じゃあ、そんなに言うなら二人で行って、この国の女王に許してもらおうことだな」

「その女王はどこにいるの？」

「ここから、いち、に、さん、三つ橋を渡ったところだ、当たり前だろう？」

ぼうつとして紅茶を飲み、お菓子をつまむ。溜息を吐いた直後のようで心ここにあらず……そんな悩まし気な表情も彼女の美しさにおいてはスパイスでしかない。陶器の肌にはほんのり色づく頬。なんといつてもローズムーンを想わせるような瞳。彼女はルナ。お嬢の母がお嬢とおそろいのワンピースを着飾った少女である。彼女は口数が多いわけではないから、私もあまり話したことがない。彼女の美しさについては語れることは多いのだが彼女自身のこととは殆ど知らない。彼女がここに来たのは二年前ぐらいであったか、お嬢にとても似ているということでお嬢は常にルナといたいと思っていたようだが、それもなかなか難しく（ルナはどちらかという壊れやすい部類であるため）お嬢とはティータイムるときにしか戯れていないように思う。私としては朝の挨拶など、返事を返してくれるだけいい、と今のところそんな感じだ。

「ルナ、今日はね新しいスカートなの！」

「見て！　かわいいでしょ。お母さまに頼んでルナの分も頼んでるからね」

「そう」

「お菓子はどうぞ？　今日は私もすこし手伝ったのよ！」

「そう」

「そうだったのか、どおりでいつもより美味しいと思ったよ。珈琲によく合いそうだ」
「お嬢も手伝ったのか、それはありがたかったです」

ああ……気まずい。

うつそうとした木々の間を抜けていく。徐々に暗くなつて眩しいほどに輝く雪の結晶もおつとりとした表情に見えてきた。二人ははぐれないようにゆつくりと小道を進んでいく。ふと視線を上げると淡い月明りに照らされた橋が見えた。氷のブロックが小さなアーチを描き、きらきらと星屑が流れる川を反射していた。

「ここが琥珀の国……？」

橋から先が隣の国であるのだが……。ここからじゃよく見えない。あまり景色は変わらないようだ。二人はどんどん歩みを進めていく。次第に甘い香りが鼻孔をくすぐった。さくさくとした足音がぎゅつぎゅつと踏みしめる音に変わり、そのたびにふわふわと弾むように足が軽くなつていく。ちらちらと降る雪を見上げれば、夜空が広がっていた。

「みて、ヴォル！！ 金平糖だよ！ あれ！ 星じゃなくて金平糖！」

「そうだね、じゃあこの雪は……甘い。粉砂糖みたいだ」

琥珀の国は誰もが一度は夢見るようなお菓子の国だった。琥珀糖でできたカラフルなタイルにクッキーの家々にりんご飴の木々、それらが溶けないようにこの国の空に太陽は昇らない。何光年も遙か遠くの星の瞬きも届くような深い闇、少し寂し気な夜空の下にできた小さなランプの灯る国。月明りときらきらと輝く色とりどりの金平糖がこの国の住民の光となっている。だからなのか、氷雪の国より少し肌寒く感じるのかもしれない。それでもリナにとっては少し涼しいくらいであった。

「あなたたちはだれ？ どこから来たの？ へんな服きてる？」

「私たちは今、氷雪の国から来たの」

住民は傘の形をしたべっこう飴のようなワンピースを身にまとい、つやつやとしたその輪郭を揺らしている。それぞれの色が右往左往し、見渡せば夜空に浮かぶ金平糖のようにも見える。

「外から来たの？ じゃあ、ぼくらのお庭に来て？ ここではみんなでおかしを食べる決まりなんだよ？」

家々の間を抜けると大きな噴水が見えた。周りには丸いテーブルにスイーツとティーカップが並び、住民の賑やかな声が聞こえてきた。

「ねえ、ヴォル、これが本当のティータイムね！」

「でもこんなに人がいるんだ。正しくはティーパーティーかな」

「私もこんな風にしてみたかったの！ いつもみたいに私ばかり話しては寂しいでしょう？」

「……うん、そうだね」

お菓子と紅茶と跳ねるような声がふわふわとあたりを満たしていた。なんだか、子守歌みたいで眠ってしまいそうだな。リナが瞬きしたその時、

「きゃー！！！」

突然、悲鳴が響いた。バタバタと逃げ惑う声に食器の割れる音。混乱の出どころに目を向けると大量の鼠が走ってきていた。なんと二足歩行で。鼠らはテーブルにのぼり、お皿をひっくり返しては散らばったお菓子を齧り、頬張っている。なんと美味しそうに食るとか。

「我らはいいつもお菓子を奪われてかんかんなんだ！ 屋根裏の民を代表して我ら鼠族が

この国をうばいにきた!!」

あら、かわいい鼠さんだわ。お母さんはこの前叫んでいたけれど、この国の人たちも鼠が苦手なのね。

「あ、いたいっ」

逃げ惑う人々に押されて小さな女の子がリナの足元で躓いてしまった。

「大丈夫？」

「うん、お姉ちゃんありがとう。……あれ、私が初めて作ったクッキーなのにつ」

リナの腕の中で女の子は泣きだしてしまった。途端にさっきまでかわいいと思った鼠たちに腹が立ってきた。

「ねえ、ヴォル。私許せないわ。こんなに小さな女の子を泣かせるなんて」

「ええ、同感です」

結論、二人は無敵だった。いや鼠たちが小さく、あまりにかわいらしい抵抗しかできなかったと言えばいいのだろうか。飛びかかるもぼてぼてつ、と転がる始末、追い払うのも容易かった。あっけなく屋根裏の民たちは地面にこぼれたお菓子を頼いっばいに詰め、両手にもいっばいにかき集めて去っていった。歓声があがりあつという間に二人は住民に囲

まれた。

「ありがとうございます。本当に助かりました。お二人はこの国の勇者様です！　なんでも、お二人は女王様の元に向かっているのだとか、ぜひ案内させてください！」

「ありがとうございます。とても助かるわ」

二十二時過ぎ、広々としたダイニングキッチンではリナの誕生日の会場が徐々にセッティングされている最中であつた。音符が見えるような鼻歌を漂わせ、お玉を手に鍋のご機嫌を取っている。コトコトコト、煮立ったビーフシチューは上機嫌に、しかし、慎重しく跳ねている。ピーッピーッ、ビーフシチューに夢中なりナの母を振り向かせるようにオーブンが鳴る。扉を開けるとふんわりと優しく甘い香りが宙を舞い、ふるとスポンジが揺れる。綺麗な狐色をしたそれは頑丈な箱に守られ、賑やかなキッチンの空気に馴染むまで少し高い所に乗せられた。やはり、主役様は真つ白いクリームに真つ赤な苺、ナパージュのドレスアップを経て輝くように今は控えめに十分に落ち着く必要がある。一晚をその準備に要する、そのくらいのお嬢さま扱いが丁度良いのだ。

「ふう、完成ね。ちよつと休憩」

戸棚に入った缶の中にこっそりと隠しておいたクッキーを取り出す。綺麗な正方形の市松模様。そして、こぼこぼとドリッパーにお湯を注ぎ、かわいらしくもこもこと膨らむコーヒーを眺める。ヴォルフガングをお昼に届けてくれたおじいさんがくれたもので、彼が挽いてくれたらしい。睡眠不足になりがち忙しい彼女を気遣ったカフェインレスコーヒーである。いつものバラードをぼんやりと聞きながら我ながらうまく焼けたスポンジケーキを眺める。

「さて、そろそろ寝なくてはね……」

「着いたよ、あの橋を渡ればむこうに見えるのが女王様のおしろだよ？」

「案内、ありがとう」

「こちらこそ！ 勇者様たち！」

たくさん琥珀の国の人々に見送られ、二人は橋を渡っていった。

なんだかくすぐったいな。そんな風にリナの心はふわふわとあたたかくなっていた。橋の

向こう側には大きな湖とそのちょうど真ん中に小さなお城が建っていた。リナは城へと伸びる橋をゆつくりと渡っていった。湖には波紋一つない、綺麗に真つすぐな水面にはくつきりと赤い満月だけが浮かんでいた。フクロウの鳴き声が聞こえる。リナの背丈と同じくらいの扉がゆつくりと開く。奥からガラスの王冠を被った、女王が出迎えた。

「話は氷雪の国と琥珀の国から聞いています。どうぞこちらへ」
あれ、誰かに似てるような……。とてもきれいな人だわ。

城の中は見た目ほど小さくはなかった。丁寧な細工がされた窓枠や壁の模様、吹きぬけの天井に女王の声がこだまする。

「あなたの願いは氷雪の国で掟破りをした彼の恩赦ですね、各国の王には私から許すよう既に伝えてあります」

「ありがとうございます」

「さて、琥珀の国では鼠族を倒したと……恩赦では足りませんね」

女王の一言で氷雪の国の音楽隊と琥珀の国のお菓子が広間に現れた。そして、リナの着ていたワンピースはドレスに、頭にはティアラが輝いていた。

「まだ彼らは貴女と話し足りないようです。こちらで自由に楽しみゆつくりして下さい」

い。私は少々疲れてしまったので、失礼いたしますね。……良ければここで女王にならない？ 私とても疲れてしまったの……そう、ありがとう。それで……」

小鳥の鳴き声が聞こえる。太陽の光が今か今かとカーテンの向こうで待ちかねているがお嬢の元気な声が聞こえない。まだ起きない様子だ。今日で7歳になるお嬢へたくさんの贈り物が届いている。良き夢を見ているのだろうか。さて、私もヴォルヤルナも、何もあげられやしないが、共にお嬢の幸せを願っておこうじゃないか。

「リナ、起きなさい」

（んん、なあに、まだねむいの）

「はい」

「ごはんよ」

あ！ 今日私の誕生日だった！ 友だち、お爺ちゃん、みんなに会える日！ 早く起きなくちや。

「今行く」

え？ 体が動かない……あれは誰？

「おはようルナ、お嬢は今日も元気だな」

ん？ あれ、ジュリアって私より背が高かったかしら。

ほんの少し前。一面藍染めした空模様に地平線の向こうから光が届く。その青はカーテンをすり抜けて少女を照らした。

ベッドの軋む音、布の擦れる音、もう朝なのね。あ、おはようございます。……身体が動く？ あたたかい。ごめんなさい、嘘だったわ。私、まだ夢の中にいるみたい。あれ？ でも……ねえ、貴方たち何か知っていたら教えてほしいのだけど。……これは、退屈な日々は終わりということかしら。誰かが願いを叶えてくれたのね。

今から試しに歩いてみるわ。上手じゃなくても笑わないで頂戴ね。

純真無垢に潜むこわさ

あなたは、子どもの頃に人形遊びをしたことはあるだろうか。したことがない人やそんなのとうの昔に忘れたという人も、小さい子どもが人形と一緒にごっこ遊びをしている姿を想像してみてもほしい。何ともいえない可愛らしい姿が思い浮かばないだろうか。本作は、そんな愛くるしい雰囲気にあふれる小説だった。

そんな愛くるしさと、精巧に創りこまれた世界観によって、より深い没入感が生まれている。目を開けると広がっている白い世界、金髪と空色の瞳を持つ少年、お茶会、お菓子
の国——……。まさに「絵本で見た魔法の国」がそこにはある。忘れてしまった童心を思い出させてくれるような、そんな世界が広がっている。

ただし、かわいらしい雰囲気だけではないのが、本作の肝である。リナが歩みを進めるように私たちもページをめくっていくと、その違和感に気が付くはずだ。氷雪の国が橋を三つ渡ったところにあるのは当たり前であると言われ、服装の掟（このルールを知っているのも「当たり前」）を破った者を懲らしめなかったことにするための祭りが催され、ネズミ退治をした異国の者がたちまち勇者扱いされる。どこか不安になる恐ろしさがあるのだ。

まだ幼いリナがこの違和感に気づくはずもなく、夢の流れに沿ってしまった結果、リナはルナ（氷の女王）と入れ替わってしまい、楽しみにしていた誕生日会を迎えられなくなってしまう。つまり、バッドエンドである。最初のかわいらしい雰囲気からは想像もつかない結末であった。どこにその伏線があったのか、すぐにページを戻って探していた。話は変わるが、私は本作において非常に好きなどころがある。それは、人形たちが意思を持つてゐることである。本作はリナの夢の世界と現実世界が交互に展開されていく形で進行するのだが、現実世界におけるリナの人形たちの話から、彼女たちの様子が垣間見えるのがたまらないのだ。

特別好んでいるわけではないお茶会（おままごと）に付き合わされている感覚、爺様の診療所に行く（つまり、修理される）という感覚、ヴォルが何度も診療所に行くうちに爺様に似ていく様子……。まるで人間であるかのように、人形たちは自分の意思を持つてゐる。その生き生きとした様子がおもしろい。私が子どもの頃に持つていた人形にも意思があつたのではないか、と想像を掻き立てられるほどに。

話を戻すが、リナはまさに「夢のまにま」に流され、意識と感覚がルナと入れ替わってしまった。「良ければここで女王にならない？」がトリガーであると思われるが、ここで意

思を持って断っていたらどうなっていただろうか。いくら勇者だからといって、そもそも女王など全くの他人に任せられるものではないのだ。その場の雰囲気の流れ、そのまま飲み込まれないようにしなければならぬ。私たちは、夢という異界に攫われてしまわないように、ほどよく夢の世界を楽しみたいところである。

小夜紫雨

二万歩の足跡

入鹿
るいか

まるで彼女は
「幻のツチノコ」を探す捜索隊員」

夏の夜、散らばる 落とし物たち
約束を 守ることは できるのか？！

TURN THIS PAGE
© 2023 THIRD AYAITO

今日のために着飾ったであろう浴衣姿の女性。小さな身体に大きな綿あめを抱えて嬉しそうに歩いている子供。千鳥足で両手に持った焼き鳥を食べている男性。誰もが満足そうな顔を浮かべて帰路に就こうとしている傍ら、その群衆をかき分け、一人だけその場の雰囲気とは似つかない不安げな顔をしながら足元を見つめる女性がいた。

金曜日、午後五時。一週間の仕事を終え、ミツは椅子から立ち上がり大きな伸びをした。腕を伸ばすたびにポキポキと音が鳴り、いかに筋肉が凝り固まっていたのかが良く伝わってくる。デスクワークは体を痛めるからと大学生の時にはじめたそれは習慣になり、仕事終わりに必ず軽くストレッチをするようになった。その原因にもなった座り心地の悪いくたびれた椅子をじっと睨むように見つめ、クッションでも買おうかと椅子に手を伸ばした。その時、ふと光ったスマホからこの後の予定があることを確認し、お疲れ様です、と周囲に声をかけながらカバンと羽織をもって足早に会社を後にした。寒いくらいに冷房の効いた会社を出ると、空気が肌にまとわりつくような不快感にミツは思わずため息をついた。

どんよりとした雲が空を覆いつくし、梅雨のじめじめした空気とじんわりとした暑さが混ざり合う。立っているだけでも汗が沸き出してくる。ハンカチでメイクが崩れないよう軽

く汗をぬぐい、目的地を目指す。手で顔を仰ぎながら待ち合わせ場所に着いたところで、スマホからピロン、と通知音が鳴った。「ごめん、十分ぐらい遅れる！」と彼女から謝罪の一報が入った。ミツは着いて早々手持ち無沙汰になってしまったと腕時計で時間を確認する。いつもならこのまま待っていただろう。だが、今のミツにとつての十分はサウナの中での三十分だった。ただ立っているだけでも汗が服に張り付いて気持ち悪かった。このまま待っていたら、彼女にお風呂にでも入ってきたのかと言われるに違いないと遅れる彼女に不満を漏らしつつも、どこかビルの中に入って涼もうと辺りを見回した。

待ち合わせ時間から十五分ほどが経過し、ようやく彼女が現れた。遠くからミツ、ミツと聞き覚えのある声近づいてきて、手で顔をパタパタと団扇のように仰ぎながら、サチはやってきた。

「いや〜ごめん！ 遅れちゃった!!」

茹だるような暑さを無視するように、許しておくれ〜と抱き着いてくるので適当に相槌を打ちながら腕を引き離す。申し訳なさそうにしながらも軽快に笑うサチは、高校からの友人である。互いの勤務先が比較的近いため、仕事終わりには今みたいに待ち合わせをして二人で飲みに行くことが多かった。

「はいはい、仕事お疲れ！ それより早くいかないと、ほら、絶対屋台並んでるでしょ」
「じゃあ、混む前にさっさと買っちゃって食べよ！ 遅れちゃったし、今回は奢るわ！
走ってきたからお腹空いたし今日は食べるぞ〜！」

「やった！ じゃあ、まずは焼きそばでしょ、それから焼き鳥にイカ焼き、甘いものも
食べたいし……あ、あとビールも！」

「せっかくだし、くじ引きとか射的とか色々しようよ！」

「いいね楽しそう！ 絶対やる！」

去年一昨年とどちらかが仕事で忙しく夏祭りに参加できなかったためか、夏祭り自体が
胸を躍らせるものだからか、二人は学生の頃のように会話を弾ませた。それから仕事やプ
ライベートなどの他愛のない話を楽しみつつ、じんわりと滲む汗をごまかしながら、屋台
が連なっている方を目指し歩を進めた。遠くからは迷子の知らせを告げるアナウンスが微
かに聞こえてくる。次第に食欲を刺激する香ばしい匂いが漂ってくる、二人ははやる気
持ちを抑えきれず、足早に目的地の方へと歩いて行った。時刻はとうに午後六時を過ぎて
いるが、陽は周囲を淡く照らし続けており、本格的な夏がすぐそこまで迫りつつあった。

一時は身動きが取れなくなるほど人であふれていた広場が一変し、辺り一面の静けさが戻っていく。祭りが終わり、屋台は片付けられて人々はみな帰路に就こうとしていた。ミツもその中の一人であった。

「タクシー！」と小学生のごとく手を真つすぐに挙げ、存在をアピールする。そのひたむきな思いもむなしく、タクシーの表示灯のどれもが、予約車、迎車、回送車、と赤く光っていた。過ぎ去るタクシーは悉くミツの存在を無視しているようだった。束の間の夏祭りを満喫したミツは、苦しそうに膨れ上がった腹をさする。さすがに食べ過ぎたと後悔しつつ、過ぎ去っていくタクシーを見つめた。これだったらサチと一緒に地下鉄で帰ればよかったなと思ったが、人混みに酔ったミツは一刻も早く家に帰りたかった。

スマホで地図アプリを開いて現在地から自宅までの所要時間を調べる。ここから徒歩で約三十分はかかる。三十分。徒歩で三十分か……。徒歩で帰るにも微妙な時間だったため、それならばと車で五分ほどで着くタクシーを選択した。混雑している中、ミツはなかなか現れない空車のタクシーを数分粘って待つことにした。曲がり角から赤く光る空車という文字を携えたタクシーを我先にと捕まえて、家に帰ったのはそれから五分後のことであった。運転手に行き先を告げ、窓から見えるつい先ほどの自分と同じような道路際に立って

いる人を尻目に祭り会場を後にする。外の一切の音が遮断された静寂とした車内では、「○○タクシーは〜いつでも！ どこへでも！ あなたのものと駆け付けます！ ○○タクシー会社です！」というキャッチーなセリフが繰り返し流れている。祭りの喧騒がどこか遠くになっていった。

クレンジングオイルで崩れたメイクを落とし、溜まっていた疲れが水と共に流れていくように気分が晴れやかになる。脱ぎ捨てた衣服と荷物を隅に追いやり、冷蔵庫から缶ビールを取り出すと、身をゆだねるようにソファに腰を下ろした。食べたいものは食べられたし、夏祭りの雰囲気も味わえたし、今日はもう満足だと言わんばかりにお腹をさす。録画したドラマを見ながら、次第にぼうつとする頭の中でミツはふと忘れていたことを思い出した。明日のことで何かメッセージが来てないか、と確認するためバッグに手を伸ばす。しかし、何度見ても、そこにスマホはなかった。スマホが見当たらないのはいつものことだったため、またどこかの棚にでも置きっぱなしになっているのだろうと冷静に辺りを探した。だが、棚、カバンの中、洗濯機の上にも、ベッドの上にもない。ゴミ箱やクローゼットの中、数日前に使用したポーチの中とありもしないだろうという場所まで探した。も

ちろんスマホの姿は見当たらない。同じところを三、四回は見て回った。玄關から風呂場
にいたるまで探し回った。それでも見当たらないことにいら立ちながらも、次第に背中に
汗が伝ってくるのを感じる。放心状態のなか乱雑した部屋を見渡し、ミツはすでにこの空
間にはないことを悟った。

ミツは葛藤を繰り返していた。一人じゃ抱えきれないこの問題を誰かに話したい、どう
にかしてほしい。だがスマホがない。つい一時間前に別れたサチに連絡しようにも結局ス
マホがないという結論に至り、己の無力さを知った。あの小さくて黒い板がないと何もで
きない。しかし、思い返してみるとサチといるときはまだ持っていたはず。あと心当たり
があるとすればタクシーなのだが、ミツは車内で一切スマホは見えていなかった。スマホを
最後に見たのは確かサチと別れた後、タクシーに乗る前だったようなと考えたところで、
そのタクシー会社に連絡する手段はなにもない。手元にあるのは動画を見るとときぐらいし
か使っていないノートパソコンだけだった。ミツが普段使用していないそれも、電子機器
と言うスマホとの共通点があるだけでも謎の安心感があった。スマホと同期しているメー
ルアドレスはあったが、受信箱には取引先からのメールと迷惑メールのみだけである。
これじゃあ誰にも連絡できないではないか。

もしお祭りの会場に落ちていて、どこかの極悪人に個人情報盗まれていたら……。そもそも誰も気づかず、大勢の人に踏みつぶされて道端に捨てられていたら……。と最悪のパターンだけは考えないようにと頭を左右に振って打ち消した。そして、ミツはタクシーに忘れていった前提で記憶の片隅にあったタクシー会社のホームページから車種と電話番号をメモに書き写す。それから足早に玄関で靴を履き、躓きそうになりながら、埃の被っていた懐中電灯を携えて暗闇に紛れていった。

「お祭りの日ってさあ、なぜか人気のない小道とか通ってみたくなるよねえ」

そう言って綿あめを片手に、あぜ道や小道をサチと一緒に歩いたことを思い出すと、どうしようもない脱力感に襲われ、搜索は難航するだろうなと口を結んだ。思い返してみれば、ファスナーを開けるのが煩わしくてバッグを開けっ放しにしていた気もする……。とミツは顔をしかめる。今になって過去の行動を悔やむのはどうしようもないことだが、そんなタラレバを、気付いたら頭の中で反復してしまっていた。

道をほんの少し歩いただけでも焼き鳥の串や、空のペットボトル、あまつさえ食べかけの焼きそばが無残にも残され、そこかしこに捨てられている。ゴミを道端に捨てるといっ

選択肢がないミツは思わず、ごみ箱なら近くにあるだろ節穴か!! と悪態をつく。次第にその捨てられたごみたちが、自身のスマホと重なって見えてくるとミツは見ないふりをし、急いでその場を後にした。

案の定、搜索は難航した。スマホかと近寄って見れば、脱ぎ捨てられたビーチサンダルだったり、空のビール瓶や、スマホケースといった紛らわしいものまでもが落ちていた。期待を裏切られたことに落胆するも、めげずに再び探していく。ミツは右手に懐中電灯を、左手には袋を提げて、長い髪は一つにまとめ準備だけは万端だった。時折すれ違う人からは不審な目を向けられたり、警備員と間違えられたりもしたが、周りの目を気にする余裕はない。草むらにも光を当てて探してみると、何かキラキラと光るものが反射しており、近づいてみる。手を伸ばし掴んでみると、それはブロンドの艶々とした髪の毛の可愛らしい人形であった。指先には持ち主によって施されたのだろう真っ赤なネイルが塗られていた。はみ出ず縁に沿って綺麗に塗られているあたり、持ち主に大層大事にされているのだろう。ひとまず髪についていた土を払い、持ってきていた袋に入れる。

それからだった。歩いて探すたびに次々に落とす物が見つかった。しわ一つない肌触り

の良いハンカチ、使い古されている財布、虹色に光る玩具の剣、さらにはかつらが落ちていた。

右手には懐中電灯、左手には落とし物でいっぱいになった袋。はたから見ればお祭りを満喫した人にも見える。そもそも暗闇の中で真つ黒なスマホを探すという事が無謀である。ましてや都合よく電話がかかってくるかとして、常に通知オフの設定にしてあるそれを発見できる可能性は皆無に等しい。しかし、何としても見つけ出さなければならぬ理由がミツにはあった。見つかりそうにないスマホを見つければと次第に焦燥感が募っていく。ミツは己を奮い立たせ、さながら幻のツチノコを探す捜索隊のような気分になった。

一度屋台が連なっていた広場にも戻り、焼きそばや焼き鳥、クレープを買った屋台も重点的に探していった。途中見渡すと、広場は人気がないという程ではなく、ベンチに座っている浴衣姿の男女やタバコを吸っている人、慌てて走っていく女性の姿などまばらであった。人の気配がする安心感にミツはほっとし、少し落ち着きを取り戻した。そこで袋の中の落とし物の存在を思い出した。今もミツのように探している人がいるかもしれない、何とかしなければと思い、先に交番に届けようと決意した。そして最初に、交番にスマホ

が届けられていないか確認するべきだったということも思い出し、小走りにその場を後にした。

お祭りでもいつもより混雑していたからだろう、交番に到着すると何やら騒がしく、家族連れや帽子をかぶった中年の男性、着物を着た年配の女性が警察官に何かを訴えている様子が見えた。ミツは、すみませんと近くにいた警察官に声をかけ、落とし物が入っている袋を広げて見せた。警察官の確認を取ると、手続きを進めるために袋に入っていた落とし物を一つずつ取り出し、机に並べていった。

突如、「ニ「あつ」ニ」という声が一斉に上がる。視線の先を見ると、顔を輝かせた少女、恥ずかしそうに伺っている中年男性、何かを思い出したような年配のお婆さんがこちらをじっと見つめている。その視線はミツに向けられたものではなく、持っている落とし物を指さしていた。最初に声を発したのは少女だった。

「ママ！ ミキちゃん!! ミキちゃんいた!!」



母親の足にしがみつ きながら、そう訴えている少女は人形と同じ花柄の浴衣を着ていた。

ミツは持ち主である彼女に近づきしやがんで、そつと人形を渡す。

「可愛い人形だね、もう落とさないようにね」

「……うん。お姉ちゃん、ありがとう」

少女は恥ずかしそうに頷くと人形を受け取り母親の後ろへ隠れた。「ミキちゃんごめんねえ、もう一人にしないからねえ」と語りかける少女にミツの心が温かくなる。それを見て安堵した少女の親はこちらが申し訳なくなる程何度も頭を下げ、人形を大事に抱える少女を連れて去っていった。少女に抱かれていた人形の顔は心なしか嬉しそうに見え、ミツはここまでの苦勞が報われて良かったと心底喜んだ。

続けて後ろから落ち着いた声色の女性が、「すみません」と声をかけてきた。

「そのハンカチ、私のものなんです。その刺繍も……、間違いなく私がいれたものです。

どこでこれを……？」

「えっと、お祭り会場のすぐ脇の小道に落ちてましたよ」

「良かった……。これは孫から古希祝いにもらった特別なハンカチで……本当にありがと

うございます」

女性は震える声で深くお辞儀をした。

残った落とし物は、かつらと財布と虹色に光る玩具の剣。その場にいるのは帽子をかぶった男性。とすると、これらのどれかはおそらく男性のものだろうと眼を向ける。男性は気まずそうにしながら話しかけてきた。

「そのかつらは自分のです。拾ってくださりありがとうございます」

「いえ、見つかって良かったですね」

差し出したかつらを躊躇いながら男性は受け取る。しかし男性はその場を動こうとせず、何か言いたげな様子を見せ、何か言おうか言うまいか悩んでいるようだった。あ、えと、ん、よし、と小声で意を決した男性は急に帽子を脱いだ。ミツの視線は自然と男性の頭部に向けられた。不自然に切りそろえられた頭髪と、水玉模様のようにまだらに毛が抜け落ちていところが数か所あり、思わずどうしたんですかと聞かずにはいられなかった。

「あまり人には見せたくはないのですが、事情が事情ですので。あと、あまり誤解されたくなかったので……」と続けて、

「その……、一歳になる娘がいまして……、最近シール遊びがブームでして家の至る所に貼っているんですけど、先日私が床で寝ている時に、ガムテープを髪の毛に貼られてしまつて。で、それを剥がすときにこう、べりつと一気にもつていかれて……。それから見ての通りの今の状態に至るとい感じですよ」

じつと見てはいけなと思いつつも、目線をつい頭部の方へと移してしまふ。改めて見ると想像していたより遥かに痛々しい頭皮であつた。ブラジリアンワックスで毛を抜くときでさえ結構痛いと言うのに、頭髮ならなおさらだろう。考えるだけでゾツとしてしまふ。好奇心でつららを舐めて、舌にくつついて取れなくなつてしまつた小学生の頃の自分と重なり、痛ましくも同情してしまふ。

「……そ、そんなことがあつたんですね」

「ええ、……そうなんです」

ミツはなんて返したら良いのかわからず、当たり障りのない返事をする。すでに頭皮が大事なことになるてはいたが、お大事になさつてくださいと声もかける。帽子をかぶり、かつらを鞆に押し入れ、男性は恥ずかしそうにその場を後にした。

「落とし物へのご協力、ありがとうございます」

ほっと胸をなでおろした彼らの去っていく背中を見送ったミツは、本来の目的を思い出すと、机にある財布と虹色に光る玩具の剣に眼を向けながら、

「いえ、あの、私も落とし物をしてしまって。スマホをなくしたのですが……」と再び警察官に向き合った。

「あ、はい、スマホの落とし物ですね。どんなスマホか特徴を教えてくださいませんか？」

「……えっと、黒のiPhoneで、ケースにメモが挟まっています」

「なるほど。ちなみにメモはどういった内容か可能でしたらお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「……確か、歯ブラシ、スポンジ、それと夜に荷物が届くことと、牛乳の消費期限が今日までだったことが書いてあったかと……」

「えー、牛乳が消費期限、つと。かしこまりました。情報が入り次第ご連絡いたしますので、ご住所とご連絡先を——」

幸いなことに、交番で電話を借りることができると言うので、ミツはポケットからタク

シー会社の電話番号を記したメモを取り出す。番号を打ち、若干の期待を膨らませながら受話器を耳に近づける。

「はい、いつでもどこでも駆けつける〇〇タクシーです！」出たのは声の良く通るはつらつとした女性で、ミツはその馴染みのあるフレーズから、確かにこのタクシー会社で間違いないと実感した。

「すみません、私、一時間ほど前に中央公園近くでタクシーを利用したのですが、スマホをなくしてしまつて。ええ、多分タクシーの中に落としたかもしれないんです」

「落とし物ですね、かしこまりました。ただ、現在混みあつておりまして、確認できるのが明朝の車両の点検時なので……、明日お電話いただければと思いますがよろしいでしょうか？」

「そうですか……。はい、わかりました。明日改めて連絡します。ありがとうございます。失礼します」

手ごたえはつかめぬまま、ミツは静かに受話器を元に戻した。

宅配も、今日で消費期限が切れる牛乳も諦め、ミツは再び来た道に戻っていく。交番から離れて数メートルという所で、ミツが先程いた交番から幼い子供らしい驚いたような声

と、それから喜んでいるような声が聞こえたような気がした。人形、ハンカチ、かつらは元あるべきところに戻った。あとはミツのスマホのみである。

小道。あぜ道。小道。小道。もう何往復したか分からないその道はミツにとって、既に馴染みのあるものになってしまった。時刻は既に終電に迫るほどになっている。はちきれそうだったお腹も今は空腹でへこみ、スニーカーは泥だらけである。流石のミツも今日は見つからないかと諦めて家に帰ることにした。数時間前まで活気のあつた明るさが嘘のように消え、気が付けば辺りは街灯の光のみが静かに夜を照らしていた。

このまま見つからないのかな。今までのデータ、なくなっちゃうのかな。もし、明日見つからなければ約束を反故にすることになるなあ。ようやく時間が出来てやっと話せると思つたのに。ミツの不安がどんどん募っていった。

明後日は、姪のユキちゃんの誕生日だ。ユキちゃんは高校生で、お互いに一人っ子だったからか、幼い頃からよく一緒にゲームをして遊んでいた。みっちゃん、みっちゃんとよく私の後ろについてきてユキちゃんを妹のように可愛がっていた。一時期はなかなか家に行けないこともあり疎遠になっていたが、連絡先を交換してからはユキちゃんと頻繁に通

話をしながら一緒にゲームを楽しんでいた。しかし私の仕事を立て込んでしまい、ここ最近には家に帰るころには日を跨いでいることも多く、疲れ果てそのままベッドで寝てしまうことが何日も続き連絡が取れなかった。だから明日は、明日こそはと、前々から約束していた新作ゲームと一緒にしようと思っていた。加えてユキちゃんの誕生日の前日ということもあり、午前零時ぴつたりにはサプライズで祝おうと計画もしていた。

ところが今日、私がスマホをなくしてしまうという大失態を犯してしまったため、その計画は台無しになってしまう可能性が高い。もし、ユキちゃんが楽しみにしていた新作ゲームをダウンロードしながら既読のつかないトーク画面を何時間も待っていたとしたら。もし、約束を破って私ともう遊んでくれなくなってしまったら。そんなことはしない子だと頭ではわかっているけど、どうしてもネガティブなことを考えてしまう。いや、ユキちゃん私の仕事が忙しくて連絡が取れない日でも、メールで日常の出来事や、美味しかったものをわざわざ写真付きで送ってくれる優しい子だ。たとえ見つからなくとも彼女なら、「みっちゃん、遂にやらかしたな」と小馬鹿にしたように笑ってくれるだろう。

……よし、明日は彼女の好きなケーキ屋でモンブランを買って謝りに行こう、ゲームはまた今度にしよう、そう考えながらミツは自宅のマンションを屈指した。

マンションに着くなり、今までかき消されていた疲労が波のように押し寄せてくる。楽しかった思い出が一瞬にして上書きされ、沼に引きずられるような感覚に体が重くなっていく。ポストから荷物の不在票をむしりと、四〇五号室まで階段を一段ずつ上っていく。靴を脱ぎ、部屋着に着替えたところで、潜り込むように迷わずベッドに直行した。今日はもう寝て、明日また頑張ろう、そう決意したその時、足元に何か冷たくて固いものが当たった。

まさか。ミツは確認するまでもなくアレだ、と直感した。伸ばしていた足を引っ込め、布団に対峙するように正座した。袋とじにされているものを一気に剥がすように慎重にかつ勢いよく布団を捲る。

あった。しばらく見ないうちに、心なしか小さくなったように感じたスマホを強く握りしめる。良かった、良かった、何度もそう思った。しかし、なぜ布団にあったのだろうか。スマホをなくした、と気づいた時に布団を捲って確かめたはずなのに。……そういえばとミツは思い返してみると、帰ってすぐスマホを取り出し、メールを確認した後一度布団の上に置いていたはず。それからスマホがないと気づいたときに再びベッドへ行き、布団を

捲つて……。

そうだ。スマホは元々布団の上に置いてあった。しかし、暗色の布団カバーと黒のスマホが同化していたことや、なくしたことでミツが焦って見落とした結果、そのまま布団を捲つてしまい自らスマホを隠してしまっていたのだ。焦ると周りが何も見えなくなってしまう己の性格をこの時ばかりは恨んだ。そして同時に、もう少しきちんと探していたら祭り会場に戻って、小道をひたすら歩き回らなくてよかったのにと少しばかり後悔した。

だが今日は、あれらの落とし物を拾ったことにより救われた人もいたのだ。あそこに居らなければ落とし物が見つからなかったかもしれないし、彼らに感謝されることもなかっただろう。一日であんなに感謝され、自分のしたことで喜ばれたことなんて、そうそうない体験なのだから。そう考えたら、案外今日は運が良かったかもしれない。この物事の切り替えの早さがミツの誇れるところであった。にやにやと抑えきれない笑みが浮かぶ。

黒い画面から一転、明るく画面が光る。続けざまにピロン、ピロンとスマホの通知音が鳴った。画面には二件の新着メッセージ。一つはユキちゃんからだった。

「明日モンブランが食べたいなく駅前のお店の！ 誰か家まで届けてくれないかな？」

ミツは思わずくすつと笑みがこぼれて、買っていった時の彼女の喜んだ顔を思い浮かべると、はいはい、明日買っていきますよ、と数分遅れて返信した。

そして、もう一件のメッセージはサチからだった。

「ミツどうしよう。あれから家帰って探したんだけど財布なくしたみたい……どっかに落としたのかも……」

サチが今、必死に財布を探している姿が脳裏に浮かぶ。一瞬、あれ、今日財布を拾ったようなと脳裏をよぎった。もしかしたら、スマホを探している時にサチとすれ違っていたかもしれないと考えた。いや、今はそんなことを考えている場合じゃない。改めて画面を見たミツは今日の体験を振り返り、

「とりあえず布団の中を探してみて」

とメッセージを送り、重い瞼を閉じた。

数分後、握りしめたスマホから通知音が鳴り響いた。

一方その頃

離れた街灯の灯りがほんの少し差し込む程度の薄暗い小道。焼き鳥の串、空のペットボトル、悲しくも容器から半身零れ落ちた食べかけの焼きそば。ごみ箱はすぐそばにあるのに、一度誰かが捨てた、いや落としてしまったのか。連鎖のように散らばる数々のモノたち。そんな荒れた小道に、毎年常連の空のビール瓶の音がよく響いた。

「で、お前はどうしたんだ？」

突然話をふられたからか、真っ黒でふさふさとした見た目に反し軽快に答えた。

「いやあ、ほら、花火のあと！ 人混みすごかったじゃないっすか、それでこう、ぼろつとね頭から滑り落ちちゃったんすよ。もっと大事に扱ってくれてもいいじゃないっすか。困るのはあの男だつっうのにさあ〜」

ゆっさゆっさと身体を揺らしているのではないかと思うくらい、激しく訴えた。どうも持ち主が上手に固定してくれなかったことに不満たらたらみたいだ。

「私も似たような感じ。でも私は常に大事にされてるわ。だからあの子、いつもしつかり私を離さないでいてくれるのに。でも今日だけは他にもね、ヨーヨーとか金魚とかわたあ

めとかたくさん持っていて……もちろんっ！ 私の優先順位が下がったとかではなくてね。そんな、そんなことは無いと思うのだけど」

「そうですね。大事じゃないから手放したのではないと思うの、きっと今頃必死になって探しているのよ。わたくしも大事にされてるのよ、ほら、こんな刺繍までしてくださって、すっかりアイロンをかけて、大事に扱ってくれるのよ。なのに、私があのキラキラと光る（屋台のもの）に目を奪われてしまったばかりに……彼女の手を握ってなかったのはわたくしのほうなのかもしてないわ。」

橋が黒く濡れてしまった彼女は淑女らしい仕草でほろほろと零れる涙を自身で拭った。

「泣かないで」

「ほんとうにそうかな」と、古びた換気扇が唸った。

「ここには毎年、君たちのような物がたくさん置いていかれるんだ。わたしはここに何十年もいるからね。持ち主が探しに来ることも時にはあるさ。でも、『新しく買えるもの』には人間は執着が薄いんだ。あまり期待しない方がいいとアドバイスだけはしておこうかな。」「じゃあ、買うためには俺が必要なのだから、俺が一番に探されるべきだよな。あいつ、明日給料日なのによ、どうやって金を下ろすってんだ。」

そんなこんなで彼らの嘆きが響く中、ザッザッザッザッ……地面を蹴る慌ただしい足音が聞こえ、砂埃が舞い上がる。きたきた！ 彼女は一体、誰のお迎えに来たのかな。

藍錆薫衣

サークル@オンライン

九条
桜蘭

ここから先は
本人確認のため
身分証明書のご提示を
お願いしております。

新型コロナウイルスの感染拡大が
深刻化していた二〇二〇年。
演劇部に入部希望の
新入生「九条桜蘭」は
オンラインで開かれた交流会で
同じ大学に通う女子大生
「ユズ」に出会うが――

日常に潜む恐怖を描いた

"リアルサスペンス"小説!

*必ず原本をお持ちください

この物語の始まりは二〇二〇年にさかのぼります。私は当時、大学一年生でした。

「彩夏はさ、サークルどうするの？」

「うちは入らないかな。いっぱいバイトして稼ぎたいし。てか、今サークルって活動してるの？」

「先週オンラインで説明会あったし、一応は活動してるらしいよ。けど、やっぱり新歓はどこもないみたい」

「ふーん。さくらはどこか入ろうとしてるの？」

「うーん、まだ迷ってるんだけど……演、劇とか？」

「へえ、意外。でも、そういえば舞台とかよく観に行ってるもんね！ だけど変なサークルには気をつけなよ。飲みサーとか、たまに聞くから」

「さすがに大丈夫でしょ。あ、もう次の授業のZOOM始まるから切るね！ またあとで」

私たちが入学した年は、ちょうどコロナウイルスが流行り始めた年でもあり、入学式も

授業も大学には行けないまま全てオンラインで行われました。新しい友達はありません。新しい友達はありません。高校から仲の良かった櫛田彩夏くしたあやかが同じ学部にいたので、よく通話をして一緒に講義の課題をしたりお互いの悩み相談をしたりしていました。

この時の私には、そんな彩夏にもまだ言えていなかった悩み事がありました。彩夏にはまだ迷っていると言いましたが、私はすでに演劇サークルに入ろうと決めていたのです。

私たちの大学の演劇サークルは、県内ではかなり有名で、OBには全国的に有名な舞台俳優もいます。私は入学前からずっと、そんな演劇サークルの舞台に立つてみたいと思っていました。しかし、特に演技の経験などないため、付き合いの長い彩夏に「演技がしたい」と言うのがなんとなく恥ずかしく、思い切って演劇サークルに入りたいことを匂わせたものの、見学に誘う勇氣も一人で行く勇氣もなく、かれこれ一週間どうしようかと悩んでいたのです。

入部希望者のチャットがあることを知ったのは、それからさらに一週間ほど経ったころでした。オンデマンドの講義資料を横目にネットサーフィンをしていたところ、演劇サークルのSNSアカウントと「**「新生大歓迎」**と書かれたチャットへのURLを見つけた

のです。チャットへ入るにもやや勇氣は要りましたが、アカウント名を自由に決められたため、私は「さくら」という下の名前で新たにアカウントを作り、思い切って入ってみることにしました。

私がチャットへ入ったとき、すでにそのグループの人数は六人だったと記憶しています。有名なサークルの割には人数が少ないな、という印象でした。当時はまだこのチャットの存在を知らない人も少なくないだろうと考えていたのですが、とうとう五月に入って対面での活動が許可されてからも、その人数に変わりはありませんでした。

もちろん、コロナの影響は大きいでしょう。彩夏のように、サークルが動いているかわからないという人も多かったかもしれません。しかし、六人の中にはサークルの勧誘を担当する二人の先輩もいたため、入部希望者が四人という少なさは演劇サークルにとってやはり異例だったそうです。

四月の間は、コロナの影響で対面でのサークル活動も全面的な自粛が求められたため、リモートで新入生に向けたオリエンテーションや交流会が何度か行われました。私たちは、オンライン上で初めてお互いの声を聴き、お互いの顔と名前を知りました。ただ、全

員のフルネームはもう忘れてしまったので、ここでは仮に当時サークル内で呼ばれていたあだ名で記そうと思います。

私と同じ文学部だっただいちゃんは、その前の年の後期に半年間休学をしていたため、同じ学年だけれど年齢は一つ上になるのだそうです。話を聞くと、休学前に少しの間だけ演劇サークルに入っていたようですが、人数が多かったためかほかの先輩方はあまり彼のことを覚えていないようでした。

ハッシーは唯一の理系で違うキャンパスに通っていましたが、演劇が大好きだそうで、サークルにはほぼ毎回顔を出していました。

そして東京出身だという国際学部ユズは、黒髪ツインテールにピンクのワンピースを着た、おそらく本人ではない地雷系少女のアイコンが印象的でした。

オンラインの交流会は毎回十人前後で行われ、先輩方が入れ代わり立ち代わり自己紹介やサークルの紹介をしてくれました。

オンライン上での顔出しは強制ではありませんでしたが、先輩方はみんなカメラをつけて参加していたので、私も顔を出して参加しました。ハッシーも同じく顔を出してい



Participants (9)

Search

- 陸
- さくら
- ほのか
- ユズ

Chat

Send a message

ユズ

ましたが、だいちゃんはスマホからの参加でいつも見切れた頭と天井を写していました。ただ、ユズは毎回マイクもカメラもつけずに参加していました。ワークをするために先輩が「できたら今日はカメラつけてほしい。マイクだけでも」と言った日も、ユズだけはパソコンの調子が悪いと言ってコメント機能のみで会話に参加していました。私は、どうせ恥ずかしいからか、化粧が面倒くさいとかスマホを弄りたいだとか楽をしたいのだろうと勘繰っていました。よくあることでしょう。

けれど、私は同期の中で唯一の同性同士ぜひユズと仲良くしたいと思っていました。顔は見たこともないけれど、実際に会う前に仲良くなっておきたいと思い、個人チャットの交換もしていました。

さかのぼると、最初はこんな会話でした。

『初めまして、一年のさくらです。演劇サークルのグループチャットから追加しました！よろしく願います！』

『さくらちゃん、よろしくね♡ タメでいいよ〜』

『了解！ ユズって呼んでいいかな？』

『うんうん、うちもさくらって呼ぶね！ 早く会えるといいね♡』

この時は、やっと大学で新しい友達ができたのだと嬉しかったのを覚えています。

しかし、ユズとの会話にズレが生じるまでにそう時間はかかりませんでした。四月の最後の週に差し掛かった頃、突然ユズから、

『さくらって文学部だよ？ 明日の一限ってどこの教室？』

というチャットが来ました。文学部では、当時コロナウイルスに対し全面オンライン授業という対策をとっていたため、教室へ行って授業を受けることはありませんでした。

違和感を覚えながらも、他の学部はもう対面授業もあるのかなと思い、あまり気にせず、

『文学部は全部オンラインだから、対面授業はないんだよね〜』

と答えました。その日以降、ユズは「さくらって女の子だよ？」だとか「サークルの男子と会ったことある？ 細くて背が高い一年生いる？」だとか徐々に意図のわからない質問ばかりしてくるようになりました。

さすがの私も不信感が募り、ユズとの会話を彩夏に見せて相談することにしました。

「バイトお疲れ。送ったスクショ見た？」

「さくらもおつ！ 見たみた。国際学部って対面授業あるんだ？ いいなあ……でもうちらも月曜から対面授業始まるじゃん！ 基礎科目だけだけど」

「んね、大学に通えるってことが楽しみ！ ねえ、彩夏はこのユズって子どう思う？」

「なんか、あまり話噛み合っていないよね……うち国際学部に友達いるからその子のこと知ってるか聞いてみようか」

「うわ、さすが彩夏。聞いてもらえるとありがたい」

「てか、さくらやっぱり演劇サークル入ったんだね！ 演劇ってどんなことしてるの？ 楽しい？」

サークルの活動内容とずっと演劇に興味があったこと、同期は少ないけれど先輩方も優しくこれからのサークルが楽しみだと話すと、彩夏は「もしさくらが公演に出るってなったら絶対観に行く！」と言ってくれました。

その翌日、彩夏からは『ごめん、国際学部の友達に聞いたんだけど、ユズって子は知らないって』と送られてきましたが、何百人もいる学部生全員の名前を把握している人などいるはずもないので、仕方のないことだと思います。しかし、続けて『てか、やっぱり

国際学部も対面授業は来週かららしいよ!』と来た時には、じゃああれは一体どういう意味だったのだろうかと考えずにはいられませんでした。

五月に入ると、大学では基礎科目のみですが対面授業が解禁され、同時に対面でのサークル活動も人数と時間の制限付きで許可されました。

対面初日のサークルに顔を出した一年は私とハッシーだけでした。私が前日に個人チャットで送った『明日、ユズも行くでしょ?』というメッセージは未読のまま。その日は、対面で初めての活動ということもあって改めて自己紹介やサークルの活動の流れを確認しました。ハッシーとは個人チャットでのやり取りはなかったものの、オンライン上では何度も顔を合わせていたので、すぐに打ち解けられたのを覚えています。

二日目には、だいちゃんもサークルに顔を出しました。しかし、何日たつてもユズがサークルに来ることはありませんでした。初めは違和感もありましたが、それよりも、お腹から大きな声を出したり実際に体を動かしたりする対面でのサークルはやはりオンラインでの活動の何倍も楽しく、次第に私の中では「たまたま四人しかいない私たちの代だから一度も顔を見せないユズが特別目立っているだけで、そこまで気にすることはないのだ。

幽霊部員という概念もあるのだから」という結論に落ち着きました。

その矢先でした。対面での授業やサークル活動に少し慣れ始めてきたある日、サークル終わりに「さくちゃん、ちよつといい？」と声をかけられました。声の主は新入生の勧誘を担当していた二年目のほのかさんでした。

「このグループに入ってるユズって子と会ったことある？」

「ないんですね、その子一回も来てないですね？」

「だよね……個人チャットで何か話したりしてない？」と聞かれたので、久しぶりに個人チャットを開いてみると、四月末日に私が送った『明日、ユズも行くでしょ？』というメッセージには既読がついており、そこで終わっていました。私は興味本位で「なにかあったんですか？」と聞きましたが、「いや、ちよつと……」と濁されてしまいました。

そこで、私はユズとの会話をほのかさんにすべて見せることにしました。彩夏から聞いた話も含めて、モヤモヤしてて……と。すると、

「うん、やっぱ変だね。あたしも国際学部だけど、うちの大学は全学部オンライン授業だったから教室に行くことはなかったし」

と言われました。そして、「とにかく、見せてくれてありがと。また何かあったら教えてー」と言うとかかを隠しているような様子で慌てて会長のところに行ってしまったので、私のモヤモヤはさらに深まることになりました。

一つ目の騒動が起きたのは、ちょうどその日の夜のことでした。

二十二時を回っても課題に追われていた私は、少し休憩しようとしてスマホを手に取りました。すると、ちょうど五分前に演劇サークル一年目のグループに三件の通知が来ていました。このグループはハッシーたちと対面のサークルで会ったときに作ったもので、メンバーはユズ以外の三人です。三人ということもあり、普段はほとんど稼働していなかったため、私は嫌な予感がしました。

すぐに開いて確認すると、ハッシーから

『ユズってやつと会ったことある方いませんか？いきなりこんなメッセージ来たんだけど……』というメッセージと共に、二枚のスクリーンショットが送られていました。

↓

『演劇サークルで探してる人がいて、今2年生のはずなんですけど……いないので一年生

で探してて、一年の男子で背が高く、眼鏡かけてる方いますか？ よければ教えてください！』20…52

『どういうことですか？』21…00

『最初からその人を探す目的でグループに入りました。ごめんなさい』21…03

『すみません、わかりません。』21…10

『そうですか。ちなみにハッシーさんは身長何センチですか？』21…12

『どうしてそんなことを？』21…13

『低いか高いかだけで結構なので、教えてくれませんか？ 私その人に裏切られたのでどうしてもその人と直接会っている復讐しないといけない事があるので。』21…15

『お騒がせしました、わたしのチャットは消しといてください。おそらく彼が誰か特定できたような気がするので』22…21

嫌な予感には当たるもので、やはりユズに関することでした。ただ、会話の内容は想像以上に不可解で、私はなんと返せばいいかわからずに

『え、なにこれ、怖いね。会ったことはないけど……』と送りました。

だいちゃんはバイトだったらしく、その時は話に参加していませんでしたが、数時間後には彼からも『僕ものところにも来てた……』と似たようなスクリーンショットが送られてきました。

だいちゃんに至っては、数日前からしつこくメッセージが来ており、未読無視をしていたのですが、ハッシーへのメッセージと同じ時間帯に不在着信があり、最後に『やつぱりね』というメッセージが来ていたといいます。

ただ、一年の男子に眼鏡をかけている人はいません。少し怖いけれど、私たちはユズが何か勘違いをしているのだろうという結論に至りました。けれど、さすがの異常さに、私たちは先輩方に報告することになりました。

翌日、ほのかさんともう一人の勧誘担当だった陸りくさんに事情を話し、何人かの先輩方も交えて話し合いました。そこではほのかさんが、昨日は言わなかったんだけど、と前置きをして実は数日前に陸さんのところにも同じようなメッセージがきていたのだと教えてくれました。勧誘用のチャットにはもちろん陸さんもいました。

それを聞いて、私はまた怖くなりました。確かに、陸さんはユズが言っていた特徴によ

く当てはまっています。背が高く細身で、眼鏡をかけています。二年生のはずとも言っていました。であれば、陸さんがユズの恨みを買っていると考えるのが自然です。やはりみんなそう思ったようで、陸さんはわざとふざけたように自ら

「狙われてんの俺じゃね」と言いました。

「うーん、でもだいちちゃんのところには『やっぱりね』って来てるし……だいちちゃん、何か心当たりはない？」

そう尋ねるほのかさんに対し、だいちちゃんは弱ったように「いや……特には……」と言うだけでした。続けて会長が

「りくは心当たりとかないん？」と聞くと、陸さんは

「いや、佐藤ユズキって名前も知らないし心当たりもない。第一、あいつチャットで東京出身とか言ってたじゃん」と言いました。

私はその時初めてユズではなくユズキだったのだということを知りました。ZOOMやチャットの名前はみんな適当にあだ名や下の名前だけという人が多かったためです。私も初めは「さくら」という名前で参加していました。私は対面が始まる頃に「九条さくら」に変更しましたが、ユズはずっと「ユズ」のみでした。

けれど、初回のZOOMに参加する際に、念のため勧誘担当の先輩に個人チャットでフルネームと学籍番号を伝えるようにという指示があったため、先輩方はユズのフルネームを知っていたのでした。

そもそもサークルに入る気がない人が入っていたこと、かなりしつこくメッセージがきた人が何人もいたこと、中には個人情報聞き出そうとしているようなものもあったため、先輩方のほうから念のために学生部に報告をするということでのこの日の話し合いは終わりました。

その日の夜です。先輩方から「ごめんね」というメッセージが来ていたので、私は何事かと思ひ、すぐに確認しました。

先輩方は話し合いの後そのまま学生部に行ったそうです。一連の話を報告すると、なんと国際学部には佐藤ユズキという生徒はいないという事実が発覚したといひます。先輩方は私たち一年の名前と学籍番号を把握していましたが、オンラインで活動していた時点では私たちが仮入部としていたため、その真偽を確認することはなかったそうです。

先輩方は「こっちの確認不足で怖い思いさせちゃってほんとうにごめん」と言いました

が、こんな小説のようなことが現実起こると誰が予想できたでしょうか。

これはあとから聞いた話ですが、学生部は個人情報取扱いに厳しく、たとえサークルであっても入部時以外は特別な理由がない限り在籍の有無も教えてくれないそうです。

やがて本格的な梅雨入りを迎えると、夏に行われる新人公演に向けての準備が進められました。

「ユズの件」は謎のまま、しかし全員が彼女をブロックし学校側もネット上のサークル活動について注意喚起をするという形で幕を閉じました。当初は誰もがモヤモヤした気持ちでいたと思います。少なくとも私はそうでした。それでも、来たる新人公演に向けて本会議や役決め、台本読みをする中でそのもやもやは次第に薄れていきました。私たちは毎日のように空き教室に集まり、表現の仕方や舞台の魅せ方についてそれぞれが一生懸命考え、たくさん動きました。

しかし、私たちが時間をかけて準備してきた舞台が上演されることはありませんでした。

公演の二週間ほど前だったでしょうか。コロナウイルスの感染者が国内で千人を超えた

と報道され、私たちの公演には暗雲が立ち込めました。その雲は晴れることなく、ついには再び対面でのサークル活動が自粛に。そのまま公演も中止となってしまったのです。

ここで私はサークルを辞めました。

新人公演が中止となり、授業も再び全面オンラインに切り替わった当時、家にいることが増えた私は考え事をする時間も増えました。私に限らず、その頃は誰もが「いつコロナ前に戻れるのだろうか、いやそもそもコロナ前には戻れるときは来るのだろうか」と考えたことでしょうか。

このままサークルを続けても、コロナ前のような公演ができるとは限らないし、上演にいたることすら難しいかもしれない。今回のように、たくさん準備をしても直前でまたすべて白紙になるかもしれない、いやその可能性が高いのではないだろうか。それなら、彩夏のようにバイトをして遊んで勉強して、資格やスキルを身につけたほうが就活も有利なのではないか。

悩んだ末、私は入学時の憧れでもあった演劇サークルを辞めました。このことを相談したとき、彩夏が「いいじゃん！ 大学生活、サークルがすべてじゃないから。現にうちは

めっちゃ充実してるし」と言ってくれたことも、私がきっぱりとサークルを辞めることができた理由の一つでした。

同じ学部のだいちゃんとはまた基礎科目で同じクラスでしたが、お互い特に話すこともなく月日が流れていきました。そして、このころ私はスマホを買替えると同時にSNSのアカウントもすべて変えてしまったので、早い段階ですっかりサークルとは接点がなくなりました。

ところが縁とは不思議なもので、私は思わぬ形で再びサークルに関わることになりました。

二つ目の騒動が起きたのは、新人公演の中止が決まった時期のちょうど一年後のことでした。私たちは二年生になり、一つ目の騒動を忘れかけていた頃です。

このころになると、大学の授業は受講人数が制限された上で約半数の科目は対面で受けることができるようになっていました。その日も、私は基礎科目の講義を受けるために教室へ向かっていました。いつもと違っていたのは、教室を入ろうとしたところで「さくら

だよね？」と呼び止められたことでした。

「俺のこと覚えてる？」

そう声をかけてきたのは演劇サークルの元同期であるハッシーでした。私は人の顔と名前を覚えるのが得意なのですぐに彼のことがわかりましたが、今となっては彼も一年も会っていないマスク姿の私によく気づいたなと思います。

「話したいことあるんだけど……これから授業だよね？　じゃあ手短かに。まず、一つ確認なんだけど、金曜日の脚本会議に参加してないよね？」

「どういふこと？」私は意味が分かりませんでした。

「だよね。簡単に言うと、サークルにさくらのなりすましが出た。これ、時間あるときに読んでほしい。さくらのアカウント消えてたから」

そう言うとハッシーは一通の手紙を渡してきました。私は混乱して、そのあとの授業の内容が頭に入ってきたませんでした。手紙の内容はこうでした。

『さくらへ

久しぶり！　突然だけど、先週末にあった新人公演の脚本会議にさくらのなりすましが現れました。詳しく説明したいし、さくらからも聞きたいことがあります。

連絡先を書いておくので、時間のある時に連絡ください。よろしく！

電話・090-XXXX-XXXX

チャット・@hasimoto_yuto

追伸

今年の新人公演はオンラインで配信する予定で、僕が脚本を担当することになりました。時間があれば、ぜひ見に来てね。

橋本悠斗

私は授業が終わるとすぐにID検索をしてメッセージを送りました。

『久しぶり。チャットのアカウントはスマホを変えたときに一緒に変えてしまいました、ごめんね。なりすましのこと、まずは教えてくれてありがとう。また話したいから、よければ電話ください』

それから十分とかわからずに着信があり、私はハッシーから当時の状況を聞きました。

彼によると、私のなりすましがでたのは新人公演に向けたZOOMでの脚本会議だったそうです。ハッシーは初め画面共有をしていて気付かなかったそうですが、共有を切ったときに参加者の中に「九条桜蘭」という名前があることに気づいたそうです。

「最初『桜蘭』って読めなくてさ。一瞬誰かわからなかったんだけど、九条って名字で思い出したわ」

そして、「さくらじゃん！」と声をかけたそうですが、画面の中の「さくら」は終始音声もカメラもオフのまま反応もなかったと言います。

「さくらがまた戻ってきてくれたんだ、って思ったのにさ……」

しかし、まったく反応を示さない「さくら」に、だんだんと不信感を覚えたと言います。

そこまで聞いて、私は思いました。私になりすましていたのはサークル内の人間ではないかと。URLをサークルのグループチャットにしか送っていないのならば、外部の人間が入れるわけがありません。そのことを彼に話すと、

「いや、そうなんだよ。でも、だいちゃんから同じ講義にさくらがいるって話を聞いてたから、あいつがURL送ったりしたのかと思って……」と言います。

そこで、私はふと違和感を覚えました。もちろん、一年生は私の存在を知りません。先輩方も、たった数か月いただけの後輩の名前を覚えているでしょうか。もつと言うと、桜蘭という私の漢字なまえがわかるでしょうか。桜に蘭でさくらという名前は初見では読まれにく

く、テストや書類以外では自分でもひらがなでさくらと書く癖がついているため、ユズはもちろん、先輩方にさえ桜蘭という漢字は教えていないはずです。

「確かに、なりすまし見るまでさくらって名前ひらがなだと思ってたわ。……なるほど、同じ授業を受けていて座席名簿を見ることができたあいつなら、漢字がわかると」

俺から本人に聞いてみてまた連絡するよ、ハッシーはそう言う通話を切りました。

翌日、私がこの話をすると彩夏は、「その話だと、やっぱさくらが一番怪しいでしょ」と言っつけてらけると笑いました。

「さくら目線でいくと大輝が怪しいのはともかく、ハッシーはよくそんなさくらのこと信じられるね。小説でいくとき、アカウント消してサークルも辞めるとかフラグじゃん」
「小説に例えないでよ。私にとっては割と重大なことなんだから。でもさ、仮に小説だとしても、私が犯人だったら私の名前を使うのはおかしいでしょ？」

「まあ、それもそっか。でも、ほかの人から見たら怪しい立ち位置にいるのはさくらなわけじゃん？ まあさくらがそんなことするわけないってのは、うちが一番よくわかってるんだけどね！」

そう言つて彩夏はまた愉快そうに笑いました。そんな笑いごとじゃないんだけどなど思いつながら、彩夏の笑い声を聞いているうちになりすましながらほんの小さなことのように思えてきました。

それからハッシーとは共通の友達と数人で飲む機会もあり、よく話す仲になりました。あとになつて聞いた話ですが、事情を知らない後輩たちはやはり私を疑つていたそうです。それでもハッシーは「ユズのことであつたし、先輩や俺らはさくらのことは疑つてなかつた」と言つてくれました。

なりすまし騒動については、だいちゃんに問い詰めたところかなり動揺していたものやつていないと言つたそうです。ただ、その一か月後に彼はサークルを辞めたと言います。

彼が本当に私になりすましていたのか、なぜなりすましていたのか、私にはもはや知るすべがありません。しかし、私は彼が一連の騒動の犯人であつたと思つたのです。

ユズの件を振り返ると、当時彼が送つてきたスクリーンショットには不自然な点が多くありました。会話の時間や日付、上に表示される機種や電波状況をすべて隠してあるので

す。それが何を意味しているかはわかりませんが、とにかく彼が授業名簿で私の名前をみてなりすましたのでしょうか。その証拠に、もう半年ほど前から基礎科目の講義でも彼の姿を見かけなくなりました。

自分なりに「すまされるなんて本当にあるのだと初めは怖かったけれど、それから何か事件があるわけでもなく、二年経った今ではこうして誰かに話したくなる珍しい体験です。」

ただ、その動機や目的は結局謎のままです。私は先のことを考えて行動する性格ですが、これらの騒動はもう終わったことだと思い込み、それらの謎を放置するリスクには気がつきませんでした。

三つ目の事件が起きたのは、つい先週のことです。

数人の親しい友達にしか教えていない私の裏垢にフォロワーリクエストが届きました。そのプロフィールを見て、私は凍りつきました。ユズという名前にあの地雷系少女のアイコン、フォローは私のみでフォロワーには誰もいません。すぐにブロックしましたが、そのとき思ったのです。

——だいちちゃんが犯人であってほしいと。

この物語はフィクションです。実在の人物・団体とは一切関係ありません。

周りを見渡せば

「ホラー」や「サスペンス」と聞いて、あなたは何を思い浮かべるだろうか。

幽霊？ 呪い？ それとも殺人鬼やカルト宗教だろうか？ 映画に例えるなら『貞子』や『呪怨』、『アメリカンサイコ』や『JAWS』なんかもその代表例だろう。

とにかく、ホラー・サスペンス作品というものは映画や小説を問わず人々を魅了してきた人気ジャンルの一つである。

今回、九条桜蘭先生が執筆した作品は同じくホラー……なに？ ホラーは大の苦手？ 大丈夫大丈夫！ そこは安心してほしい。

まず、相手は人間だ。壁や天井をすり抜けることもなければ、液晶画面からあなたの首を絞めにやってくるわけでもない。

次に、それらはあなたの生命を脅かすようなものではない。パトリック・ベイトマンのように魅力的な微笑みをたたえながら斧であなたの頭を真っ二つにすることもなし、ヒト喰いサメのように、何十もの鋭い歯であなたの身体を貫き海に引きずり込むこともない。そう！ 全然大丈夫だ！ 何も怖がる必要はない！ ただあなたが知っているはずの

「誰か」を名乗り、背後から蛇のようにとも立てずに忍び寄って、何が目的かも告げずに手のひらに浮かぶ画面の底から誰にも知られることなくあなたをただ静かにジッと覗いているだけである……ダメだ、恐ろしい。

特に、お互い会って顔を合わせる機会に恵まれなかったコロナ世代の人ならば、この物語がどれほど現実的でどれ程おぞましい話であるのかわかってくれるだろう。

話は変わるが先日、国民的人気女優のAさんのSNSアカウントが実はなりすましであったという記事を見つけた。幸い、その偽アカウントを使ってAさんの名を汚すような行為はなかったようだが、驚くべきはそのフォロワー数である。

一七〇万人。一七〇万人がAさんの偽アカウントをフォローしていたのである。そう、その気になれば誰でもスマホ一つで一七〇万人をやすやすと騙せるのである。果たして、あなたが今後その一七〇万人のうちの一人にならない保証はあるのだろうか。

「ユズ」は思ったよりも私たちの身近に潜んでいるようだ。

田中楓夏

『地球の歩き方 改訂版』

ニコゴリ

——シャンシャン

「私は~~ニコゴリ~~に選ばれました」
皆が私を祝福し、喜びに輝いた眼で見つめる

——ゴウゴウ

役目を全うした君に深い深い感謝を送ります——

父が死んだ。享年800歳だった。

つい最近発表された平均寿命を鑑みると、まあ中々頑張った方なのではないだろうか。そう考えながら、融葬を終えた父のコアを揺らしてみる。丸い綺麗なガラス瓶の中で蛍光ピンクの液体が波打つのを眺めながら、私はゆっくりと目を閉じた。

「お前地球には行かないのか」

「地球？ なんだっけそれ」

「ここから二、三個ワームホールを経由したところにある星のことだ。まあまあな田舎だな」

「随分遠いね。そんな遠いとこあんまり行きたいと思わないけど」

一日のほとんどをベッドの上で過ごすようになった父は、満足に動かない手足の代わりに口をよく動かすようになった。病床に伏す前とは打って変わって親しみやすくなった父に喜びを覚えつつも、会話に比例するように増えていく体に繋がれている管を見ると、純粹に会話を楽しむこともできない。

そんな時だった。父が「地球」という星の話を私にしたのは。

「まあまあ、父さんの話を聞いたらお前も行きたくなくなるさ。あとこれやる」

父は枯れ枝のように細くなってしまった腕をこちらに伸ばしてきた。

『地球の歩き方』？ 随分古そうだけどこれがどうしたの？」

父がポイッと寄越してきたものはある雑誌だった。近年ではあまり見かけなくなつた紙の雑誌には、所々折り目や付箋がついており、随分使い込まれたのだなと想像することができた。裏面には几帳面に父の名前が記されていた。

「それはガイドブックだ。ちよつと古いが地球について知るのには良い資料になるだろう。そう言いながら父はベッドの横にある棚をこそそと探り始めた。「おーあつたあつた」と言いながら取り出したのは、これまた年季の入つた一枚の写真だった。

「ほれ、これが地球旅行の時の写真。お前が生まれる前に母さんと二人で行つたんだ。懐かしいなあ」

「うわ二人とも若！ へえ父さんと母さんつてこんな感じだったんだ」

「イケてるだろ？」

「まあ私の親だしイケてないと困るけど。……この背景にあるのは？」

そこに写っていたのは若い両親だった。少し仏頂面（本当は照れ隠しだろう）の父と満

面の笑みの母が、手をつないでいる。後ろには豊かな自然が写っており、二足歩行の生物が、自然にまぎれるように写り込んでいた。これが地球人なのだろうか。

「ああ、この船は私たちが乗ってきた観光船だな。後ろに写ってるのは地球人で、私たちの手助けをしてくれたんだ」

「へえ、そうだったんだ。手助けって何かあったの？」

「ああ、実は観光船が故障してな。乗客は父さんと母さんしかいなかったし、船長は故障に引つ張られて寝込んでしまっただけで帰れなくなっただけな」

「そんなことになってたんだ。でも地球って田舎なんですよ？ 観光船の故障で困ったときに助けになんてなるの？ もしかして食料として助けになったとか？」

私たちの住む星は周りの銀河系に比べても栄えているところに位置しており、様々な種族や技術が集まる場所になっている。そのために父や母が乗った観光船も相当な技術の下に生み出されたものだろう。それがワームホールを複数経由しないとたどり着けないような田舎の星の技術でどうかできるものだと私は私にはとても信じられなかった。食料として役立ったという方がまだ現実的なものだ。私たちにとって食事とはそう簡単に人前で言うようなものではないし、そちらもほぼあり得ない話ではあるが……。

「いやいや意外にも地球の技術は洗練されていてな。私たちのものには遠く及ばないものの応急処置くらいは可能だったんだよ。食料としてはまあ、あともう少し滞在することになっていたらこっそり頂戴はしていたかもしれないが」

「そんなことしたら多分母さんに見つかってすぐ怒られるだろうね。でも地球って案外すごいところなんだ」

「私も正直最初はダメだと思ったさ。だが応急処置くらいはできる技術力を持ち合わせていてな。孤立していながらここまで発展したこともすごいが、一番驚いたのは人柄だな。最初は怯えてはいたものの言葉が交わせることがわかって、見ず知らずの異星人である私たちを助けてくれた優しさはここらでも中々見ることはできないなあ」

「人が良い星なんだ。でも今のところ行きたい要素は全然ないけど」

「まあまあここからが本番だ」

父はそう言ってさらにもう一枚写真を見せてきた。そこには同じ服を着た地球人が何人も写っており、何かを囲んでいるようだった。古い写真でそこまで鮮明なものではないが、どこか写真に写る人々は高揚しているようにも感じられた。

「これが地球に行きたくなる理由？」

「ああ。これはある村で撮った写真なんだが、儀式のようなことをしている最中のものでな。私たちもこっそり見ていたから詳しく知ることはできなかったんだが、中々興味深いことをしていたんだよ」

「まずこの村にこっそり入った理由が気になるけどね。でも儀式か……」

「ああ、船の修理を待ってる間に暇だったからちよつと抜け出してな。そんなことはまあどうでも良いんだが、お前、たしかいろんな種族の文化について何か書いてただろ？地球について調べてる奴なんていないし、この儀式について書いたら面白いんじゃないか？」

「助けてもらってるのに抜け出したらダメじゃん……まあ、たしかに文化とか儀礼について調べたり書いたりはしてるけどさあ。需要があんまりなさそうなものについて書くのもなあ」

正直、父の提案にはかなり心を揺さぶられていた。というか、今後のスケジュールについて休みを取れるかどうか考えるくらいには行く気持ちになっていた。ただ、あまりに私特効の誘い文句を繰り返してくる父へのちよつとした反抗心からか、すぐにはうんと言えなかった。

「需要がどうだなんて関係ないだろ？　そもそも私たちラグリアは元来新たな知識には弱いからなあ。まだ誰も知らないものなんて、私たちにとっては垂涎ものだ」

「それに！　母さんが好きだった星でもある。これだけでも十分、地球に行く価値はあると思うぞ？」

父はそう言って穏やかに笑った。母のことを言われてしまえば私に勝ち目はなし。こうして、私は地球に向かうことを改めて決めた。父が亡くなる、三か月前のことだった。

「——地球に到着いたします。空気成分表は座席のモニターをご確認ください。スーツをお求めの方は乗務員までお申し付けください。現地時刻は——」

機械的に繰り返されるアナウンスで、私は目を覚ました。手にはしっかりとガラス瓶が握られている。少し揺らしてみれば、私しかない船内に思ったよりも大きく、チャプチャプという音が響いた。

「結局、父さんと母さんの思い出巡りみたいになっちゃったな」

私は懐から一枚の写真を取り出した。父が最期まで持っていた、あの地球旅行の写真。

若かりし頃の両親が、船が壊れているのに呑気に撮影した記念の写真だ。

「まもなく到着いたします。これより到着までは席をお立ちにならないようお願いいたします。なお、地球観光の際には連合指定のルールブックをお読みいただくようお願いをしております。ご協力よろしくお願いいたします」

写真を眺めていると、新たにアナウンスが流れる。どうやらそろそろ地球へ降り立つらしい。私は写真とガラス瓶をカバンにしまいこんだ。少しの間ではあるが手持ち無沙汰になつてしまい、アナウンスにもあったルールブックを確認するためにモニターを操作した。適当に流し見していると、中々面白いことが書いてある。「むやみに現地の生物を食べない」「記憶改ざん等は既定の範囲内で」（これは私たちラギファ向けのルールだろうか）「ワープのための座標の設置は禁止（トルプの方は要検査）」などなど、様々なことが書いてあった。

「ハルを連れてくるのはやっぱり難しそうだな」

私のパートナーであるハルは独自にワープができるトルプの出身であるため、もしこの旅行に連れてきていたら検査や制約の多さにきつとうんざりしていただろうな、と想像する。煩雑なことが苦手なあの子は、検査やルールが大嫌いなのだ。六本の脚をバタバタさ

せて怒っている様子を思い浮かべてしまい、思わず笑ってしまった。慌てて辺りを見渡し、
そういえば私一人だったと落ち着いているうちに、船は地球へと降り立った。

ワームホールを経由したとはいえ、六時間も船に乗っていたらしい。私は凝り固まった
体を思いっきり伸ばしながら、辺りを見渡した。

観光船が停まる場所とは思えない程、辺りにはただただ自然が広がっているのみだった。
土産屋なんてものはなく、本当にただひらけた場所に降り立ったという感じだ。不時着し
たと言われても信じてしまいそうなほど何も無い。

「よお都会っ子！ よくこんなところに来ようと思ったなあ」

突然そう話しかけられ、私は伸ばしていた手足を元通りにして声の方へ向き直った。

「あなたは？」

「俺はあんたが乗ってきたこの船の船長、コールだ。久々の客で嬉しいよ」

フランクに話しかけてきたのは、どうやら私が乗ってきた観光船の船長らしい。私も「ト
ラクです」と名乗り、握手をした。その手は大きく、手のひらにあたる部分には何かをは

めこむ穴のようなものが開いていた。やはり船長という職にはツーツー人が多いらしい。船や乗り物と感覚を共有することができる彼らにとって、こういった職業は天職なのだろう。

「それにしても、まさかラグファから地球に来る奴がいるとはねえ。最後にあんと同じ星から乗ってきた客から500年経つのか。」

「私と同じラグファ人ですか？　もしかして二人組？」

「ああそうだよ。たしかソラテとクルグだったかな。見ていて微笑ましい二人だったよ」
なんともまあ面白い偶然もあるものだ。どうやら私は両親と同じ船長の船に乗っていたらしい。さらに船長の話が本当なら、この地球には両親以来私以外のラグファ人は来っていないそうだ。地球とラグファを結ぶ船は中々出ないため、ほぼ確実だろう。

「なんだいあんと知り合いかい？」

「ええ、実はその二人に地球をおすすめされて……」

「なんだそういうことだったのか！　なんだか嬉しいねえ！　よし、これやるよ」

私の話を聞き嬉しそうに破顔した船長は、船の側面を探ると、あるものを取り出してきた。

「これは……スーツですか？」

「ああ。ちよつと古い型落ちの物だがあると中々便利だから使ってみな」

それは地球人を模したスーツだった。父にもらったガイドブックに載っていた平均的な地球人の体格で、顔はアジアと呼ばれる地域の人々の特徴を捉えたものだった。

「ご厚意はありがたいのですが、私には記憶改ざん等もありますし……」

スーツは基本、かなり特徴的な見た目をした種族が旅先の星に合わせた格好をしたり、生身ではあまり出歩きたくない者のために用意されている。私は今回スーツを利用する気はなかったために、提案はありがたかったが断ることにした。

「そうかい？ まあこれは観光つてより調査向けの機能が付いたスーツだしなあ」

「調査向け？」

私は思わず船長の言葉に反応してしまった。「調査向け」なら私の目的にぴったりだ。そのためにもっといろいろ機能があるのか気になってしまったのだ。

「あ、ああ。調査向けに自動記録の機能やら透明化やらの機能が組み込まれてんだ。ただ需要があんまりなくてなあ」

「やっぱり使いたいです！」

透明化に自動記録。私がまさに求めていたものだった。スーツはあまり着心地が良くないと聞かため記憶操作等を使い調査を進めようと思っていたのだが、まあ中々の労力がかかる。スーツでその肩代わりができるのなら是非利用したい。船長も少し引くくらいの熱量で、私はそのスーツを使わせてくれるようお願いした。

「も、もちろん使ってください！ 機能の使い方はスーツを着用すればすぐわかるし大丈夫だと思いが、耐久性はそんなに高くないからな。普通の地球人と同じくらいだ。」

「はい！ ありがとうございます！」

「まあ何をするのかは知らんが、楽しめよ！ もし帰りが早くなるなら呼んでみてくれ。今は閑散期だからもしかしたら迎えに来れるかもしれないねえしな」

「何から何までありがとうございます！」

「おう！ じゃあまたな」

そうして船は地球を離れていった。私はそれを見送った後、早速船長から譲り受けたスーツを着用してみた。意外と違和感はないが、まるで本当に地球人になったかのように骨や内臓まで再現されているようだ。私本来の体はスーツで再現された地球人の体にひっついていていような感じなのだろうか。しかしいつも自分の体を動かす感覚と同じように体を

動かせることができ、説明にあつた機能も問題なく使用できた。

「本当に地球に来たんだなあ」

私はじわじわと湧きあがってくる高揚感を胸に、事前に父に聞いた情報を頼りに目的の村へと向かった。……移動にはスーツより生身の方が便利だったのは少し悲しかったが。

○月×日…定期記録（10089）

・検査↓終了。20名の内3名不適格。

17名被験者追加。ワクチン投与済み。今後の経過観察にユエを指定。

一週間後天候操作。本日から準備を開始。

緑が鮮やかな山々から流れる清流には、科学的汚染など一つも見られない。日の光を受けて輝く中に生命は感じられず、不気味なまでの透明感がどこまでも続いている。父がいたあの清潔なベッドにも似た空虚なものが、流れに乗ってやってくる。

「空も川も人工物か……少し残念」

偽物の日の光を受けて汗が一筋額から流れた。このスーツは大変優秀で、生理現象も違和感が無い程度に再現されているらしい。人工皮膚を滑ってゆくこの汗はオイルなのかただの水なのか、それとも本当に汗とよばれるものなのか、とにかくその感覚を記録する。

「ソラさん！ そろそろ休憩時間ですよ」

「ええ。今行きます」

二日前、私は目的の村に到着した。道中、ガイドブックにも記述があつた自然豊かな景色（宇宙船と思わしき建造物と植物のアートは特に感動した）を楽しみながらも半日程度で村に到着したのだが、案外そこから長かった。村の入口には列ができており、村に入るためにとにかく多くの検査が行われたのだ。私のパートナーであるハルほどではなくとも私もあまり検査や待ち時間が好きではない。なにより貴重な休暇を使って今回地球を訪れていたの、少し記憶操作を使わせていただいたというわけだ。ガイドブックには地球人、特に今私がいる地域の人々は並ぶのが好きだと書いてあつたが、さすがに異星人である私には耐え難いものだったことは理解してほしい。

そんなこんなで私は地球人「ソラ」として村の一員になった。私以外にも数人村に入つた者がいたが、彼らはきつとここに定住するのだろう。どうやらこの村は地球人にとって

憧れの場所らしい。村の外で並んでいた地球人は皆、この村に住みたいと話していたのだ。

「ソラさんもちよつとはこの村の住民らしくなってきましたねえ」

「いえ、まだまだわからないことだらけで……」

「いやいや、たった三日でここまで馴染んでる方が珍しいよ」

「皆さんが優しく色々教えてくださるおかげです」

12時半。この村で定められている休憩時間だ。私たちはこの時間になると村の集会場に集まり、皆でお茶を飲み、話し、そうしてきつちり一時間後に作業に戻る。

この村のモットーは自給自足だ。野菜や穀物等は自分達で、それ以外の肉や魚、嗜好品等は週に一度村を訪れる行商人から手に入れる。また、行商人と一緒に医者もやって来て、村人全員に薬を投与する。どうやら外界ではやっている病を防ぐものらしい。そのために村に入る際の検査も厳重なのだ、私に色々ここでの暮らしを教えてくれるユエという女性が言っていた。「あなたもあの検査を受けたのでしょうか？ 大変でしたね」と言われた際は若干後ろめたかったが。

「ユエ、ちよつとこつちへ来てくれ」

「はい村長。皆さん、あと32分56秒ゆっくりしてくださいね」

自分達で作った野菜と共にお茶を飲んで談笑していると、村長がユエを呼び、二人は私たちのいる広間とは別の部屋へ消えていく。昨日も一昨日も同じように二人は別室へ移動していき、きつちり休憩時間が終わるまで出てはこないのだ。他の村人は不思議なことに二人には無関心なようで、話を止めたり二人に声をかけるものは誰一人いない。まるで休憩時間の談笑は止めてはいけないものかのように、村人たちは毎日お茶を飲み色々な話に興じるのだ。笑い声をあげるタイミングも、お茶を飲むタイミングも、すべてが定められているかのように常に穏やかで変化の無い時間が流れている。

滞在三日目にして、この村についてわかったことがある。この村では、毎日毎日同じことが繰り返されているのだ。大まかなルーティンがあるだけなら何ら不思議なことではない。だがこの村では、作業時間はもちろん休憩時間、起床時間、果てには飲食のタイミングまでもが、毎日同じタイミングに行われているのだ。最初は気のせいかとも思ったが、スーツの記録を確認することで疑問は確信に変わった。

「まるでコンピューターだな」

「何か言ったかい？」

「いいえなんでもないですよ。そろそろ休憩時間も終わりですね」

「ああ、作業に戻らなきゃ」

危ない危ない。考えていることを口に出してしまふ私の癖が出てしまった。私に声をかけてきた男性は無骨な腕時計を確認し、きびきびと集会場を出ていく。他の村人たちもそれに続くようにぞろぞろと広間を後にする。先ほどまでの穏やかな雰囲気から、勤勉な雰囲気へ一気に変わるその様子は、夢から現実への移り変わりに似ている。村人たちが動いたなら、そろそろあの二人も出てくるだろうなと考えていると、二人が消えていった別室の扉が開いた。そうそう、もう一つ私が気づいたことがある。ここの村人は全員同じ腕時計を身に着けている。だがしかし、村長とユエだけ違うデザインの時計をしているのだ。何かしらの階級があるのか、役割があるのか、詳しいことはわからないが、二人がつけている腕時計は時折淡く光る。その光は、私に母を思い出させるのだ。父と同じように今はもう小さなガラス瓶の中で揺れている、母の色を。

○月×日…定期記録（100110）

・追加被験者…概ね良好・ワクチンへの拒否反応無。引き続き均一化を続行。

天候操作…第一フェーズ完了。内容…川の氾濫に確定。

処分対象…基準値に満たない5名。内1名を監視役が選定・報告会にて結果を報告。

朝6時。村で定められた時間に間に合うためにはこの時間に起きなければならないのだが、5日目の今日、私はこの村に来て初めて寝坊してしまった。起きた時には6時を20分ほど過ぎており、急いで身支度を終えたものの集合時間に少し遅れてしまった。この村では毎朝皆で朝食を食べるため、集合時間が設けられているのだ。

「すみません！ 遅れてしまいました」

結局集合時間から3分遅れて、私は集合場所である村唯一の食堂へたどり着いた。もう先に朝食を食べているだろうなと考え、少しがたつく扉を引くと、誰も席についていなかった。テーブルの上にはまだ温かいのか、湯気があがっている料理が人数分用意されているのだが、肝心の村人たちの姿が見えない。不思議に思い食堂全体を見渡すと、テーブルの陰に何か足のようなものが見えた。そちらへ近づくと、なぜか村人全員が床に頭を擦りつけ、這い蹲っていた。

「あの、すみません」

「……ああソラさん！ 早くあなたも赦しを乞わないと！」

私の声に反応したのはユエだった。いつも穏やかな笑みをたたえている彼女だが、私に気づくと必死の形相でこちらへ駆け寄り、見た目からは想像できない程強い力で私の体を床に押さえつけた。

「ど、どうしたんですか!？」

「いいから早くあなたも赦しを乞うのよ! 定刻から3分と15秒も遅れてしまったのだから!」

あまりの力に私の体、いや正確にはスーツの節々が嫌な音を立てる。いくら型落ちとは言えここまで力の差があるものなのかと疑問に思いながらも、私は何とか身をよじって拘束から抜け出そうとした。しかしユエだけでなく周りの村人も突然私に覆いかぶさり、数人がかりで、しかも強い力で押さえつけられる。ついに肩の辺りからゴリンと音がし、次いで何かがずれたような感覚が伝わってきた。私自身の体ではないため痛みはないが、人工皮膚の上をいくつもの汗が伝うのを感じ、私は大人しくすることにした。抵抗が止んだとわかると村人たちは自分の元いた場所に戻り、再度床に這い蹲った。ユエだけが私のそばに残り、私の頭に手を乗せながら何かをぶつぶつ呟いていた。さっきの衝撃でこの音声がちゃんと記録されていなかったら残念だなと考えながら、ただ黙って私も這い蹲る。ユ

エが何かを呟いている間、腕時計がああ淡い光を放っていた。

そうしてしばらくした後、腕時計の光がおさまると同時にユエが立ち上がった。一拍遅れて他の村人たちも立ち上がり、私もそれに合わせて立ち上がる。一応肩の辺りを痛めたように装いながら、よろよろと立ち上がるようにした。

「ごめんなさいね突然。でもわかってほしいの」

ユエはいつものあの穏やかな顔で、私にそう言った。謝罪の言葉を口にはしているものの、その目には私への非難が込められていた。

「いいえ、私が遅れてしまったのが悪かったので」

「朝も早いからしょうがないことだとは思うのよ。でもね、私たちは決められた通りに行動しないといけないの」

そう言うと、ユエは村人たちに向かって厳かに両手を挙げた。その合図を皮切りに、何事もなかったかのように皆席に着き朝食を食べ始める。先ほどまでの異様な雰囲気はもうどこにも見当たらず、村人たちは談笑しながら食事を進めていく。相も変わらず決まった動きで進められるその行為は、食事というよりは儀式のようなものに感じられた。

「日々を穏やかに過ごすためにはルールが必要な。余計なことを考えられないような

絶対的なルールが。考えるからいけないのよ。ただ与えられた環境で私たちは生きていけば良い」

ユエは変わらず穏やかな表情で突然そんなことを口にした。鮮やかな青色の目には、食事を楽しむ村人たちが映っている。

「てつきり人間は自由を欲する生き物だと思っていました。ここの人々は違うんですね」「自由？ 自由なんて悍ましいもの、私たちには必要ない。あんな無責任なもの、あつたつて災いのモトにしかならないでしょう？ いつ起きていつ寝るか、いつ、何を食べるのか、果てには呼吸のタイミングまでも絶対的なもので定められていけば、何も考えずに、ただ幸せだけを享受できる。すべての憂いから、私たちは解放されるの」

ユエはそう静かに言った。私に語り掛けているはずなのに、まるで自らに言い聞かせているような口調で。心の底から自らの「幸せ」に感謝しているような、そんな顔をして。その顔はユエがそうしたくて作っているものなのか、はたまた私が今身に着けている人工皮膚のように予め定められた通りに動いているだけなのかは私には見分けがつかなかった。

人工の空を仰いで暮らし、人工の自然に感謝して生きるこの人々は、果たして父と母が昔相対した地球人と同じ種族なのだろうか。あの写真に写り込んでいた少し控えめな、所謂人間らしい挙動が、正しく同じ意味でこの人々にも行えるのだろうか。

まあとにかく一つはつきりと言えるのは、地球はやはり田舎なのだということだ。「田舎者は自分達の世界が絶対。例外にはあなたのピーナツアレルギー並みに敏感になるものなのよ」なんてハルも言っていたし。

○月×日…定期記録（100115）

定刻通り操作完了。4名の処分も滞りなく完了。

ユエからの報告有。被験者NO. 159。上記の者を贄とする。

儀式の責任者にリクを指定。尊^{ミコトビ}火を開始。3日後儀式を遂行。

「昨夜は酷かったなあ」

「ああ、ここ数十年は大人しかつたんだが……」

「せつかく私たちの仲間になったのに、こんな形で亡くなるなんてねえ」

あちこちで人々の囁き声がひしめき合い、それらが一体となって大きな渦を作り出している。黒一色の同じ服を着た村人たちは皆同じ顔をし、皆同じ話をしているが、誰一人涙は流していなかった。

昨晩は珍しく大雨が続き、どうやら川が氾濫したらしい。この村も結構広く、私が住んでいる区域からはだいたい離れた場所での出来事だったそうだ。人々が囲んでいる四つの白い箱の上には、私と同じ時期にこの村へ来た男性四人の写真が置いてある。どうやら今回の川の氾濫に彼らの家が吞まれてしまったらしい。死体はかなり損傷していたために、村長以外誰も彼らの姿を見ることなく、彼らは焼かれ骨になったそうだ。もちろんこの行為も記録しておく。地球人の文化として貴重な資料になるからだ。亡くなった彼らには申し訳ないが、私の研究の糧になってもらおう。

「皆、聞いてくれ」

村長がそう言うと、一気にざわめきは静まった。壁にかかった少し古ぼけた時計が時を刻む音だけが、静まり返った室内に響いている。

「ここ数十年、村はいつも穏やかで、山も川も私たちを静かに見守ってくれていた。だ

がしかし、今回このような悲しい事故が起こってしまった」

村長は声を震わせ、少しの間をおいてからまた話し出す。役者としてやっていけそうなくらい完璧な間だ。

「私は、昨晚の大雨は神のお怒りだと考えている。そのために3日後、リクを中心とし、尊火の儀を行うことにした。」

村人たちはミコトビという言葉聞いた瞬間、皆一斉に大きな拍手を村長に送った。そうして、リクと呼ばれた青年を皆で囲み、激励の言葉をかけたり肩を叩いたり、先ほどのまでの重い空気はどこへいったのか、一転して皆表情が明るくなり、室内は活気にあふれていた。

「皆少し落ち着いてくれ。今回儀式の中心、責任者はリクだが、一番の大役であるタイカをソラにお願いしたい」

「私、ですか？」

「ああ、タイカは大変な役目ではあるが、この役目をこなした者には皆が敬意を払う。村の存続のために欠かせない存在になれるんだ」

突然名指しされて少々驚いてしまった。正直これから行われる儀式についてもよくわか

らないし、「タイカ」が何を指しているのかもわからない。ただ、私を見つめる村長や周りの村人の目は、あふれんばかりの喜びで輝いている。まあ元々地球の文化、さらにはこの村の儀式に興味があったわけだし、この儀式がもしかしたら両親が見たものなのかもしれない。それを当事者として体験できるのならこれ以上の資料はないだろう。そう考え、私は二つ返事で快諾した。

「ええ、ぜひやらせてください」

私が承諾した瞬間、あの淡い光が村長の腕時計から発せられていた。

定期報告（100118）

本日、尊火の儀を実行。ソラへの感謝を忘れる勿れ。

村長が儀式を行うと宣言してから今日まで、男たち総出で村の中心部に大篝火のようなものを焚いている。今日である日から3日目、つまり儀式の日なのだが、どうやらあの宣

言の後からずつと絶やさずにおいているらしい。男たちは交代で寝ずの番を立て、火を絶やさぬよう細心の注意を払っているそうだ。

「さあソラ、私たちも準備をしましょう」

私が来てから1週間以上が経ち、ユエも慣れたのかいつの間にか私の名前を呼び捨てにするようになっていた。そんな距離感の変化に私は少し気恥ずかしく感じていた。だが不快感はない。今までよりも親しくなったような気がして、心地良い感触だった。

「準備って何をするのでしょうか」

「ああ、まだ伝えてなかったかしら。これからあなたは神様の下へ行くのだから、失礼が無いように神様が好きな香りを身にまとわせるのよ」

「カミサマが好きな香り、そういったものがあるんですね」

「ええ。ここらでは白檀とか、沈香が定番ね」

色々な話を聞き、それらを全て記録していく。ラグファについては得られなかったであろう独特な文化や価値観に触れることができるのが楽しく、色々話しているうちにどうやら目的地へたどり着いたらしい。集会場よりも少し小さい、朱色に塗られた漆喰の壁が特徴的な建物が目の前に現れた。私の先を歩いていたユエに導かれるまま建物に入ると、そこ

にはぼつんとベッドが置いてあり、その周りを村の女たちが囲んでいた。

「さあここへ横になつて」

「は、はい」

「あ、服は全て脱ぐのよ。じゃないと全身に香油を塗れないから」

ユエがそう言うのと、女たちは素早く私の衣服をはぎ取った。そうしてゆつくりとベッドへ私を寝かせる。なんだか調理される食材みたいだなんて思っていると、どこか落ち着く香りが私の鼻腔をくすぐった（偽物の鼻ではあるが匂いはわかるのだ）。

「これがさつき言っていたカミサマが好む香り、ですか？」

「ええそうよ。良い香りでしょう？」

自然の中にいるような、この村の雰囲気によく合う香りだった。どうやら地球人の言うカミサマは私が知っているカミサマとはかなり好みが違うらしい。私の知っているカミサマの人々はずっと派手な香りを好んでいたから。

そんなことを考えているうちに、女たちは私の全身に香油を塗り込んでいく。髪も顔も全身くまなく交代しながら塗っていく。それからどれだけ経ったのか、全身が香油でぺたぺたし、香りの強さに鼻が利かなくなつた頃、私は体を抱き起され建物と同じ朱色のワン

ピースのようなものを着せられていた。袖や裾には金糸で文様らしきものが刺繍されており、かなり派手なものだった。さらに頭には布でできたこれまた派手な刺繍が入った冠のようなものをかぶせられた。冠には所々宝石のようなものも縫い付けられており、端からは金糸に連なるように大小さまざまな鈴が垂らされているため重く、少し頭を動かすとシヤンシヤンと涼やかな音が鳴った。

「さあ、これで準備は整った。じゃあソラ、行きましよう？」

頭が重くてふらつく私の手を、ユエが優しく引いてくれる。そうして二人で儀式の会場へと向かう後を、女たちが花びらを道にふりまきながらついてきた。

一歩進むたびに、シヤン、シヤンと鈴の音が鳴る。後ろをついてくる女たちはいつかからか、節をつけて何か言葉を口ずさんでおり、辺りには厳かな空気が広がっていた。そうして歩き続けていると、鈴の音、女たちの声とは別に、ゴウゴウという炎が激しく燃え上がる音が聞こえてきた。

「さあ、ソラ、篝火の前へ」



私はユエに促されるまま、激しく燃え上がる炎の前へ立った。ここからどんな儀式が行われるのだろうか、あの写真とはちよつと違うみたいだななんて、ひっそりと胸を高鳴らせていると、村長が両手をすつと挙げた。先ほどまで何かを口ずさんでいた女たちも静かになり、より大きく炎の音が辺りに響く。

「まずは皆の儀式への協力に感謝します。そして、村のためにその身を捧げるソラに、深い深い感謝を送ります」

そうして村長が頭を下げると、他の村人も皆頭を下げた。なぜか皆私の方を向いていた。「では、尊火の儀を始めます」

さて何が起こるのだろうかと考えていると、突然体がふわつと軽くなった。先ほどまで私に頭を下げる村人たちを見ていたのに、いつの間にか視界には青空が広がっていた。

「あつ」

ドサリという音がしたと思ったら、耳元で鈴の音がけたたましく鳴っていた。視界には先ほどの青とは真逆にただ赤いものが広がっている。ああ、どうやら私は篝火の中にいるらしいと、ようやく現状を把握することができた。耳元でゴウゴウと鳴る炎の音の合間に、

警告音のようなものが頭に響く。

「警告。警告。スーツの損傷率が60%を上回りました。速やかな退避、回復を推奨します。」

警告音のようなものだと思っていたら本当にまずい状況らしい。儀式の完了まで見届けたかったが仕方がない。万が一記録が全て無くなってしまうと水が泡だ。私は急いでスーツの透明化機能を起動し、こっそりと炎の中から抜け出した。急いで記録を確認すると、所々修復が必要なものの、概ね無事であったことにほっと胸をなでおろす。

「それにしても人身御供タイプの儀式だったのか」

無事に炎から抜け出し、村人たちをこっそり観察すると、皆何か一定の言葉を繰り返していた。その様子を新たに記録している間に、ふとあることを思いついた。

「ハルの欠片を置いていけば遠隔で観察できるかも」

私のパートナーであるハルは、自分達で定めた座標にワープすることができるトルプの出身である。座標を定める際には自らの一部を用い、その設置対象に制限はない。そのため、自らの一部を相手に与えることで相手の目の前や、体内にもワープすることが可能なのだ。この相手の体内へのワープは大変危険な行為であるため、トルプ族は自らのパート

ナーにわざと自らの一部を与え、それを受け入れることができるかどうかで互いの信頼度を図る。

ハルも例にもれず定期的に私に彼女の一部を与えており、私はそれを自分の体内に保存しているのだ。彼女には申し訳ないが、今月分の座標をこの村に設置することにした。トルプ族は座標を設置した周囲を確認する力を持つているため、カメラのようにも使うことができるのだ。流石に壊れたスーツで長居するのも不安なため、私はこの機能を利用し、自分は帰ることにした。予定より短い地球旅行とはなったが、中々充実していたのではないだろうか。私はそう自分を納得させ、船長のコールさんへメッセージを送った。

定期報告（100120）

尊火の儀は完了。次回天候操作は100年後を予定。リクを次期村長へ指定。

緑に浸食された部屋の中央に鎮座する球体が、今にも壊れそうな音を立てて動いている。球体からは、部屋を浸食するツタに紛れるようにいくつもの管が無造作に伸びており、一

つのモニターに繋がっていた。そこには村が映っており、人々が働いている様子を空から観察できるようになっていた。

球体がひと際大きな音を立て、部屋に淡い光が広がった。光が収まると同時に球体から吐き出された紙には「定期報告」と書いてあった。同じように吐き出されたであろう紙が、床一面に広がっていた。

「トラキ！　トラキ！　早く来て！」

「なーにそんな急かして」

先週の地球旅行についてまとめている時だった。リビングの方からハルの元気な声が聞こえてきたのは。

「ほら！　これトラキが見たかったやつでしょ？」

リビングでくつろぎながらモニターを見ていたハルが、そう言いながらこちらへ画面を向けてくる。そこには、あの村人たちが父からもらった写真のように並んでいるところが映っていた。

「あつ！　写真と同じだ！　ありがとうハル」

「まったく私は休みなのにこき使って……でも仕事でじゃなくて良かった」

「ほんとハルのおかげだよ。あつ」

円形に並んだ村人たちの中心に立っていたのはユエと村長だった。篝火は既に静まっております、炎の跡から二人は何か白いものを取り出した。

「ねえこれって骨？」

ハルは顔をしかめながら画面を指さす。たしかにそれは骨のように見えた。もしやスーツが破損したときのものだろうか。

「多分そう。でも何をするんだろう」

そうして取り出した骨を、二人は赤い盃のようなものに置き、いきなり砕き始めた。粉末状になるまで砕き続け、そこへ何か液体を注いだ。

「なんか、料理みたい」

奇遇だな。私もあつちでそんな感想を抱いたよ。なんて心のなかでハルに同意する。盃に並々注がれた液体をどうするのか見ていると、ユエと村長は炎の跡へ向き直り、あの食堂で見たような体勢をとった。そうして少ししたのち、突然ユエはその盃を口へ運び、私の骨が溶けた液体を飲んだのだった。

「うーわ地球人って随分大胆なのね……こんな大勢の前で体の一部を口にするなんて」ハルは少女のようにキヤーっと言いながら顔を手で覆った。その指の隙間からちらちら画面を見ている。私や彼女にとつて体の一部を体内に取り込むのは愛を確かめ合うことにも等しい。そのため、私たちからしたらあり得ないことなのだ。もしあれは私の骨（偽物だが）だと伝えれば、きつと「浮気だ」と騒ぐんだろうなと考え口を嚙む。少し後ろめたい気持ちをごまかすように再度モニターの方へ目を向けた。

その細い喉がクピリクピリと上下したと思うと、ユエは盃から口を離した。彼女の顔にはいつもの穏やかな笑みではなく、どこか恍惚とした表情が浮かんでいた。

「この顔は人工皮膚には無理だろうな」

こんな表情、きつと最新バージョンのスーツでも作ることは無理だろうなと思うと同時に、やっぱりあの村人たちは真正銘地球人だと確信した。

そのままモニターを眺めていると、村人たちは全員で盃を回し飲み始めたところだった。隣で一緒に見ていたハルは「ちよつとコーヒ―淹れてくる」と、パタパタとキッチンの方へ向かった。

その後ろ姿を眺めながら、私はモニターの電源を手探りで切る。見たいところは見られ
たしもう良いだろう。

「あつ、砂糖とミルクたっぷりめでお願い！」

どさつとソファに倒れ込みながら、私はキッチンへ届くように大きな声で注文した。な
んだか無性に、甘いコーヒーが飲みたい気分だった。

ある村の調査結果

ニコゴリ氏の作品は何かを引き付ける魅力があると思っている。「父が死んだ。享年88歳だった。」私はこの冒頭の一文に一気に引き込まれた。88歳の父というインパクトのある言葉は、これから読み進める読者を掴んで離さず、展開する物語の奥行きがぐんと広がっていくような期待感を持たせた。

主人公トラキは父と母の思い出巡り兼調査をしに地球のとある村へと足を運ぶ。私はラギファ人のように、その間に語られるワーブができるトルプ人のハルや、ツーツ一人のコール、地球人に擬態できるスーツなど未知の新しい知識を前に目を輝かせた。地球で、そして村で地球人とどんなことが起こるのだろうか。しかし、それは良い意味で期待を裏切られることになる。「定期記録」「ワクチン投与済み」「天候操作」、これらの言葉は村と村と場所においてまず想像もしないだろう。突如として現れた定期記録は、「儀式のようなものをしていた」という父の言葉とリンクし、トラキの高揚感とは裏腹に我々に不安を抱かせる。今すぐ帰れ、その儀式は怪しい、だまされているぞ、と。これから起こる事を想像して怖くなる私は一旦読むのをやめようかとさえ考えた。だがしかし、人間の本能とし

て村の儀式とは一体何かという好奇心の方が勝ってしまうのである。

その予感的中した。毎日決まった時間にありとあらゆる行動が決められている、ある時は床に頭を擦り付け蹲る村人たちなどと、村のことや儀式とは何かが明らかになるにつれ、得体の知れない静かなる狂気が私たちにじわじわと迫ってくる。決して逃げられない儀式からトラキが一步一步と進んでいくと同時に、私たちも一文字一文字と儀式に迫っていくのである。また、何よりこの儀式に選ばれたのが「人間」であつたなら確実に炎に呑み込まれて物語は終わったはずだ。しかし、選ばれたのはラギファ人のトラキであつた。

これが本作品の面白さの一つであると思う。物語はそこで終わらず、トラキはスーツの機能を駆使して炎から抜け出し、座標を設置して観察を続けた。トラキ目線で進行していく儀式は、最後まで我々に村が得体の知れない恐ろしいものであることを、映画『ミッドサマー』のように外からの視点で映し出すことで村の異常さを際立たせている。

村の設定についてニコゴリ氏は、「本当は実験施設で、研究者が新しい時代を生きていく新人類を生み出すためにルールを定め、人々の暮らしを管理している。本文中では既に研究者はおらず、研究者が使っていた機械だけが動いていて、その機械の下に村人は生活を続けている」と述べている。その事実を村人は知っているのかもしれないし、疑問を持つ

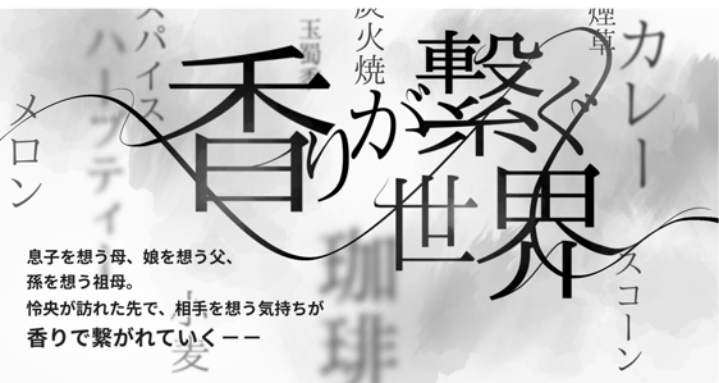
必要すら彼らにはないのかもしれない。

果たして『地球の歩き方 改訂版』にはどんな調査結果が書かれているのだろう。私は出版されることを願い、首を長くして待つてみようと思う。

入鹿るいか

スパイスラック

百珈



他の誰かから漂う強い煙草の香りをただ全身に纏わせたくて、喫煙可能な喫茶店に向かう。アルバイト終わりの怜央は、苦い苦い珈琲で喉を潤したい一心で早足になった。前に一度だけ行ったことのあるその店は怜央の家とは真逆の方向で、これから向かうとなると帰りは終電を逃すことになる。それでもよかった。とにかく今すぐにでも煙臭くなりたいと思うほど、怜央の心は腐り切っている。こういうときに行く場所が居酒屋でもなく、遊技場でもないのが怜央の性格で、要らない真面目さとどうにも振り切れないプライドが、就職活動の邪魔もした。こんな自分を癒してくれるのは厚い煙の膜と深くて苦い香りの珈琲だと、何かの本で読んだ気がする。

雪がちらつく真冬でも、十五分も歩けば汗をかく。背中がよく温まったダウンコートを脱いで目的の店の扉を開くと、すぐに珈琲と煙草の混ざった匂いが怜央の鼻を刺激した。お好きなどころどうぞ、と店主が無愛想につぶやく。一番に目がついた女性の絵があるカウンターの端に座り、ブレンドひとつ、と気取って見たが、白髪まみれの店主には届かなかった。仕方なく、水を出されたタイミングで「ブレンドお願いします」と注文した。

店を出たのは二十四時前で、やっぱり終電には間に合わなかった。加えて怜央の心は特に満たされることなく、ただ強い煙草の匂いだけが残った。

日頃から決まった友人としか会わず、一人で行動することが多い怜央には某焼肉店で接客するのはかなりの負荷がかかる。素早い対応が求められ、常に笑顔で客と向き合っていないければならない。理不尽なクレームに身体が熱く燃え上がるのを感じても、心からお詫びして頭を下げる。世のサービス業に従事する人にとっては当たり前な話である。たとえどんなに自分を偽って感情を押し殺していたとしても、まるでそれがその人であるかのような佇まいで存在する。

自分を見失った怜央に降りかかった就職活動が、さらに彼を追い込んだ。全就活生が頭を悩ませる自己分析が、怜央の捻くれた性格が、深い谷底に引きずった。自分は何者か、存在価値について考え込むことが多くなって、大好きだったゲームにさえ意欲がわなくなっていた。

荒んだ彼にはたった一杯の珈琲はほとんど効かない。しばらくは行かないだろうな、と苦味の強い珈琲の香りを必死で思い出しながら深夜の雪道を歩いた。思い出されたのは、カウンターの壁に立て掛けられたあの絵の女性だけだった。

十勝の中札内村に住む怜央の母親は、誰よりも真面目だった。毎月欠かさず仕送りをしていた、特産品の枝豆と卵は必ずと言っていいほど入っている。今回は鶏肉と手作りのスコーンとジャムも一緒に収まっていた。ひとり暮らしをして三年も経とうとするのに、まともな自炊ができていない怜央は、手軽なインスタント食品や長期保存できるものを期待していたが、流石にそれを言うほど親不孝な息子ではなかった。

「就職活動、順調ですか。最近は早期選考というものが多くなっているようで、まだ雪の残るこの時期はさらに大変かと思えます。焦らず、ちゃんとご飯を食べて元気に頑張ってください。落ち着いた頃に報告してね。母」

丁寧な手紙が添えられていて、この段ボールさえも雑に扱うことはできないという気持ちになる。ただ今は、この母親の心配も鬱陶しく思うほど身も心も荒れていて、そんな自分が嫌になって死にたくなるときもある。

せめて昼まで寝てしまった罪悪感をどうにかしようと、送られてきた鶏肉と卵で親子丼を作ってみることにした。自分で自分のために料理するのは数カ月ぶりの試みだった。

食材を冷蔵庫に移し、段ボールを丁寧に畳むと一枚の紙きれが床に落ちた。拾い上げた小さな紙には母親の文字で「二月十三日、夏目さん家 手伝い」と記されていた。日付は四日後だった。

「もしもし、母さん。久しぶり」

普段は簡単にメールで済ませてしまっている仕送りのお礼を電話で伝えることにした。もちろん、それにはあの小さなメモ書きが関係している。

「ええ、怜央？ 電話なんてどうしたの、珍しい」

「いや、たまには直接、といっても電話だけど、いつも仕送りしてもらってるお礼で」
聞き心地の良い母親の声が、怜央の耳を擦って柄にもない照れ口調にさせる。

「そう。ちゃんと届いたならよかった。親子丼でも作って食べて、美味しいお肉だから」
「うん、ありがとう。スコーンもジャムもいただきます」

母親にはすべてお見通しなのだ、溢れそうな感情をぐっと堪える。

「そういうえば、十三日の予定のメモ書きが入ってたんだけど、誰かの手伝い？」

「あら、そんな紙入ってた？ ごめんごめん、紛れてたのね。実は、夏目さんの家に掃除の手伝いをしに行こうと思って。ひとりでお住まいの方であまり重労働はできないんだけどね、いつもお世話になってるからお礼と一緒に掃除をすることになってるのよ」

どうやら、母親の住む家の近所にひとり暮らしをしている女性がいて、すっかり意気投合したという。もともと人付き合いが悪いわけではないが、特に仲の良い友人や知り合いは数人しかいない母親が楽しそうにご近所の話をするのは初めてだった。

「へえ、そうだったのか。でも心配だよ、母さん一人で手伝いに行くんだろ？ 腰とか大丈夫なのかよ」

「まだ少し痛むときもあるけど大丈夫よ。悪いわね、心配かけて」
妙に照れ臭くなった怜央はどこか迷いが吹っ切れた気がして「俺、手伝いに行こうか」とほとんど無意識に言っていた。

連日降り続いた雪は止んでいて、視界は広く白かった。久しぶりの高速バスに、怜央は遠足を思い出して浮かれた気分になる。ただ同時に、後悔と後ろめたさの波もやってきた

が、急なシフトの変更を申し出ても嫌な顔せず受け入れてくれた店長には救われていた。酒好きな店長にはコクワワインをお土産にすると決めた。

「就活の息抜きでいらっしやい。良い気分転換になると思うし、しばらく帰ってなかったでしょう」

声を弾ませ、泣きそうな顔をして笑っているはずの母親の言葉が脳内をこだまする。

これでいいんだ、と自分に言い聞かせながら揺れる身体に身を任せて目を瞑った。

帯広駅のバスターミナルから一時間ほどして、ようやく中札内に降り立った。もう来ることはないと思っていた土地に、勢いで帰ってきた。正確には、帰るといふよりも逃げに近い感覚だということに、憐央は自覚している。札幌に行くと告げた日の、涙目で笑った母親の顔が思い出された。

実家までは歩いて向かった。心拍数が上がるのを感じて、土産袋を握る手に力が入る。懐かしい家が見えてきて、憐央はまるで面接会場にでも向かうかのような緊張感に襲われた。就活に洗脳されすぎだ、忘れろ、と言いつ聞かせる。ノックは三回、二回はトイレ。

また余計なことを思い出して、嫌な腹痛を起こした。実家が実家ではない、なにかの審査会場かのように思われる。これ以上精神がおかしくなる前に、木立きだちと彫られた表札に並ぶチャイムを鳴らした。

「おかえり」

扉を開けた母親の声は柔らかく、電話越しの声よりもずっとやさしい。

「ただいま。はい、これ」

札幌駅で買ったお土産を渡して、数年ぶりにこの広い玄関を跨いだ。そこは面接会場でも自宅アパートでもなく、怜央の好きな香りで包まれた我が家だった。

仏壇に手を合わせて挨拶を済ませると、怜央の嗅覚を刺激するカレーの匂いが漂ってきて腹の虫が大きく鳴いた。

「いただきます」

声を合わせて食卓を囲み、ゴールデンの番組を観て笑いながら食べる手作りの料理は、ひとり深夜に啜るカップ麺より格段に美味しかった。素朴な味が怜央の中に深く沁みる。

「明日の朝、十時半に夏目さんのお宅へ行くことになってるから。よろしくね」

「うん、わかった」

明日の準備を済ませ、高校時代のまま残る部屋のベッドに潜り込んだ。

昨日は驚くほどぐっすり眠れた。それでいて、目覚めも良い。怜央は精神安定を実感して変にくすぐったくなる。

朝食と着替えを済ませ、母親と一緒に黄色の軽自動車に乗り込んだ。怜央が運転席に座るのは初めてだった。何もない平坦な道を進む。

「私は少し手伝わたらお祖父ちゃんの見舞いに行つて、買い物もしてくるから。夕方には戻れると思うけど」

「えっ、そうなの？ それじゃあほとんど俺一人？」

母親から初めて聞かされ、怜央の中でむっとした感情が出そうになるのを堪えた。初対面の人と長時間同じ空間にいることに耐えられるか、という気がかりもあった。

「もしかしたら夏目さんのお孫さんもお孫さんもお孫さんかもしれない」と後出しで告げられて、思わずブレーキをかけそうになる。

「なんで昨日のうちに言わねえんだよ」怜央はまた心の中で苛立つ。今朝の感情が嘘のように消え去っていき、不機嫌の魔が代わりにやってくるのを感じた。

「わざわざ来てくれたのにごめんね。お祖父ちゃん、最近あまり良くなくて。昨日の夜も咳が酷かったみたいで、いつまでもつかどうか」

「そっか。それなら俺も、会えたら会いに行くよ」

「うん、そうしてあげて。きつと喜ぶと思う」

接客中に被る仮面と同じ、口先だけの言葉を述べた。怜央はやっぱり後悔した。

こぢんまりとした古民家の庭先に車を停めて、怜央の母親が慣れた手つきでチャイムを鳴らす。怜央はできるだけ後ろの方で、わざわざついてきてやった息子、という雰囲気を感じ出していた。

扉の向こうから出てきたのは少し腰の曲がった女性で、どことなくやさしいおばあさんのオーラが出ている。白い髪を比較的高い位置で団子にしてまとめていて、丸襟のシャツに膨らみのある長い丈のスカートを穿いていた。色こそ地味だが、日頃から小奇麗にしているであろうことは怜央にもわかった。

「どうぞ、いらつしやい。息子さんも」

母親の後に続いて、少し会釈をしながら家の中に入った。一見すると掃除する必要がないように思えたが、部屋の数も置いてある物も多かった。ただ不思議なことに、実家に近い居心地の良さを怜央はほんの数秒の間で感じていた。

「わざわざどうもありがとうございます。私の都合で付き合わせちゃって、申し訳ないわね」

「いいえ、夏目さんにはいつもお世話になってますので」

「息子さんも、札幌から来てくださったんだってね。とても助かるけど、なんだか悪いわ。いくらお礼をしたらいいかしらねえ」

冗談交じりに笑う彼女を怜央はじつと見つめていた。我に返り、慌てて謙遜する。

「いいえ、お礼なんて。お役に立てるかどうか」

「そんなことないわ、いてくれるだけでありがたいの。でも、来てくれたからにはそれなりに手伝ってもらおうと思うわ。本当にいい？」

確認というより、もはや怜央に有無を言わさない表情と口ぶりだった。「はい、大丈夫です」と苦笑いで答えるほかなかった。

「それじゃあ早速だけど」

彼女の手にはバケツとモップが握られていて、視線は部屋の中央にある螺旋階段に向けられる。怜央の察しはよく、道具を受け取って二階に上がった。母親はというと、彼女と一緒に台所で作業をしていたが、時間になったので見舞いに行くと言つてほんの二十分で車に戻った。

二階の床掃除を一通り終え、昼休憩をとることにした。アルバイトでも掃き掃除をしているとはいえ、ログハウスの掃除は初めてで、微妙に短いモップのせいか中腰がかなりきつかった。それでも、薄茶色かった床が色濃く染まっていくのを眺めながら作業するのは悪くない、というのが怜央の正直な感想だった。階段を下りると、怜央の嗅覚を刺激する香りが家中に漂っている。腹の虫が大きく鳴いた。気づけばもう十三時を過ぎている。

「いただきます」

両手いっぱい念を込めてお辞儀する。焼きたての小麦と玉蜀黍とうもろこしの香ばしい匂いとまるまるとした見た目に、迷わず怜央の手が伸びた。

「夏目婆さんお手製、唐黍とうきびパンです。中札内の唐黍とうきびって美味しいのよ、鼻目だけど」

台所から聞こえた笑い声が弾む。振り返ると、鍋を持つ彼女の目が怜央の目とぶつかった。急に心臓が跳ね上がるような感覚になった怜央は、わかりやすく目を逸らす。すたすたとスリッパの音を擦らせて歩く彼女が、よいしよと声を漏らして大鍋を机に置いた。

「よければこれも召し上がって。野菜のポターージュ、お嫌い？」

「いえ、好きです、野菜。いただきます」

少しだけ、嘘をついた。ただ、控えめに取り分けたスープを掬って口に運んで間もなく、それは嘘ではなくなった。気づけばもう三杯もおかわりしていた。

「美味しそうに食べますねえ。作り甲斐があるわ」

「本当に美味しいです。これ、作り方のコツとかあるんですか？ 何か隠し味とか」

怜央が尋ねると、彼女はそうねえ、と言って少し黙った。その姿に違和感を抱いて、慌てて訂正しようとしたとき、浅い息が鼻から抜けた声で答える。

「スパイス、かしらね」

やさしい口振りとう俯いた瞳に、怜央はそれ以上聞くことをやめた。

すべての料理を食べ終えて、片付けと掃除を再開した。今度は一階の部屋全般の掃き掃除と天上の隅の埃を取り、仕上げにまたモップ掛けをする。この環境と作業にも慣れてきて、怜央は居間から聴こえるレコードサウンドに体を揺らした。懐かしい名曲にのせた鼻歌も交じって、全七部屋の掃除を終える。

既に時計の針は午後三時半を過ぎた位置を指していた。再び台所から甘い小麦の香りが漂う。

「お疲れ様。お茶にしましょう」

赤いミトンの彼女の手には、まるい小さな岩がいくつも並んだトレイがあった。

「スコーン、食べられる？」

「はい、好きです、スコーン」と答えた怜央に、もう嘘はなかった。

よかったわ、と彼女は目尻に皺をつくって笑いながら手際よくお皿にのせた。それからまた台所へ戻り、さらさらと音を立てて缶からポットに葉を移す。窓際で咲く花のようなものを摘み、それも一緒にポットに加えた。

「それ何ですか？」

「ハーブティーですよ、これも自家製なの。庭で育てて乾燥させたのを使うんだけど、スコーンにも合うし、ちゃんと効能もあるわ」

「ハーブティー、飲んだことないです」

「あら本当に？是非試してみても、たぶん美味しいから」

窓辺でティーカップに注ぐ彼女の姿は怜央の脳を刺激して、あの日隅つこで見た絵を思い出させる。二人の女性が重なって見えた。

ここに来て二度目の「いただきます」は、二人の音が合わさって高い天井に響いた。焼きたての小麦の美味しさに、怜央は再び感動する。紫色のハスカップジャムも加えたところで、中札内の株も格段に上がった。

「そういえば、母から夏目さんのお孫さんもらっしやるかもと聞いたんですけど、今日は来る予定だったんですか？」

ジャムを塗る彼女の手が一瞬、止まったように見えた。

「ええ、そうね。凜ちゃんっていうのよ。あなたと同年くらいかしら」

「そうなんですか、お会いしたかったです」

半分本気でそう言った怜央は思わず「あつ」と声を漏らす。目線の先には、もう一枚の皿があった。少し冷めたスクーンが二つのせられている。

「その、それお孫さんの分ですか」

「ええ」

「あの、連絡とか、しなくて大丈夫ですか」

「ええ」

「そうですか。えっと、お孫さんとはよく会うんですか」

「ええ」

質問攻めの面接官と素っ気ない就活生みたいな会話が続いて、怜央の気持ちは潰れそうだった。最後に、と言いかける。

「今日も会いたかったんじゃないですか」

「ええ」

大きな瞳に涙が浮かんでいるのを怜央は見逃さなかった。

「会いたいわ」

彼女の丸まった背中を見て、怜央はこれ以上聞くのをやめる。ハーブティーを一口啜つて、次の話題を脳内で巡らせているうちに、意識が遠のいていった。

あれから二週間が過ぎ、怜央の忙しい日常がすっかり戻ってきた。時々、ログハウスの窓の景色とハーブティーの香りが思い起こされて、その度に帰りたくもなかった。

どうしたものか、母の味が恋しいと思ったことは何度もあるが、それ以上にあの家で振る舞ってもらった品々の方を求めている。わずか三日のうちの数時間の滞在で口にしたスパイスとハーブの効いたやわらかくて温かい料理たちが、怜央にとっては忘れられない味になっていた。口が滑ってしまいそうになるのを「やっぱり札幌の方が全然いや、こっちの方が性に合ってる」と母からの電話で誤魔化してしまった自分にまた嫌気がさした人間はそう簡単には変わらない。こういう聞かせることしかできなかった。

アルバイトも就活もひと休みしたはずなのに、やっぱり急には上手くない。今日の面接も手ごたえを感じられずに、スーツのまま店へ向かった。従業員用入口に繋がる通路の手前で、店から出てきた常連客とすれ違ってしまった。案の定、酔ったサラリーマンた

ちは「おー兄ちゃん、今日はスーツかあ！ お仕事お疲れ様でえす」などと野次を飛ばして、怜央を燃えるようにむしゃくしゃさせる。それでも平然を保ち、出勤前にもかかわらず「ありがとうございました」と笑顔でお辞儀をした。日本もチップ制度の導入を考えたらどうだろうか。いや、まずは賃上げが先か。就活生は時事に敏感でなくてはならない。怜央は店内を走り回る気持ちで、いつものように各席に笑顔を振りまいてきた。閉店作業が終わると同時に、力が抜ける。制服から着替えたスーツにも、炭火で焼かれた肉を纏った煙の臭いが少し移っている。

煙草はそこまで吸えないのに、今日も怜央の足はあの喫茶店へと向かっていた。ダウンコートからステンカラーコートに替わっても、十分も歩くとそれなりに汗をかく。革靴のせいで足も痛い。扉の前でふう、とひとつ息を吐いてから静かに開いた。

お好きなどころどうぞ、と店主が無愛想につぶやく。一通り店内を見回したあと、カウソーターの端の席に座る。そこには例の絵がまだ立て掛けられていて、怜央は何故だか安堵した。水を運んできた店主は、以前よりも白髪が増えた気がする。

「(注文は)」

「あ、えっと、一つ聞いてもいいですか？」

突然の問いかけに訛声店主はぎよっと目を見開いた。返事がワテンポ遅れる。

「はい、何でしょう」

「この絵ってご主人のものですか？」

あまりにも予想外の質問に、無愛想で何も見えなかつた表情が出る。

「ええ、私が購入したものだけ。それがどうかしましたか」

「あの、僕、実はこの絵の女性に似た人に会ったような気がするんです。年代はこの絵の人よりずっと上なんですけど、なんかこう、風貌といえますか、空気感がどことなく似ていたので気になって」

「ああ。これはね——」

今までの声色と表情とは比べ物にならないくらい、穏やかな空気が流れた。店主は咳払いをして目を細くしながら、カウンター越しの中央の前に身を乗り出した。

「ピサロって知ってますかい、印象派のカミーユ・ピサロ。その人の絵です。私、ピサロの絵が好きでね、いくつか持つてるんだが、これは特に気に入って——はい、お好きのところどうぞ」

「すみませんね」と言つて、店主は仕事に戻つた。新規客のもとへ水を出してすぐに注文が入つたようで、しばらく手が離せそうになかつた。その間に、怜央はカミーユ・ピサロを検索エンジンにかける。

彼は十九世紀の印象派画家のひとりで、素朴な風景画や肖像画を描いた。クロード・モネやポール・セザンヌとも交流があり、多くの若い画家に影響を与えた人物、とある。

詳細な紹介文のあとに、代表作の画像が並ぶ。その中に、目の前に置かれた絵もあった。作品名も記されている。

「すまない、話の途中で。どこまで話しましたかな」

「ピサロの絵が好きで、この絵は特にお気に入りだと」

店主はまた身を乗り出す。怜央もカウンターに肘を寄せ、前のめりに耳を傾ける。

「そうだ、この農婦の絵が気に入つてね。私の娘にそっくりなもので」

「えつ、娘さんに？」

「はい。やさしい子でちょうどこんな風に窓のところでお茶を入れてくれたんですが、懐かしいなあ。よく似てる。あの子が中札内に行つてしまつてからはそれっきりですけど」

怜央は言葉にならない声を発した。単なる偶然ではない何かを、確かに感じた。

「その娘さんとは最近は」

「亡くなりました。引越して一年も経たないうちに」

今度こそ、怜央は絶句した。次の言葉をかけるまでどれくらいの時間を要しただろうか。あの日の記憶が走馬燈のように駆け巡った。

「まあ、不慮の事故つてところですよ。カミさんも後を追うように逝ってしまったもので。そのあと、この絵を見つけたんですよ。これはもう買うしかないでしょう。私の子にしか見えなくて仕方がない、もう何百年も前に描かれたのにな」

できるだけ明るく話す店主だが、皺の深い目元が今にも濡れそうだった。不器用な作り笑顔は彼女が醸し出す雰囲気そのままに、やさしさがある。

「でも、この絵を聞いてくれるのお客さんが初めてですから」

「そう、なんです。あ、なんかつらい話をさせてしまつてすみません」

いいえ、と首を振りながら店主は背筋を伸ばして、手元の茶色い伝票を構えた。

「ご注文はお決まりですか」

「あの、ハーブティーとか置いてないですか？」

「ないですね、うちは珈琲だけです」

「あ、すみません、そうですよ。じゃあ、ブレンドひとつ」
少しだけ無愛想に出された珈琲の苦さを感じながら、横目でもう一度、怜央はコーヒ
ーを注ぐ農婦を見つめる。お祖父ちゃんの好きなメロンでも送ってあげようと思った。

たっぷりと身体に染み込ませた煙は夜風に揺られて、少しのスパイスが効いたハーブの
香りになって怜央の鼻に届いた。ポケットの中のスマホが震えて通知を開くと、二次選考
通過のお知らせだった。



ラストノート

なんだか妙に気に心惹かれるものが、誰しもあるでしょう。この「スパイスラック」は、そんな「なんだか妙に気に心惹かれるもの」が繋がっていくお話です。そして、それを繋いでいくのが香りなのです。

本作に心惹かれたところは、香りの描写と心情描写です。良くも悪くも香りは記憶に残りやすい。きつと怜央は、炭火の香りを感じたところで「おいしそう」と思うよりもパイトのことがまず先に思い出されるでしょうし、ハーブティーやスコーンの香りで故郷に帰りたくなるでしょう。本作を讀んでいて、「明日はカレーにしよう」だとか「この辺でスクーンを売っているお店であるかしら」など思った人が少なくともいるはず（ちなみに私は近所のカレー屋とおしゃれなカフェーに行きたくなりました）。そんな、五感のひとつで欲にうったえかける香りの表現を、柔らかく優しく描く様は百珈氏の人柄がよく出ていると思います。

主人公の繊細な心情描写は非常に共感できます。特に、夏目家へと向かう車中。怜央のテンションがだんだん落ちていき不機嫌になる様子はまるで私を見ているようであり、心

を見透かされているのかとドキドキしました（このような不安感、やる気とテンションのダウンは、私はよくあることなのです）。

怜央と私は共通点が多くシンパシーを感じています。実は私自身高校時代は十勝にいて中札内村のことは知っていたし、同じ部活の同期と先輩に中札内出身の人がいました。だから、本作の帯とあとがきを担当することになったことに、少し運命を感じていたのでした。

この作品も運命的なめぐり合わせがありできたのだといえます。百珈氏が中古で買った本に、「中札内」「一人暮らし」「食事会」などと書かれたメモが挟まっていたことが、本作を執筆するきっかけになったそうです。

さて、そろそろあとがきをおしまいにしようと思います。思いつきに任せて取り留めもなく書いてしまいました。ここまでお付き合いいただいた方には感謝を申し上げます。何しろあとがきなるものを書くのは初めてだったもので……、友人と何気なく読後の感想を話したと思っていたくださいたい。怜央と皆さんと私との今後がうまくいくことを願って、このあとがきを終了いたします。

二十三時十五分、お線香の香りに包まれて 千紘

咲いて灰になる
そして春になる

階口 窓

ある麗かな春の日

「聞かせてくれませんか？
二人は 桜が狂い咲く 美しい庭で
君の物語を」

出会った！

がらんど
うの男が
求めたの
は
「私」の
物語。
炎に散り
ゆく
「桜」の
物語。
そして、
ある
「家族」
の物語。

冷たい麻酔の匂いが、仄かな桜の匂いと絡まっている。夜の薄い空気を鼻先に感じた。うつつすらと弱い光が、瞼の隙間から漏れてくる。単調にニュースを読み上げるアナウンサーの声も、周波が合わないラジオのように途切れ途切れに聞こえてくる。近くでテレビでもついているのかもしれない。

『昨夜未明東京都……区で住宅一軒が……火事があり、……跡から二人の遺体が見つ……した。この火事で……人が病院に運ばれ……。警察と消防によりますと昨夜弁護士そあの染井良一りょういちさんの住宅から火が……と通報があり、出火元は二階の……警察は遺体が……とみて身元の特定を急いで……』

冷たい水を顔面に叩きつけられたような衝撃で、私の意識は一気に覚醒した。それは起きなければならぬという使命感に近いものだった。

いったい私はどれ程眠っていたの？

重い瞼をこじ開けると、カメラのピントが合うように二重三重に見えていた視界がはつきりした。見慣れない病室の天井だ。私に降り注いでいたのは隣の窓から漏れる月明かりで、病室には青白い光が飽和していた。

痛い。全身が痛い。血が巡るたびにどくと痛みが波打つ。だが、体が動かせないほど

の痛みではないことをすぐに悟った。

固いシーツに皺を作りながら、包帯まみれの上体を慎重にベッドから起こす。すると、ベッドの私の足があるであろう位置に腰掛けている、何者かと目が合った。

その人はベッドから立ち上がり、私の目の前に立った。窓から差し込む冴えた月光が、何者かの全貌を浮かび上がらせる。どうやら男のようだ。

年齢はいくつかは分からないが若いということは言える。女性のように長い睫毛が、中性的な雰囲気醸し出している。鼻筋がスツと通っていて、窓から斜めに突き刺さる月光は顔の右半分に影を作っていた。薄い唇は血色感がなく、陶器の人形のようなようだ。真っ黒なウェーブがかかった髪と、適当に分けられた前髪からは、気怠げな雰囲気を感じる。細身の体は黒のスーツにきつちりと包まれていて隙がなく、手には黒い革製の手袋をはめている。さながら喪服のようだ。

「ねえ君、名前は？」

存在感のある知らない声。私は布団を自分の胸元に手繰り寄せ、身構えた。

「……人に名前を聞くときは、まず自分から名乗るのが礼儀じゃない……の？」

「……。これは失礼しました。突然ですが僕は、染井家の咲耶さくやお嬢様を殺すことを依頼さ

れた殺し屋です。ガランと呼ばれることもあります。そうです、がらんどろのガランです。君は昨夜染井家で起きた火事の、染井家唯一の生き残りらしいですね？ だから咲耶お嬢様を探して君の所に来ました。これで僕は名乗り終わりましたよ。君の番です」

……私が、染井家唯一の……生き残り。

火傷の痛みが再び体に走る。昨夜の記憶が一瞬で頭を駆け巡る。皮膚が焼かれる痛み、一寸先も見えないほどの黒煙、喉の渇き。無様に足を引きずりながら長い廊下を進んだ。あの時の恐怖は、まだ心に焦げ付いて消えない。

「ねえ、……あなたは私のことを殺すの？」

今の声は震えていただろうか？ 強く布団を握りすぎて、布団越しに爪が食い込んでくる。

ガランはただ黙っていた。私はガランの冷たい沈黙に耐えきれずに口を開いた。元々返事なんて待っていなかったのかもしれない。

「……私は……私が染井家の咲耶です」

ガランの瞳孔がぐんと大きく開かれた。

「なるほど？」

ガランは片手で私の首を掴んだ。その勢いで、私の体はベッドのヘッドボードに叩きつけられた。痛みが全身を駆け巡る。鉄を首筋に当てられていると錯覚するほど、その手は硬くて冷たい。

「僕の仕事は染井咲耶を殺すことです。さつき言いましたよね？ 死にたくないなら偽名を名乗ればいいものを。余程、死にたいようですね？ 君は幸運だ。僕は今まで一度たりとも、仕事を失敗したことがない」

恐る恐るガランの手を解こうと力を入れてみる。だが、男性にしては細めなその腕は、私の首に縫い付けられたようにびくともしない。自分の心臓の音だけがうるさいほどに聞こえる。男の空虚な目からは、なんの感情も読み取れない。

「人間は地球上のどの動物よりも知能が高いらしい。だけど、どんなに賢くても所詮他の動物と同じで、死んだらただの肉の塊になります。それ以上も以下もない。死んだら君も、ただの肉の塊になるんです」

目の前が滲む。息がうまく吸えない。吸い方を忘れてしまった。

「でもね、ある一点において人間は他の動物よりも優れている。それは言葉です。人間は言葉を紡いで物を語り継ぐことができる。そして、どんな人間の人生にも物語があります。

聖人君子と謳われている奴でも、救いようのないクズでもどんな人間にも、です」

ガランの手が私の首筋から離れた。

緊張が解かれ、肺いっぱい息を吸う。脂汗がどつと溢れ、額をじつとりと濡らした。ガランは腕を組み、窓に寄りかかりながら続けた。

「僕は物語が好きなんです、だから君の物語が聞きたい。あの夜一体誰が死んだのか、とかね」

「……っ、それが……あなたの知りたいことなの？」

彼は返事の代わりにニコリと笑った。その笑顔は人殺しとは思えないほど綺麗だ。そのことが却ってこの男の異常さを際立たせている。

目が覚めて、私は自分がまだ生きているという事実には絶望したのだ。ガランに凶星を突かれた時、本当は心臓が跳ね上がった。だけど、死にたいという気持ちとは裏腹に、体はまだ生きたいと抵抗する。

だから私は話さなければならぬ。

「……ではあの夜、一体誰が死んだのか、どうして私が生き延びたのか、私が語りましょう。少し長くなってしまうかもしれませんが」



テレビの音は遠くなり、私の意識は桜が狂い咲くあの美しい庭へと――

*
*

染井咲耶は、代々有名な弁護士を輩出している染井家の直系の長女として生まれた。お父様の名前は染井良一といい、お母様の名前は染井佳乃よしのという。

お父様は染井家の箱入り娘だった母に嫁いできたいわゆる娘婿で、お母様がお父様に一目惚れをし、親族の反対を押し切り結婚に漕ぎ着けたそうだ。

お母様と出会う前に、お父様には別の恋人がいたらしい。その人と結ばれた方がお父様は幸せになれたかもしれない、と時々考えてしまう。昔話をするお父様は、いつも少しだけ口元を綻ばせているから。

染井家の人間は皆弁護士になる、例外はない。血が繋がっていきようがいまいが関係ない。だからお父様も苦勞して弁護士になった。大器晩成と言えば大袈裟に聞こえるかもしれない。

いが、遅咲きの人だと周りはお父様を賞賛した。それほどまでに、お父様の年で弁護士になることは難しいことだった。

お母様は私を産んですぐに、産後の肥立ちが悪く、亡くなってしまった。だから、私の世話は親族達がしてくれた。幼い時のお父様の記憶はあまりない。お父様はきっと私の世話には手が回らなかったのだろう。

私の物心がつき始めた時だ、お父様が一葉かずはという同い年の女の子を引き取りたいと言い出したのは。

一葉は不慮の事故で親を亡くし、天涯孤独となつてしまい、引き取り手がなく施設にいるとお父様は言っていた。一葉の親はお父様の昔からの友人だったらしい。

親族達は反対した。だから、私は一葉が来ることをあまり良く思っていなかった。いや、本当は親族たちの反応なんてどうでも良かったのかもしれない。お父様の興味が他の子にも向けられることが、嫌だっただけだ。

お伽話に出てくるような染井家の歴史ある西欧風の洋館には、その広さに見合うだけの大きな庭があった。庭には何十というソメイヨシノが植えられ、早咲きのソメイヨシノ達
が、春の到来を喜ぶように蕾を開かせていた。

桜の木は染井家の象徴だ。

二階にある私の部屋から眺める庭も美しかったが、実際に庭を見るのとは天と地ほどの差がある。小さな背で庭を見上げると、まるで薄紅の雲に囲まれたような錯覚さえ覚えた。美しいこの庭が私は好きだった。

ある麗らかな春の日、一葉はお父様に手を引かれこの美しい庭に現れた。私も一葉も十歳の時だった。

おそらくお父様の独断だった。

一葉は愛想もあり、決して頭も悪いわけではなかった。何事にも人並み以上にはやっつきのけ、世間一般の優秀と呼ばれる部類に入っていた。

しかし、いつも私より一步遅い。運動も勉強も、いつも私よりも一步遅いのだ。誕生日だつて一日違いで一葉の方が遅かった。

私たちが出会ってから、十回庭のソメイヨシノが咲いては散った。

穏やかな日常の延長に、私の二十歳の誕生日はあった。

——昨夜、染井家で行われた私の二十歳の誕生日パーティーはまるで夢のようだった。染井家直系の長女、染井咲耶の誕生日ということもあり、傍系の親族達や、法曹界の重

鎮達も招待されていた。一片の曇りもないほど磨きあげられたシャンデリアは輝きを放ち、洋館の階段は深い赤の絨毯に包まれていた。普段は棚の奥に眠っている美しい食器達にも魅力的な料理が並べられた。ホールはグラスを片手にした何十人も紳士淑女で賑わい、舞踏会でも始められる華やかさだった。

私は早咲きの桜が色づいたような薄い桜色のドレスを着て、耳には控えめな真珠のピアスを、手にはドレスとお揃いのグローブをはめていた。一葉も美しいドレスを着て、私とお揃いのピアスを付けていた。

お父様の前に私が立ち、手短な挨拶でパーティーの開催を宣言した。

一斉に動き出した人の波をすりと抜けて、私は一葉の側に行った。手には赤ワインが注がれたワイングラスを持っていた。

「一葉、私はお客様のところに挨拶回りに行くから、あなたはこれをお父様に持っていつてあげて。きっとあなたが行けばお父様喜ぶわ」

「でも、咲耶が渡した方がいんじゃない……？」

一葉は私とお父様の仲を心配し、受け取るのを躊躇っていた。実はこのパーティーの準備期間に、私とお父様の間にはちよつとしたいざこざが起きていた。何がきっかけだった

のか……忘れてしまったが、準備で顔を見合わせる度に、私はお父様と小言を言い合った。いつだったか、一葉が今のようにならぬとお父様の顔色を伺いながら、仲を取り持とうとしてくれたこともあった。

「大丈夫よ一葉、もう和解したの。ほらちゃんと持って。ちよつと飲んでも内緒にしてあげるわ」

「だめよ！ 私は明日二十歳になるの！」

二人でくすくすと笑い合い、一葉にワインを手渡してすぐにその場を離れた。

私は何人かのお客様と世間話をし、頃合いを見計らってもう一度一葉の元へ行った。

実はこのパーティーで、私は一葉にサプライズを用意していたのだ。

突然ホールの光が弱められ、帳が下されたように暗くなった。少しの困惑と何か始まるという期待が、会場に満ちた。そして、一つのワゴンが会場中の視線を集めたままゆっくりと一葉の元へ辿り着いた。一葉は戸惑いながらワゴンに鎮座するケーキを覗き込み、丸い目をさらに丸くした。

「一葉、一日早いけど誕生日おめでとう……！」

一際大きいクラッカーが鳴らされた後、私も後を追うようにクラッカーの線を思い切り

引つ張った。他のクラッカーたちも、それに続いて勢いよく鳴らされた。まさか自分もお祝いされるとは思っていなかった一葉は、喜びに顔を綻ばせていた。

ホールの古時計が二十二時の鐘を打った頃、私の挨拶で会場は温かい拍手に包まれ、惜しまれながらも盛大なパーティーは幕を下ろした……ように他の人には見えただろう。

実はこの時、何事もなく終わったかのように見えた。パーティーの裏では、私と一葉にか分からぬ、ある問題が起こっていた。

最後の挨拶をするはずだったお父様が会場に現れなかったのだ。

染井家当主の染井良一の姿が見当たらないという異常事態を、他のお客様に悟られないために、急遽私が最後の挨拶を行った。

パーティーが終わり、ぞろぞろと列になって出口へ向かう人の群れの中から、お父様と談笑していたお客様を見つけた。さりげなくお父様の行方を聞くと、お父様は一葉へのサブライズの前に、体調が悪くなり自室に戻ったとのことだった。

私は一葉にホールの片付けの手伝いを頼み、急いでお父様の部屋へと向かった。

お父様の様子を確認し一階のホールへ戻ると、一葉が「食べすぎたみたいで、ちよっと吐きそうなの」と私に耳打ちしてきた。なので、私は残ったホールの片付けを親族達に頼

み、一葉を部屋まで送ることにした。

一葉を部屋に送り届け、私は一葉のために胃薬を探しに行った。そして、ドレスを着替える間もなく、すぐに一葉の部屋に戻った。

薄暗い室内は、月明かりに満たされ静寂を秘めていた。まるで、この世界に私と一葉二人だけしかいないみたいに。いつも見ているはずの一葉の部屋が、その時は他人の部屋のように感じた。一葉も全く違う人のように思えた。部屋の空気はヴァイオリンの弦を張り詰めたように鋭かった。

一葉は言った。

「……あんななんか偽物よ」

その手には、月光がキラリと反射する包丁が握られていた。

一葉が渾身の力で振り下ろした腕を掴みなんとか押し返す。相手の荒い息遣いしか聞こえない一進一退の静かな膠着状態。その包丁の切先は私の心臓を指している。

しばらくは拮抗していたが、一葉の力に押し返され後退し気がつけば後ろにベッドがあった。このままベッドに押し倒されてはまずいと思い額に汗を溜めながら踏ん張った。が、一瞬力の均衡が崩れ、空ぶった包丁がドレスを裂き私の足を掠め肉を少し切った。私は痛

みに呻き、血でベッドを濡らしながら這い上がった。そして一葉がとどめを刺そうと包丁を高く振り上げたところで私の中で何かが壊れた。

あの時の感情は言葉にすることはできない。体の奥から激情が溢れた。

感情に体は支配され、気がつくとは私はベッドの上で一葉に馬乗りになり、その細い首を締めていた。初めは必死に抵抗していた一葉も徐々にぐったりし、やがてただの肉の塊になった。手の中で命が散っていく感覚は思い出したくもない。

私はしばらく一葉の死体の上で力なく項垂れていた。頭を空にして、何も考えないようにした。顔を手で覆ったが、指の隙間から涙が溢れ、一葉のドレスに濃い染みを作った。何かが焦げる匂いが私の意識を現実に戻した。パチツと火の粉が弾ける音と、ミシミシと何かが燃えて崩れる音。暑い、気がつくとは部屋の中はいてもたってもいられないほどの暑さだった。刺された足を引きずりながらドアを開けると、熱風が吹き抜けた。廊下は火の海だった。

部屋の出口はひとつしかない。火の中に入るのは怖かった。でも、このまま死ぬのはもっと怖かった。だから私は、醜く片足を引きずりながら火の海を突き進んだ。薄いドレスはなんの防御にもならず、火は私の皮膚を炙った。途中でドレスを引きちぎり、火の中に

放り投げた。もう後戻りはできない。

二階の窓からはあの庭が見えた。二階から何かが燃え落ちて、その火が下の桜の木にも燃え移ってしまったのだらう。為す術もなく火の海に飲み込まれていく桜達は悲鳴もあげることができない。

ああ、咲いたばかりのソメイヨシノが燃えている。きつと灰になってしまう。

あの夜、私は何かを失った。それが何なのか、今はまだ分からない――

*
*

「……一つ聞いてもいいですか？」

ガランは今まで沈黙を守っていた口を開いた。

「君が染井良一を見に行った時、染井良一はどんな様子でした？」

「えっ……」

私は答えられなかった。心臓が早鐘を打つ。

言わないで。

どうか、その先は言わないで。

「答えられないでしょう。なぜなら君は、染井咲耶ではないから」

私の語った物語は、まるで砂のお城みたいに、ガランの言葉によっていとも簡単に崩れ去った。

私はガランの質問に答えられなかった。当たり前だ。

私はあの夜、あの時、良·一·様·の·様·子·を·見·に·行·っ·て·い·な·い·の·だ·か·ら·。

「……………。どうして……………わかったの？」

「君の語る物語はあまりに客観的すぎる。まるで誰かの物語をそらんじているみたいでしたよ」

不思議と心地いい響きがする言葉だ。

そう。私はあの夜のことを語った、私から見た咲耶の視点で。まるで咲耶がこの物語の

主人公の様に物語を書き換えた。

彼はベッドの上の私に向き直ると、私と視線が合う高さまで屈んだ。ガランの美しい瞳と視線が合わせられる。その目は吸い込まれそうな深い黒だ。

「君の名前は？」

「私は……私の名前は染井一葉。染井良一様のご意向で染井家に引き取られた孤児です」
ガランは改めて言う。

「聞かせてくれますか？ 今度こそ君の物語を」

初めて良一様が私の手を握ってくれた温もりを今でも覚えている。大きな手でぎゅつと私の小さな手を包み込んでくれた。

「お前は、うちの子になりたいか？」

良一樣は多くを語らない人だった。だけど、その言葉の重みは、十歳の私にも十分に理解できた。

私は答える代わりにその手を強く握り返した。

本当は怖かった。十歳の孤独な少女にとって、染井家という名前の重みはどれほど大きいものなのかなんて、全く想像がつかなかった。だけど、良一樣の手を、久しぶりに感じた温もりを手離したくなかった。

そしてあの庭で、私は咲耶と出会った。小さな目と控えめで薄い唇はまさに桜を思い起こさせる、そんな少女だった。ソメイヨシノの木の下で佇む凜とした様子は、桜の妖精と見紛うほどに美しかった。

憧れはいつも少しだけ私の先を行く。彼女はまるで早咲きのソメイヨシノだ。私が咲耶に勝てたことなんて、きつと一つもない。

染井家での私の生活の中心には、いつも良一樣と咲耶がいた。目を瞑れば臉の裏にありと浮かぶ、染井家での穏やかな日々。

あの美しい桜の庭の中で、私たちは家族だった。

——昨夜だって、日常の一頁として過ぎ去るはずの一日だった。

良一様の姿が最後の挨拶で見えなかったのは心配だった。だが、咲耶が様子を見に行き、「大丈夫よ、心配ないわ」と私に言ってくれた。

咲耶がそれ以上語らなかつたので、結局良一様がどんな様子だったのか、最後まで私は知ることができなかった。

咲耶に頼まれてホールの片付けを手伝っている最中に、急に吐き気が込み上げてきた。咲耶からのサプライズケーキに浮かれて、食べすぎてしまったことがたつたのだろう。私は、吐き氣の理由があまりに子供じみていて、恥ずかしくて、戻ってきた咲耶にだけ、吐き氣がすることをこっそり打ち明けた。咲耶は私を部屋まで送り届けてくれて、さらに「胃薬を探してくるわ」と胃薬も探しに行ってくれた。そして、ドレスも脱がぬまま、すぐに私の部屋に戻って来てくれた。

その凶行は、あまりにも突然のことだった。

咲耶は言った。

「……あんたなんか偽物よ」

その手に握られていたのは、胃薬ではなかつた。

月光がギラリと反射する包丁だった。

「あんたも、お父様も、全部偽物よ!! この詐欺師!! 染井家には相応しくない、私だけが本物なの!! この偽物っ!! 偽物共め!!!」

咲耶が渾身の力で振り下ろした腕を掴みなんとか押し返す。

身に覚えのない怒りを浴びせられ、私は混乱した。怒りよりもっと強く、悲しみが心を貫く。私が咲耶の中で「偽物」だったことが悲しくて悔しかった。もっと悲しかったのは、あの優しい良一様を偽物呼ばわりしたことだ。

しばらくは拮抗していたが、咲耶の力に押し返され後退し気がつけば後ろにベッドがあった。このままベッドに押し倒されてはまずいと思い額に汗を溜めながら踏ん張った。が一瞬力の均衡が崩れ、空ぶった包丁がドレスを裂き私の足を掠め肉を少し切った。私は痛みに呻き、血でベッドを濡らしながら這い上がった。そして咲耶はとどめを刺そうと包丁を高く振り上げながら言い放った。

「お父様は私が殺したの! あんたがっ、お父様にワインを持っていつてくれたおかげよ! あんたも私と同罪ね!! 先に……地獄に行つてなさいっ!!!」

私の中で懂れという名前のもが音を立てて崩れ去った。ああ、この人はもう私が好きだった咲耶とは違うのか。あの庭で出会った少女は、もうどこにも居なくなってしまった。

体の奥底から激情が溢れ出した。目の前にいる咲耶の頭のとっぺんからつま先までの全てが憎い。この激情を抑えるつもりはなかった。私は激情に体を委ねた。

私は咲耶の手を捻り、咲耶は痛みで包丁を手離した。私はそのまま素早く咲耶を押し倒し馬乗りになつて首を絞めた。

咲耶の顔は赤から紫に、そして紫から青白に変わっていき、やがて動かなくなつた。最期に少し笑つた様に見えるのは気のせいかもしれない。咲耶は悲鳴をあげることでもできずに、花卉が落ちるより静かに命を散らせた。後には、咲耶の死体の上で、力なく項垂れる私だけが残つた。

そして火事が起きた。火元は隣の咲耶の部屋だと思つ。咲耶が火をつけたのかもしれない、その答えは死んだ咲耶だけが知っている。

これが、私を知るあの夜起こつたことの全て――

* * *

「咲耶は……良一様を殺しました。私が手渡したワインには何か毒が入っていたのでしよう。だから良一様は死にました。私のせいで死にました。そして、私は咲耶を殺しました。殺し屋さん、貴方には劣ると思うけれど、私はもうすでに二人も殺した立派な殺人鬼です……。この世に存在してはいけない……化け物なんです」

私には、二人の死を嘆いて泣く資格すらない。良一様に葡萄色のワインを渡したのは、咲耶の細い首を絞めたのは、他の誰でもなく私なのだから。

——偽物共め!!!

咲耶の絶叫が頭にこびりついて離れない。無力な私だけが生き延びてしまった。こんな人殺しはいっそ死んでしまった方がいい。だけど、何度死を目前にしても……死ぬのは怖かった。この臆病者！ いっそ私も、あの庭と共に灰になってしまえば良かったのに。

「箱入り娘のお嬢さん。君は人殺しがいつ人殺しになると思えますか？」

同情するでも嘲笑するでもないガランの問いかけは予想の斜め上のものであった。

その表情を見ても質問の意図は汲み取れない。ガラス玉で後ろの景色を透かしたように空っぽだった。

考えるまでもないほど簡単な質問だ、私はただ正直に答える。

「人を……殺した瞬間からでしょう」

「全く検討外れな回答ですね。家族が、友人が、見ず知らずの他人が、社会がその人に人殺しというレッテルを貼った瞬間からです」

淡々と告げられた言葉の衝撃が、波紋のように広がっていく。

「つまり、人殺しは人を殺した瞬間じゃなく、人がその人を人殺しだと認識した瞬間に生まれるんです。僕は一度も人を殺したことはない。だが、人殺しではある。何故だと思えますか？」

私はまた彼の質問に答えられなかった。

まさか。そんなことがあっていいのか——

「僕の事は、誰かが人を殺した時、その罪を代わりに被るといふものなんです」

どうして、平然とそんな恐ろしいことを口にできるのか。涼しい顔で人の死を語るこの男に、感情はあるのだろうか。分からない、一瞬でガランのことがまた分からなくなった。

やはりこの男のことは理解できそうにない。いや、理解したくもない。これは嫌悪に似た拒絶だ。この人と私は根本的に違う生き物なのだ。

「それじゃあ、仕事を失敗したことがないっていうのは……」

「殺人が起きた後に仕事を受けるからです。大体は依頼人が殺人をした場合に呼ばれますが、今回の仕事は少し特殊で、依頼人が殺人をした張本人ではなかった。だから僕はまず、君が染井咲耶を殺したのかを確認する必要があった。君の物語は中々面白かったですよ」
ガランは立ち上がりわざとらしくお辞儀をした。

「改めまして。僕は君の、染井咲耶殺しの罪を被りに来た、殺し屋です。最初にも言ったように、僕の仕事は染井咲耶を殺すこと。君も僕の仕事の成功のために協力してくれますよね？」

スーツを着た美しい悪魔が甘い言葉を囁く。

死に際で悪魔と契約する時は、きつとこんな気分だ。もう私にはガランの手を取るしかない。この取引を恥じれるほど高尚ではない。この取引を逃れる機転を利かせられるほど利口ではない。ガランが言ったように、私は無力な箱入り娘だ。

私は頷いた。

その時、今までノイズを流すだけだったテレビから、私ははっきりと聞き取った。

『昨夜……染井……火事がありました。……警察と消防は焼け跡から見つけた二人の遺体は染井良一さん、長女の染井咲耶さんと……。遺体の状態や遺体の周辺に拳銃が発見されたことから、染井良一さんの死因は、火事ではなく拳銃による自殺とみて捜査を進めています』

「えっ……?」

「どういうこと? 夢でも見ているのだろうか? 良一様は咲耶に殺されたのではなく

……自殺?!

一瞬で色々な考えが浮かんで消えて、思考の渦に飲み込まれそうになる。

「僕は染井良一が自殺した理由と染井咲耶が君を殺そうとした理由に、目星が付いてますよ」

ガランは不敵な笑みを浮かべて言った。

「知りたいですか?」

「……知りたいです」

ガランは目をぎらりと光らせる。

「じゃあここからは、殺し屋が殺人の推理をする珍しい現場に立ち会った、幸運なお客様

へのサービスということで」そう言うときガランは、上着の内ポケットから四つに折り畳まれた紙を広げ、目の前にちらつかせた。

それは良一様の遺言書だった。

良一様の死後、染井家の全ての遺産を「染井一葉」に相続する。それが遺言書の内容だった。

……どうして咲耶の名前がないの？　何故私の名前が書かれているの？　文字がぐぐぐやりと歪曲して見えた。

「これは、染井良一の遺言書のコピーです。君はパーティーの前に染井良一と染井咲耶の仲が険悪になったと言いましたね？　それは染井咲耶が、この遺言書の内容を知ってしまったからなのだとしたら、納得がいく。それに染井咲耶が君のことを殺そうとしたことも、これで説明がつく。まあ、あくまで僕の推測でしかありませんがね」

「でも、それだけじゃ、良一様が自殺した理由は分からないじゃない」

ガランはふっと呆れた様に笑う。私を見る目から冷ややかな嘲りをはっきりと感じた。ガランはまたしても腕を組み窓に寄りかかりながら言う。

「ねえ、箱入り娘さん。ちよつとは自分で考えたらどうです？　君だって弁護士一家染井

家の端くれでしょう？ 自分に染井家の遺産が渡らないと分かった染井咲耶は一体何を考えたと思う？」

「……。咲耶は染井家直系だから、遺言書の相続人である私がいなければ、代襲相続で必ず咲耶の元に遺産が渡る。だから、私が相続権を失うか、死亡すればいい。例えば相続人が相続権を失うのは、相続人が被相続人を殺した時……。まさか……」

「そう。染井咲耶は遺産を手に入れるために染井良一を殺し、その罪を君に着せようとした。君が言ったようにワインには毒が入っていたんです」

ガランは続けた。

「グラスを持った時、君はグローブをはめていましたか？」

「いえ、私は手袋が嫌いなのでいつもはめません」

「染井咲耶は君がグローブをはめないことを見越して、グラスの持ち手にも染井良一が飲んだワインの毒と、同じ毒を塗ったんです。そうすれば、グローブをはめていた染井咲耶は毒を直に触ることはないが、君は毒を直に触る。染井咲耶は、ただグローブを処分するだけでいい。染井良一が毒殺され、君の指先から同じ毒が検出されれば、君は染井良一殺しの犯人になります。」

君は食はずぎで吐き気がしたと言いましたね？　あと、僕はずっと君の手の甲の炎症が気になっていた。先程近くで見てみて分かりました、それは火傷跡ではなくかぶれだ。君は直に毒を触ったので、毒が飲食などのタイミングで口に入ってしまった症状が出たのでしょう。吐き気や皮膚のかぶれは急性ヒ素中毒の症状です。毒はおそらくヒ素だ。無味無臭の毒で、誤飲しても症状が出るまで、まず気づくことはない。そして赤ワインは通常、常温で出されるので、持ち手に塗ったヒ素が結露で流れる心配もない」

ガランは私と視線を合わせるために屈んでくれたとばかり思っていたが、屈んだのは私の手のかぶれを確認するためだったのだ。

「しかし、染井咲耶のこの犯行計画は狂ってしまった。何故なら染井良一は、誰が見ても自殺以外疑いようがない死に方をしたから」

一発だけ早く鳴ったクラッカーがあった。もしかしてそれは、良一様を引き金を引いた音だったのではないか？　良一様は、咲耶が様子を見に行った時には、もうすでに死んでいたんだ。

「だから染井咲耶は直接君を殺すことにした。染井咲耶は、君の胃薬を探しにいくタイミングで、自室に火をつけたんでしょう。そして部屋に戻り、包丁で君を殺そうとした。い

や、殺すまでいなくても、君が動けなくなるぐらいの致命傷を負わせるだけで良かった。君が火事に呑み込まれてさえくれれば、丸焦げの君の死体が焼け跡から発見され、誰もが君の死因は火事によるものだと思う」

「つまり、良一様は毒を盛られたことに気がつき、相続人である私のことを守ろうと自殺を……」

「そう。僕には全く理解できませんが」

在りし日の良一様の姿が浮かんた。二人だけであの庭を歩いたことがある。庭の桜の木を指差しこの木が一番好きだと言って普段笑わない良一様が少しだけ微笑んだ。それがすごく嬉しかった。

「でも、どうして、どうして咲耶じゃなく私なんでしょう……?」

口について出た言葉は、ずっと吐き出したかった言葉だった。

いつか良一様に聞いてみたかった。喉までせりあがってきたこの言葉を何度飲み込んだか分からない。口にするのが怖かった。いや、本当はその答えを聞くのが怖かったのだ。

その時、ガランが何かに気がついたようにはっとして私の顔を見た。

「……桜だ。染井良一は娘に桜の木から名前をつけた。咲耶は、早咲きの桜、ソメイヨシ

ノから生まれた、咲耶姫という品種の桜の木から。そして一葉。君の名前も桜の木から取られているんです」

「でも、一葉という桜の木は聞いたことがありません」

「読み方が違う！ 一葉かずはじゃなく一葉いちようと読むんだ！ 一葉は、遅咲きの桜、八重桜から生まれた品種の桜の木だ！ だから君は……染井良一の実の娘なんだ……!!」

いつか二人だけであの庭を歩いた時、良一様が指差したのはソメイヨシノばかりの庭の中で、唯一植えられていた八重桜だった。

頭の中で、ずっとはめられずにいたパズルのピースが正しくはまっていく。早くその答えを口にしたくて、気がつけば私は、堰を切ったように話し出していた。

「良一様は、たまに私に昔話をしてくれました。咲耶のお母様の、佳乃様に出会うよりもずっと前のお話を。その話は、決まってある女性のお話でした。良一様はその人を心の底から愛していた。二人の愛の物語は、春の雷のように波乱万丈で、桜の花びらが舞い上がるように美しかった。……良一様は私とその女性に似ているとも言っていました。ええ、今ならばつきりと分かります。その女性は、私の母なんだと。お話に出てくる良一様の昔の恋人は、私の母だったんだと。だけど、この昔話は悲劇で終わってしまうんです。良一

様はその人の手を握り続けることができなかつた。染井家が愛する二人を引き離したんだそうです。私には想像できないほどの深い後悔が、いつも良一様の心の片隅にありました。染井家から伸ばされた手を振り払って、彼女の手を離さずにいたかつた。目尻の小皺を少し濡らしながら、良一様はそう言っていました」

「君が染井家の遺産を全て相続することで、染井良一は染井家に復讐しようとしたのかもしれない。そうか、この物語は染井良一の復讐劇だつたんですね」

きつと咲耶は気づいたんだ。私と咲耶は異母兄弟だということに。そして良一様の復讐に。

——この偽物共め!!!

だから咲耶は染井家に仇をなす私と良一様に向かつて言った。そうね、貴女の言う通りだわ。最後まで本物の染井家は、貴女一人だけだつた。

「……ねえ、殺し屋さん。きつと貴方に私のことを依頼したのは、良一様なのでしょう？」
彼は返事の代わりにニコリと笑つた。

「どうして良一様は、咲耶ではなく私が生き延びると思つたんでしょう？　もしかしたら生き延びるのは、咲耶だつたかもしれないのに」

「……八重桜は遅咲きな分、ソメイヨシノより大きな花を咲かせる。だから信じたんじゃないですか？　遅咲きの桜が花を咲かせるのを。僕は花粉症なので花が嫌いですが、ほら、そこにも咲いています」

ガランが「忌々しい」と言いながら指差した窓の外には、何本もの八重桜が月明かりに照らされ、夜を薄紅に染めんばかりに狂い咲いていた。

彼に言われなければ、いつまでも気づけずにいただろう。一面に広がる桜の海は、二人だけの病室に春を運ぶ。私は、もう灰になってしまったあの庭を思い出していた。

——あの美しい桜の庭の中で、私たちは家族だった。

たとえ咲耶にとって私が偽物でも、良一樣と咲耶が道を違えても、二人は私にとってどうしようもないぐらいに、かけがえのない家族だ。

気がつけばシートにはいくつもの大きな染みができていた。大粒の涙が溢れ、幾筋も頬を伝って落ちていく。私は嗚咽しながら泣いた、子供みたいに。

「……………！　ひぐつ……………うっ……………ひぐつ、うあ……………！　うわああ」

ガランは窓にもたれかかりながら、顔をこちらに向けず、ただ外の桜を見つめていた。私が落ち着くまでそうしてただ静かに立っていた。それが彼なりの気遣いなのか、はたま

た、ただ私が泣いていることを面倒に思ってたのかは分からなかった。

「……っ、ねえ、貴方は、どうして殺し屋をしているの？」

泣き腫らした赤い目をガランに向けた。ガランは相変わらず外の桜を眺めている。花は嫌いだと言っていたのに。

「物語が好きだと前に言いましたが、あれは少し間違ってる。たくさんのお話に触れたいんです、物語を集めているので。人が人を殺す時、そこには必ず物語が生まれる。僕はその物語を最初に聞く傍聴者になっておきたい。そんなところです」

ガランは顔をこちらに向けた。だが逆光で表情は見えない。

「あと、誰かの物語を聞いて泣くことができたなら、幸せが何か分かると思います。だから、一度でいいから誰かの物語で泣いてみたい」

ガランはまたも上着の内ポケットから長方形の無地の紙を取り出した。

「馬鹿な連中が君を捜査しに来たら、この紙を渡してください。それだけでいい。簡単なお仕事です」

どうやら名刺のようだ。だが、表にも裏にも名前が書かれておらず、強いて言えばその

名刺には空白が書かれていた。

もう夜が終わる、お別れの時間だ。

私は最後にもう一度「……ねえ」とガランに呼びかける。ガランは心底面倒臭いという風に、首だけを回しこちらを見た。

「ありがとう」

「これが僕の仕事なので」

彼が病室を出ていき、後にはただ静寂が残る。ノイズばかり流すテレビも、耳障りで消してしまった。

私は夜が明けるまで彼のために祈っていた。

咲いて灰になる。

そして春になる。

どうか貴方の元にも春が訪れますように。

咲いた花とその顛末

桜と聞いて人はどんな印象を抱くでしょうか。私個人は桜と聞いて、「美しさ」や「儂さ」をまず思い浮かべます。

しかし、この『咲いて灰になる』そして春になる』という作品においての桜に対しては、「強さ」を感じることができると私は思いました。

本作はある女性の視点で話が進みます。最初は我々読者も主人公同様、何が起きたのか即座に把握することはできません。身体は痛み、思考も綺麗にはまとまらない。そんな混乱の中、ガランという男、しかも彼の言う通りならば殺し屋がすぐ近くにいます。

痛みが走る身体、冒頭で流れる不穏なニュース、そして殺し屋。こうした状況からピンと張った糸のような緊張感が私たちに広がります。そんな中殺し屋から告げられるターゲットの名前に対して主人公は私のことだと認める言動をし、緊張感はピークに達します。

そんな緊張感は殺し屋であるガランによって解かれることとなります。「物語が聞きたい」という彼の言葉によって。こうして、主人公は語るのです。どうして今このような状

況になっていくのかを。

この導入部分で既に、私たちは作品の世界観にどっぷりと引き込まれています。読んですぐに状況が把握できないからこそ私たちは少しでも情報を逃すまいと作品に集中し、特徴的なキャラクターに惹かれ、冬の空気のようにどこか冷え冷えとしたスマートな文章によって醸し出される緊張感やその緩急によって、もう抜け出せないくらい作品にのめり込んでしまうのです。

そうして物語は進み、数々の真相が露わになっていきます。一人称視点だからこそ、我々読み手にとってはわからないことだらけで始まる本作において霧が晴れるように真実が明らかになっていくのには爽快感がありますが、どこか寂しさも感じられます。わかってしまった、理解してしまった、というような。主人公が物語を語る中で己の感情を再確認する部分には、そうした寂しさが感じられるのです。

言ってしまうえば本作は幸せにあふれた作品というわけではありません。

どちらかと言うと寂しさや悲しさを感じやすい作品だと思います。ここでは本作の具体的な結末に関してあえて明言しませんが、「ハッピーエンド」とは単純に表せられないもの

でしよう。

さいごになります。私は冒頭で桜に対して抱く印象の話をしました。本作には桜がたくさん出てきます。「桜」というものがある種メタファーとして用いられているのです。その前提でもう一度言わせていただくと、私は本作における桜に「強さ」を見出します。花を散らせても春にはまた咲き誇る。その姿に強さを感じるのです。

ニコゴリ

胡蝶の夢

黒土 萌音

"素晴らしい研究"の

協力者として

彼女とともに真実を

あなたの夢
売つて
くれませんか？

リアルすぎる世界と

悪夢とした現実との混同。

小さな空間の隅にやって来た黒い男に

協力した彼女が見ていたのは

夢か、幻か、はたまた真実か。

夢を売った先にあるのは――

この世界の
禁忌に触れる小説

「あれ？ うわ、鼻毛出てるじゃん！ やだやだ」

洗顔で泡を流し、顔に残った水滴を丁寧に拭き取った彼女が鏡を見た時のことだった。

鼻毛が出てたらどうするか。もちろん抜くか切るかの二択だが、彼女は後者を選んだ。

側に合ったポーチに手を伸ばし、携帯用シェーバーを探していると、その視界に長い鼻毛が二本、フレームインしてきた。彼女は目と鼻の位置関係から、その二本が左の鼻から出現しているのだと理解した。

「え！ ながつ！ なんで今まで気づかなかったのさ」

と、自問自答しながら、再び鏡に視線を戻すと、二本の長い鼻毛が確かに左の鼻から出ていた。こんなに長いなら、むしろ切った方がいいと思ひ、ハサミを探そうとポーチの中からもぞもぞとハサミをしていた次の瞬間だった。鼻毛の根っこがいきなり音もなく正体を現した。その正体はハナクソでもなく、ゴミでもなく、カマキリの頭だった。

「はっ……はっ……ぎゃあ〜〜〜！」

鏡に向かって彼女は叫んだ。また、鏡の中の彼女も叫んでいた。カマキリは左右にキョロキョロ首を振っているだけであつた。そのまま彼女は受け身も取らず仰向けに倒れた……。

「はあはあ……夢……」

梅雨入り前の六月ということもあり、エアコンをつけるにはまだ早く、かといって完全に閉め切つたら暑い。そんな微妙な加減が必要とされるため、小さく窓を開けて寝ていたが、気付けばそんな苦労も台無しなほど大量の寝汗を掻いていた。

「最悪……最近こんなばっか」

そんな独り言をぶつぶつ言いながらシャワーで汗を流し、ヨーグルトにいちごジャムを入れた簡単な朝ご飯を済ませた後、会社に向かった。

家から最寄り駅まで徒歩一五分。電車を一回乗り継いだ先のオフィス街。三四階建ての高層ビルの八〜一二階に彼女の会社があり、ちょうど真ん中の一〇階に彼女のオフィスフロアがあった。

「おさいます（おはようございます）」

霸気のない挨拶がオフィスの入り口二メートル手前で落ちた。いつも彼女が一番ノリの推進事業部だが、この日は珍しく彼女の後輩、華が一番ノリだった。

「あら、華ちゃん、おはよう。今日はいつともより早いね」

「あ、先輩！ おはようございます！ いや、私も先輩見習ってちよつと早く出社して、そしたらいつもより早く帰れるかな〜って思ったりして」

華はオフィスの元気印で、笑顔がはじけるハツラツとした、愛嬌のある女性だった。彼女を先輩と慕い、また彼女も可愛い後輩だと唯一会社で心を許していた。

「早く帰れるように集中して頑張らなきゃだね」

「はい！ でも、今パソコン立ち上げたんですけど、プログラムのバックアップでさつきから再起動ばかりして、全然作業させてくれないんですよ〜！」

昼ごはんの時間になり彼女は華を誘った。が、きりのいいところまで作業をするのでと言われ、一人でビルの一階まで降りた。誰でも使える共有のラウンジがあり、ビル内にはフードコートの他に和・洋・中のレストランが入っている。レストランストリートの一角に、今SNSで話題沸騰中のカフェ「JIRO」の二号店が入り、オープン記念ということもありかなりの賑わいを見せていた。彼女はあわよくばと思ったが、今日も案の定長蛇の列だった。せつかくの昼休みを待ち時間で潰してしまうのは癪に障るので、フードコー

トでハンバーガーを食べることにした。

「いたいた！ 先輩、そこいいですか？」

「あ、いいよ。お疲れ様」

三〇分後くらいに華がランチバックを片手に遅れてやってきた。

昼休み、六〇分という限られた時間で彼女は華と色々な話をした。

「——でね、すっごい気持ち悪かったのよ。だって鼻からカマキリなんて出てきたことある？ ないって」

興奮気味で彼女は例の夢のことを話した。まるで大物MCが今面白い話してますよ、な空気感を出しながら、先輩としての威厳を見せつけようとしていた。

「ひゃく気持ち悪い。で、どうなったんですか？」

「え？ どうなったって？」

「いや、カマキリが鼻から顔を出して、その後！」

「……特に何もないけど……」

「えく！ そこから面白くなるところじゃないですか！ 例えば、先輩がナウシカみたいのに、そのカマキリに向かって『森へおかえり……』って言ったらかマキリが頭を引つ

込めたとか！ もう片方の鼻からカマキリが出てきて、井戸端会議が始まったとか！」

威厳を見せつけようとした彼女は、エピソードトークの指導をされるといふ手痛いしつぺ返しを喰らった。

「ん、ないない！ とにかく気持ち悪かったのよ！ それでいいじゃない……」

後輩の勢いに圧倒され、勝手に返り討ちにあつた彼女は何となく決まりの悪さを感じ、まだ少し休憩時間があつたが華を一人フードコートに残し、オフィスフロアに戻ろうとした。

「あ、先輩！」

「ん？ どうしたの？」

「……森へおかえり……」

「はいはい、かえります」

夜九時を少し過ぎた頃。いわゆるゴールデンタイムの金曜日、街は群衆でごった返しになり、仕事終わりのサラリーマン戦士たちがネクタイを緩め、道の真ん中を堂々と闊歩していた。二軒目に行く人、明日もあるのでもう帰る人、妻と子供が待っているのと言

いながらも実は人付き合いが苦手でその場から立ち去りたい人、実に様々であった。

その戦士たちの中に彼女の姿はあった。どうやら一人である。今にも肩さげのビジネスカバンがずり落ちそうになりながら歩いてきた。彼女はそのまま駅に行くのかと見せかけて、繁華街の路地裏をぶらぶらし始めた。当てがなさそうにも見えたが、彼女はそのままで裏路地の出入口に位置する小さな喫茶店へと吸い込まれていった。カウンター七席、四人掛けのテーブルが三席の小さな店だった。彼女はカウンターの一番端の席に座り、アイスカフェオレを注文した。おもむろにスマホを取り出し、ツイッターやインスタグラムを惰性でスクロールし、そうかと思えば、ラインを開いたりもした。

ごめん！ 今日ちょっと残業になる、会えないかもしれない（泣）

えー、折角楽しみにしてたのに残念！（泣）（泣）

本当ごめん、今度またご飯いこ！

うんうん、無理しないでね、頑張つてね！ 次いつ会えそうとかわかる？

ちよつと分からないなく、今バタバタしていて、来週には会えるかな……！！ 多分！

「来週って……先週も来週会えるって言って、結局会えなかったじゃん」

三時間前、彼氏とのやり取りを見ながらそう呟いた。アイスカフェオレの中にある氷が少しとけてきて、カランつと音を立てて隙間に滑り落ちた。ピーク時を過ぎた店内はそこまで混んでいなかった。にもかかわらず、わざわざ彼女の隣に座ってくる人がいた。一瞬戸惑ったが、彼女が壁とのスペースはほとんど無いなか、気持ち少し壁による素振りを見せ、こっちに来るんじゃないよ、という意思表示をした。年の頃なら四〇前後。全身黒のスーツでシャツまで黒い。誰がどう見てもまともな人じゃないというのがわかる格好をしていた。

「アイスコーヒーブラックで……あ、あとプリンも」

コーヒーまで黒だなど彼女は思いつつ、特にそれ以上気にすることもなく、時々カフェオレのストローを口で迎えに行きながらスマホをいじっていた。

やがて男のもとにアイスコーヒーとプリンがやってきた。彼はプリンにスプーンを入れると、横に添えてあるホイップと絡めて頬張った。実に満足げな表情を浮かべ、ストロー

を使ってグラスの中にある氷をカランコロン回しながら一口飲んだ。顔をしかめたところを見ると、あまりコーヒーは得意そうではなかった。相変わらずプリンを食べながら男は彼女に得意気な顔をして、

「私はこのプリンというものが大好きです。地球のどこを探してもこれだけ多幸感をもたらすものはない。まさに人間の英知の結晶だと思います」

と、勝ち誇ったように言った。大げさなことを言う人だなという衝撃が強く、彼女はしばらくしてからでないと返事ができなかつた。

「は、はあ……それは良かったですね……」

「ところで」

男が彼女のレスポンスには全く興味を示さず次の話題を振った。

「あなたの夢、売ってくれませんか？」

木目調の統一感のある店内ではジャズが優雅に流れていた。よくよく聴いてみると誰もが聴いたことがある有名なクラシックがジャズアレンジされていた。何となく親近感が湧く、そんな雰囲気だった。

「え？ 夢を売れって？」

彼女は男が言っている意味を理解できなかった。

「はい。どうです？ もちろんタダでは言いません。報酬もあります。夢の質にもよりますが」

「……そもそも夢って何ですか？ 将来の夢とかってこと？ それとも寝ている時とかにみるやつですか？」

「寝ている時とかにみる方です」

「それをどうやって売るんですか？」

男は彼女が協力してくれると早とちりをしたのか、少し彼女に向き合う形で、意気揚々と話した。

「簡単です！ あなたがみた夢の話をしてくれたらいいんです。できるだけ細かく、思い出せるだけのことを。あ、今ここで話してくれても構いませんよ！」

彼女は、ほんの数秒間だけ考えた。宗教勧誘ではなさそうだが、怪しいセミナーであり、そのような商売文句とも受け取れる。普通だったらここで断って、その場から離れるのが一番であろう。だが、彼女は違った。怪しさ満点の質問に好奇心を覚え、日々の生活に退屈し

ていたのと、仮に変な勧誘をされたとしても、絶対にNOと言える自信があった。

「ふーん。面白そうですね。でも、私から話す前に聞いておきたいことがあるんですが、あなたはどいうった人なんですか？」

なんでも来いとは思っていたが、やはり反社チェックだけはしておきたかったのである。「あ、これは失敬。私、実はこういうもので……」

男は胸ポケットから名刺を一枚出して彼女の前に差し出した。名刺によると男の名前は夢貝益男^{ゆめかいますお}。某有名大学の脳科学研究所に所属している教授……らしい。

「つまりは、私の研究に協力してもらおうというもので、こうやって街に繰り出しては色々な人の夢について聞いてまわっているんです。そもそも夢というのはですね……」

夢貝教授は自身の研究と、その大義名分について講釈しかけたが、彼女は小難しい話はまっぴらごめんと言わんばかりに話を遮った。

「あく！ わかりました。案外までも……あ、いやいや！ 研究のためなんですわね？ はいはい、そしたら私がみた夢の話をしてあげますよ」

「え……あ、ありがとうございます！ ……なんかこう、いつも気持ち悪がられて逃げられてしまうものですから……本当にありがとうございます！ では、お金のほうなんです

が、一通り話が終わってからお渡しをするというのでもよろしいでしょうか？」

「はいはい、それで構いませんよ」

彼氏にドタキャンをされ、むしろくしゃしていたところで彼女にとつても、誰かが話を聞いてくれるというのは都合がよかったのかもしれない。生きてきた世界があまりにも違いすぎる二人にとつて、この出会いは偶然か必然か。とにかく、全ての歯車がうまくみ合つて、こうして交渉が成立したのである。カフェオレを一口飲み、喉を潤したタイミングで、今度は夢貝が話を遮った。

「あ、すいません！　ただし、一つだけ条件があります」

「え？　条件？」

「はい、できれば、できればいいんですが、悪い夢について話していただけないでしょうか？」

「はあ……まあいいですけど……」

裏路地の出入口といつても、そこ以外飲食店はなかった。そのため人通りが少なく、街中なのに都会の喧騒から離れた場所のようだった。気付けば夜も一時を回り、残った客

は四人掛けに一人と、カウンター席に二人だけしかいなかった。

夢貝は食べかけのプリンはそっちのので、ペンを片手に彼女が話してくれた数々の悪夢について一心不乱に書き留めていた。悪夢という条件付きではあったが、毎晩毎夜、悪夢にうなされていた彼女にとつてはむしろ好都合とも取れる条件でカウンター席は異様な盛り上がりを見せていた。

「——ところがどっこい！ 鼻から出ていたのは鼻毛ではなく、カマキリの触覚だったのですっ！」

「おおおお！ なるほど！ 鼻からカマキリですか！ これはなんとも目覚めが悪い夢ですね！ それから、他には何かありませんか!!」

「そうですね、ベタに殺された話なんてどうです？」

「おお！ 是非！ お願いします！」

「いいでしょう。え、これは三日前にみた夢だったかな？ いつものように仕事が終わって、疲れて帰っているところから始まります」

「ふむふむ」

「最寄りの駅を降りて、いつもの帰り道。団地を超えた先に私が住んでいるアパートがあ

ります」

「ほうほう」

「で、中間地点に公園があるんですよ。ほら、団地とかによくあるアレですよ」

「はいはい」

「その公園を横切ろうとした時、ある異変に気づいたんですよ……」

「い、異変……と、言いますと……」

「公園の真ん中にベンチがあるんですよ。サークル状の。そこで、あたりは真つ暗なんです、かすかに人影が見えたんです」

「ゴクリ……」

「いつもだったら気に留めることもないんですが、なんか気になっちゃって、あえて帰り道のルートから外れて、側を通ってみました」

「……」

「さらに距離を縮めていくと、頭のシルエットが二つ、確認できました」



「さしずめ、若いカップルだろうと思いました。暗くて人目も気にせずゆっくりできますし。ちよつとがっかりだなくと思つてベンチに一番近づいた……その時！ 私は震えが止まらなくなつてしまいました！」

「!!」

「確かにベンチにいたのは男女のカップルでした……シルエットからして一人は短髪、一人は長髪で。でも、あることに気づいてしまったんです……女の人の首から下がないと……」

「え！」

「つまり、私が二人だと思つていたのは正確には一人と頭一つ！ 男は女の頭を自分の肩にのせて話しかけていたんです！」

「おお……な、なんて話しかけていたんですか？」

「すいません、そこまでは覚えていないんですが……さも楽しそうに話してましたよ……そして、男は私の存在に気づき、くるつと私の方を見るや否や、ベンチを飛び越え一目散に私の首めがけて手を伸ばしてきました！」

「おお！　で！　どうなりました!!」

「そこで、夢が覚めてしまいました、そう……殺される一歩手前で！」

極上の悪夢に出会えた夢貝はしばらく放心状態で、持っていたメモ帳に額から流れた汗がポタリと落ちる音で我に返った。

「実に、実に素晴らしい……殺されるのではなく、殺される手前で覚めたというのが実に良い。いや、ありがとうございます」

彼女は少し照れ臭く思いながらも、自分の喋りがこれだけ人を惹きつけることができることに誇らしさも感じていた。それから彼女は夢貝に囁し立てられ、思い出せる限りの悪夢について話した。巨大クリオネに自分の腕を食べられる夢、脚を切開したら枝豆が所せましと詰まっていた夢、家のドアを開けた先に、友人がマシンガンを持って待ち構えていた夢……。話してみると意外と悪夢ではないかも……、と思ったりもしたが、それでも夢貝は目をキラキラさせてメモに、ペンを走らせていたので、良しとした。

彼女が語り終えた、ここぞというタイミングで店員が割って入ってきた。

「あの～すいません。ラストオーダーの時間なんですが……」

時計を見ると既に一一時三〇分で閉店三〇分前だった。

「あ……いえ、結構です。もうすぐ帰るので、すみません」

「あ、ありがとうございます、ごゆつくりどうぞ」

店員は、彼女には何も聞かずに、四人掛けテーブルの客の方に向かっていった。

「いや、とても面白かった！　そして何より良質な夢の数々！　あなたのおかげで私の研究は一步大きく前進しました。心から感謝しています」

「いや、それほどでも……私も最悪な金曜日になりそうでしたが……楽しかったです」

多幸感に満ちていた夢貝はその言葉を聞き届け、残っていた食べかけのプリンを大きな一口で口の中に放り込んだ。紙ナプキンで口のまわりについたカラメルとホイップを拭き取り、内ポケットをもどもぞし始めた。

「では、これは……ほんのお気持ちですが」

そう言うと、夢貝はなかなか厚みのある茶封筒を、彼女の飲みかけのカフェオレの横にすつと置いた。彼女は驚いた。それもそうだ。ほんの一時、両手に収まるほどの、チョットした自分がみた悪夢について、ちよろつと話しただけ。それだけで、一か月分の給料いやそれ以上のお金が手に入ったのだから。

「いや！　私は別にお金が欲しいわけではないので！　いらないます、いらないます！」

本当は、受け取れるものなら受け取りたいが、どうも怪しいと思った彼女は頑なに拒否し続けた。だが、みんなにそうしているから、と夢貝も負けじと茶封筒を押し付けてきた。

一〇分。折れたのは夢貝だった。

「本当にいらぬです！ あ、わかりました！ 代わりにあなたのその研究について話してください！ それで手打ちということにしましょう！」

「いや、でも……あなたさっき私の研究は……」

「聞きたいです！ だってこれだけのお金をくれるほどですもの！ そりゃ、きっと素晴らしい研究に違いないと思いますし！」

素晴らしい研究という一言が決めてになったのであろう。夢貝は鼻の下を伸ばし……軽く咳払いをした。

「わかりました！ あなたのお願いというならお話しします！ 時間もないので手短かに概要だけ……」

そう言うと、夢貝はちらと腕時計を確認し、大きく息を吸った。

閉店間近、店内ではお客は気付けば夢貝と彼女のみで、空いたテーブル席が順番にワッ

クスがけをされていた。

「あなたは胡蝶の夢という話をご存じですか？」

「胡蝶の夢？ 名前くらいなら……」

「これは中国の思想家、荘子がみた夢に由来する逸話です。ある日、荘子が蝶になり、美しく飛び回る夢をみます。美しく飛び回っている間は、荘子は自分が人間であることを忘れてしまいます。しかし、夢から覚めると自分は蝶でなくなっていた。そこで、荘子は思うんです。自分は蝶になる夢をみた。が、実は蝶が人間になる夢をみていて、現世の荘子こそが幻であるかもしれない……。全く、昔の思想家はすごいですね、現代から見れば文明も文化も発展途上の、はるか二〇〇〇年以上前に既に現世を夢かもしれないと考えていたのですから。……さて、あなたの質問の本質に迫りたいと思います。研究について教えてくれということでしたが、私の研究は『真実世界の構築』です。きつとこれだけだと分からないと思いますが、簡単な話です。つまり、私は我々がみる夢の世界こそ、現世であり、真実であると考えているのです。『胡蝶の夢』で言えば、人間ではなく自分が蝶だ

と思っている側で、わかりますかね？　こうやって私が話しているのも夢、あなたが聴いているのも夢で、幻でしかないんです。実数ではなく、虚数の世界で生きているのです。では、どうやって真実の世界を知るか？　簡単です。我々がみている夢こそ真実ですから、こうやってどんな夢をみたかを聞けばいいのですよ」

ひとしきり話し終えたところで、夢貝はふんつと鼻を鳴らした。これを話が終わった合図と思った彼女は目をぱちぱちさせて「整理」を始めた。

「えー、つまり、あれですか？　夢貝さんは、この世が幻であり、私も夢貝さんも幻。で、現実人間がみる夢の中になるから、その真実世界？　を知るために色々な人に夢の聞き込み調査をしている、と？」

「ふふふ……その通りです」

夢貝は得意気な顔をして腕を組み、胸を大きく膨らましていた。

「んー、何となくわかりましたけど、ではなんで悪夢にこだわるんですか？　人間いい夢とかもみるじゃないですか？　なのにさつき悪夢について……」

「もちろん、悪夢だけで真実世界の構築はしません！ ただ……」

「ただ……？」

「いや、いい夢聞いってから悪夢聞いていくと、気持ち的に沈んじやうかなと思ったりもして……楽しみは最後にとっておきたいじゃないですか」

「一時五〇分を過ぎた頃、プリン美味しかったです、と夢貝は店員に言い残し、彼女に続いて店から出てきた。一通り話は聞いたが、常人には理解できないな、天才って考えていること違うのかな、というのが彼女の感想だった。そんなことは露知らず、夢貝は、満面の笑みで彼女にお礼を言った。

「今日はありがとうございます！ あなたの悪夢、とても参考になりました！ あと、確かに悪夢だったかもしれないませんが、あなたの夢はどこかユーモラスで素敵ですね！」

「ありがとうございます。こちらこそ遅くまで、カフェオレご馳走様でした。研究頑張ってくださいね」

「はい！ もう少し時間はかかりますが、きっと真実世界を構築させます！」

別れの挨拶を交わし、彼女は駅の方に、夢貝は駅とは真逆の方に歩いた。彼女がふ

と振り向いた時、夢員の姿はどこにもなかった。

想像／創造する世界への期待

想像しただけでぞっとするような、夢とわかっていても身の毛がよだつ思いで必死に逃げ回る。怖くて気持ち悪くて目覚めの悪い夢。だけど、こんな夢を誰かに面白がってもらえたら、聞いてもらえたら、さぞかし気持ちのいいことでしょう。

「夢」を辞書で調べると、理想や願望を意味する夢のほか、睡眠中の幻覚といった意味で載せられています。精神分析によれば、抑圧されていた願望を充足させる働きもあるといえます。夢は自分の脳内で行われる幻覚だとよく言われますが、どんな夢にも自分の精神状態や現実世界での出来事などが影響していて、全くもって意味を持たない夢などはないのでしょうか。夢占いなども、悪い夢ほどいい予兆であることが多い印象ですし、実際に現実の出来事が夢に反映したり（私は専らそのタイプです）、考えすぎて夢にまで出てきたり。このような経験は誰しも一度や二度はあるかと思いますが、深く考えると不思議な現象だなあとつくづく感じます。

現実なのか夢なのか。小説や物語、芸事の世界でもよく「夢オチ」が使われますが、「夢」という摩訶不思議な現象はいつの時代も人間にとっては非常に興味深い。作中ではタイト

ルにもある通り、「胡蝶の夢」の話が紹介されていますが、何千年も前の話なのになぜか納得がいつてしまうような感覚になりました。夢貝たちの研究はおおよそ理にかなっているのかもしれないとも思っています。

悪夢をみて、嫌だな、と単純に気分が沈んでしまうところで終わってしまう私からすれば、逆転の発想でした。現世の私が夢で、夢の中の世界が現実だったら、なんて考えると恐ろしいですが確かに気になります。今度悪夢をみたら、できるだけ書き留めておきたいという気持ちにすくなりました。夢をたくさん記録して、自分なりの真実世界を構築することです。でも夢貝益男の研究の手助けになれば幸いです。

文章だけで彼女の夢の中を想像できる、表現力の豊かさときりげなく差し込んでくるユニークな比喩が読み心地よく、隠れた不穏さも感じられました。そして、作者自身もこれまでに相当な悪夢をみてきたのではないかと。そのくらい魂がこもった夢でした。ぜひ、夢貝さんと一緒に研究を進めてほしいです。続報、お待ちしております。

第一稿

濡羽
天

2人は文字に声をのせた

インクと紙で編まれた青年と少女のひと夏。

紙上の文字に込められた「声」。

それは誰かに伝えるための「声」であり、
また逃げるために潜めた「声」でもあった。



この作品を、一人の友人へ捧げます。

願わくば、長い旅路の終着点、その標となりますように。

葉桜が街並みに馴染んで少し経つ頃だった。徐々にはつきりしてきた雲と影の輪郭は、延びた陽は、嫌でも夏を感じさせた。

新しい家に越して二週間。部屋にはうつすらと生活感が滲んできた。もうずっと背を丸めてなんとかやり過ごす毎日だったが、ほんの数キロ座標がずれるだけで随分息がしやすくなったと思う。が、その心地良さにかまけて、気付けば家から出ずに十日ほど経っていた。

たまには外の空気を吸ってきなさい、ほら、探検しといで、と母の言葉に半ば圧されて家を出た。携帯と財布をパーカーのポケットに入れ、シャーペンを挟んだノートと道中で買ったお茶だけ抱えて歩く。この辺にあると聞いていた図書館を目指して来たが、運悪く閉館日とかち合ってしまった。でもまあ折角来たのにすぐに帰るのも、と思い、隣の公園に足を踏み入れる。

公園と言えど遊具はない。だだっ広い芝生に人工的な小川が流れ、架かる橋を越えた奥には、続く小道に沿って木が茂る。広場と言った方が正しかったかもしれない。

休憩できる場を求めて小道を進む。風に合わせて足元で木漏れ日が揺れる。それを爪先でつつくように歩いてみると、丁度良さそうなところを発見した。テーブルを挟んで向かい合つて座れるように設置されたベンチと、上には屋根がある。いわゆる四阿あずまやというやつだった。ちよつと休憩して、夕陽を見届けたら帰ろう。そう思いながら近づいてみると、残念ながらそこには先客がいた。

毛先近くでゆるく一つに縛つた黒髪を左肩から前に垂らした、セーラー服の女性。生憎この辺の学校事情には詳しくないため、どこの学校の生徒かはわからない。が、背格好から自分の二つか三つ上、恐らく高校一年生か二年生に見える。久々の外出で足も腰もほどほどにくたくただったが、流石に相席する度胸はない。まあ少し歩けばもう一つぐらい座れる場所はあるだろうと歩き出したときだった。

思えば、本当にベタな出会いだったと思う。

やや強めの風が小道を吹き抜けた。木のざわざわと揺れる音に混ざつてばさばさと聞こえ、細めた目を開けば、数枚の紙が足元を飛んでいこうとしているところだった。

反射的にそれを掴んで捕らえると、手の内でくしゃ、と皺が付くのを感じる。やっつてしまったらどうか。

どうやら紙は四阿から飛んできたようだった。先の女性がこちらに駆け寄って来る。

「わぐごめんさい！　ありがとう！」

皺はどうでも良かったようで、手渡した紙を大事そうに胸に押し当て、彼女はほっと息を吐いた。かと思えば今度は不意にはっとして、紙で口元を隠しながらおずおずとこちらを見る。その瞳の内が丁度今の空と同じ色なことに気付いて、少しのあいだ目を奪われた。

「……中身、見えちゃった？」

ころころと、空模様のように表情のよく変わる人だなあ、というのが第一印象だった。不躑な視線を払うのも込めて首を横に振ると、彼女は今度こそ安心したようだった。

するとまたざわざわ木が鳴った。が、次にばさばさと音を立てたのは僕のノートだった。頁を羽ばたかせて、地面を転がるように四阿横の茂みに突っ込んでいく。

僕がそれを目で追うよりはやく、彼女はそれを追いかけていった。慌てて駆け寄れば、彼女は屈んで拾い上げたノートの汚れをほろつてくれていた。が、どうも突っ込み方が悪かったようだった。

「……中身、見えちゃった」

まずい。どこをどれぐらい見られただろう。いやどこを見られてもまずい。引いただろうか。いや今後関わる相手でもあるまいし、引かれても別に知ったこっちゃないか。コンマ一秒にも満たない間に思考が二転三転、五転ほど回った。脇に変な汗が滲むのを感じながらノートを受け取る。が、視界に入った彼女の表情は予想と違った。

「すごいねえ！ きみも物語を書くの？ 台詞から書くタイプなのかな」

彼女は手が自由になるや否や、僕の両手を包み込んで軽く振った。何ら構えていなかったため、大げさなくらいに肩が揺れる。輝いた目の中にあるのは喜び、或いは期待だった。

開きかけた口をきゅつと結ぶ。力の緩んだ隙に手を抜きノートを開くのを、彼女はぼかんとした顔で見ている。呆けてくれているうちに目的の頁を探す。確かこの辺に、ああ、あった。

『これは筆談用のノートです』

視線が文字をなぞる。今度こそ変なものを見る目を向けられるだろうと顔を窺うも、返ってきたのはまた予想外の反応だった。

「なるほどねえ、じゃあそれはきみの言葉だったんだね」

彼女はそう呟くと、はっとして言葉を足した。

「ああいや、創作物だとしてもきみの言葉に変わらないか」

ノートを開いたまま、ぼかんと固まる僕に続ける。

「や、ごめんね。鳥の話の頁が見えちゃって。で、目に入った文は何でも読んじゃう……癖？みたいながあるから読んじゃったんだけど、とつてもいいなあって」

押揃うような気配はなく、ただほんの少しだけ申し訳なさそうだった。

鳥の頁。思い当たる節はあったが、返事に悩む。

「ね、あれも何かの感想だったりするの？ 元ネタがあるならぜひ見たいなあって思ったんだけど……」

適当に躲すことも考えたが、まっすぐに向けられたきらきらと輝く目を、好奇心を前に、そんな不誠実な態度はとれなかった。

返事をせねばと口を開きかけて、くつくつしはじめたので堪らず閉じた。諦めて最初からこうすればよかった、とノートの新しいページを開いて、シャーペンを持つ。すると、こっちの方が話しやすいかも、と彼女が僕の手を引いた。導かれるままに四阿のベンチに座り、返事の続きをしたためる。

『あれは』

少しだけ躊躇って、でもすぐに観念してペンを持ち直す。

『たしかにぼくの創作です』

ぱっと顔を明るくした彼女を、これ以上期待させる前に慌てて書き足す。

『でも』

『創作というか、らくがきみたいなもので』

もつと言えば、自分語りみたいなもので。

『だから人に見せるようなものではないというか』

『おもしろくもないし』

もしよもしよと、後になるにつれ文字がしぼんでいく。

「見せたくないなら無理はしないでいいの。でも、」

彼女の言葉を遮るように、やや音の割れた七つの子が鳴る。それは元居た町と同じ、十
八時を告げるパンザマストだった。

「でも読めたら嬉しい！ きつと面白いから！ 今日はまだもう帰らなきゃだけど……もし
よかったら明日もここに来て。私ほぼ毎日ここににいるから！」

鳴り終わるや否や、彼女は早口でそう言うと、自分の荷物を引つ掴み、勢いのままに走って行ってしまった。

一人取り残され呆けていたところを、上空を過ぎる鳥の声で我に返る。すっかり断りそびれてしまった。まあ、明日一日家にいれば彼女もそれを返事と受け取るだろう、と腰を上げて気付く。先程まで彼女が座っていた位置の足元に、白いハンカチが落ちていた。なんとまあ、どこまでもベタな手を踏んでくれる。

翌日、僕はのこのことあの公園に向かって歩いてきた。昨日と同じ持ち物に加え、白いハンカチを持つて。

小道を抜けると四阿があつて、やはり同じように彼女はいた。机に広げた何かを読むのに集中しているようで、まだこちらに気付いていない。このままハンカチだけその辺の柵にでも掛けて、こっそり帰ってしまおうか、なんて思うのと同時に彼女が顔を上げた。

「昨日の……あつハンカチ！ 持つててくれたんだ。ありがとう」

彼女の視線が顔から手元へ移り、ぱつと顔を輝かせる。差し出したハンカチを受け取る。と、彼女はそれを両手で大事そうに包み、ありがとう、ともう一度言つて軽く頭を下げた。

「そっかあ、それじゃあこれを届けに……来させちゃった、のかな」

眉を下げて笑う彼女に、昨日の内に書いておいたノートの頁を見せる。

『昨日の話ですけど、あの物語、未完成なんです』

『だから、ごめんなさい』

返事を読んだ彼女は、少しの間考えこんで口を開いた。

「完成してないから、っていうのが一番の理由なの？」

そう問われると少し悩む。昨日も言ったように、面白がつてもらえる自信がないのも理由の一つで、でもまあ、そもそも無いものは読ませられないので、頷いてそれを肯定する。

「もったいないなあ……」

まるで自分のように残念がる彼女に、ちくちくと良心が刺激される。そもそも自分のための物語なのに。しかも自分から見せたわけでもないのに。なんでこんな、ずるいというか、あざといというか。どうも主導権を持っていかれてるような気がする。

「ね、私も手伝うから、これ、完成させてみない……？」

なんでわざわざそこまで、とか、手伝うたってどうやって、とか、色々な思いが湧き出てくる。んん、と小さく漏れた唸り声に反応して、彼女が追撃する。

「お願い！ あそこまで世界が出来てるなら、私それをちゃんと見届けたいの」

それはもう、ほとんど駄目押しだった。昨日と同じように、まっすぐ向けられた興味と関心に、飢えていた心がかっと掴まれる。

『わかりました』

気付けば僕は新しい頁にそう書いていて、彼女はやったあ、と笑った。

「ありがとう。途中で嫌になっただらいつでも離脱していいから、よろしくね」

鳥の話。上手く鳴けず群からあぶれた鳥が、友達を探す話。山を越え、海を越え、人の街へ旅した鳥は、ついぞ誰とも話せず山へ戻ってくる。そして数年ぶりの山で鳥は水溜まりと出会い、友人になる、というのが現時点で出来上がっていた話の枠組みだった。

彼女が読んだのは、この鳥の設定を書いた頁。改めて広げれば、わあこれこれ、と紙の端を指で撫でる。それからあんまりに真剣な顔でそれを読み込んでいるのを見て、それを通して自分自身を読み解かれているような、品定めされているような気がして少し緊張する。暫くして、やっぱいいねえこれ、と彼女はこちらを見て笑った。それに脱力するほどほっとしたのを憶えている。

それから、二つ、三つほど軽い質問が投げかけられる。

「主人公を追い出した群に悪意はあった？」

『ないと思います』

『コミュニケーションがうまくとれなくて、自然と距離ができた感じ』

「やつとできた友だちが水溜まりなの、面白いねえ」

『それは昨日思いつきました』

「へえ！ 何から閃いたの？」

つい、ほんの一瞬彼女の目を見てしまい、すぐに逸らす。彼女は不思議そうに軽く首を傾げていた。

『水溜まりというか、』

書きかけた文字を塗り潰す。

『なんとなくです』

「今なんか言いかけたでしょ」

『設定がかたまったら言います』

彼女は、ええ、と半分笑いながら残念そうな声を上げた。そうして掘り下げる内に増

えたり変わったりする設定を書き足す。少しすると話は脱線して、雑談が盛り上がった頃
にまた七つの子が鳴る。また明日ね、と彼女が笑って手を振る。

帰宅し、創作を進めるためにノートを見返す。そこでふと、或るいはやっと、自然と話
せていたことに、ながくながく見ていた夢が、こどもあつさりと叫んでいたことに気付く。
ほんの少し緩んだ口元には気付かないふりをして、今日固まったところだけでも、と本文
を書き進めてみる。今思えば語彙力も文章力もへたくれもない拙い話だったが、誰かの
ために書くということの楽しさを知ったのは、間違いなくこの日だった。

それからすぐにその明日が来る。昨日と同じぐらいの時間に、ちよつとだけ完成に近づ
いたノートを持って四阿へ向かう。するとやっぱりそこには彼女がいて、昨日と同じよう
に真剣な顔でノートに目を通し、また二つか三つ質問をくれる。それを元に構成を練って、
脱線して、また創作の話に戻ったあたりで七つの子が鳴る。また明日、と手を振る。そう
いう穏やかな日が二週間ほど続いた。

言い換えれば、そういう穏やかな日は、二週間ほどしか続かなかった。

その日は気圧の影響を受けた大雨が降っていて、予報を遥かに上回る降水量を記録し、

酷い風も吹き荒れていた。普通に考えれば今日ぐらい彼女も大人しく家にいるだろうと思つた。ただ、もし、万が一、彼女が一人で今も待っていたら、と思うと堪らない気持ちになつて、ビニール袋で包んだノートを合羽の内の腹辺りに入れて、守るようになつて外に出た。

そうしていつもの倍近くの時間をかけて辿り着いたあの四阿に、やはり彼女はいなかつた。徒労感より先に安堵の溜息が出る。十分ほど四阿の屋根の下で様子を見たが、彼女はおろか人の心配がまったくなくない。雨風は強くなるばかりで、ついぞ雷なんか鳴り始めたので、その日はそれぐらいにして帰路に着いた。

更にその翌日、またいつもの場所まで行くも、やはりそこには誰もいなかった。大雨の被害は思ったよりも甚大で、封鎖こそされてないものの、その辺が落ち葉やら木の枝飛んできたゴミなんかでぐちやぐちやだった。それでもまあ、座れないほどではなかつたので、乾ききつていないベンチに座つて彼女を待った。そうして七つの子が鳴るまでいたが、その日も彼女が来ることはなかつた。まあ道も荒れていたし、安全面で判断して来ないことを選んだのかも、と思ひながらその日は帰宅した。

しかしそれから二週間、待てど通えど彼女が来ることはなかつた。

飽きてしまったのだろう、たぶん。或いは飽き飽きしてしまったのだろう。具体的な時間には約束をしていたわけでもないし、名前も知らないし。二週間も交友が続いたことが奇跡だったのかもしれない。そう思うと次第に期待して通っていたのが恥ずかしくなってきた、徐々に足は遠のいていった。

夏の暑さはますます厳しくなり、気付けば水溜まりはもう、すっかり干上がってしまった。ていた。

この声が嫌いだった。言葉を吐こうとする度くつくつ鳴って、吃り、繰り返し、それに焦ってたまに上ずる。いわゆる吃音というやつ。揶揄われるのも哀れまれるのも、心底腹立だしかった。

なんか言いたいことがあるなら言いなよ。

ずっとずっと言われてきた言葉だ。それにせつつかれて口を開けて、閉じて、また開けて、くつくつするうちに相手は焦れて、大体こう続ける。もういいよ、何でもなければそう言うてよ。そうして勝手に話を切り上げる。

どいつもこいつも皆馬鹿ばかりだ。口から言葉が出ないだけで、頭の中にも言葉が無い馬鹿だと決めつける。喋れないだけなのだ、誰もわかってくれない。わがろうとしない。誰も待ってくれない。いつだって頭の中には溢れるほどの言葉があるのに。

何も考えていないと思われるのは悔しくて、話し方を変えた。インクを声にした。筆談も筆談で変な目で見られることはあったけど、それでも幾分生きやすくなった。

と、思っていた。と言うか、なると思っていた。でも現実はそう甘くなくて。貼られたレツテルが考えなしから面倒臭い変な奴に変わっただけだった。全てはひどく単純な話で、僕自身に「話したい」と思わせるほどの面白み、要は価値が無かっただけ。恥ずかしい。なんてとんでもない驕りだったんだろう。見向きもされない要因は、声でも吃りでもなく自分自身だと、何故気付けなかったんだろう。

そうして、どうせ僕なんて、と、お前らだって所詮、を行ったり来たりするうちに、心はみるみる擦り減った。どっちかではなく、どっちも嫌いになってしまった。皆馬鹿だし僕も馬鹿だとわかると、全部嫌になった。馬鹿にされるのもするのも疲れた。こんな世界、こっちから願ひ下げだと扉を閉めた。

薄暗い部屋、ノートの中には、行き場のない声が溜まっていく。自責も他責も、喜も怒

も哀も樂も、言葉が詰まっているのが喉元から紙になっただけで、状況は何ら変わってなかった。さみしい余白は埋まらなかった。

わかってほしい。抱えたノートの罫線上のインク溜まりはすなわち、そういうある種の承認欲求の塊だった。後の彼女の言葉を借りるなら、こう言えるだろう。

最後にあの四阿に行ってから、おおよそ一年ほど経つ頃だった。散歩中、ああそういえば去年の今頃もこんな感じで、と考えていると、無意識にその方向へ歩みを進めていた。ここまで来たらと、ついで感覚で公園に入る。どこも去年と変わった様子はない。懐かしさを踏みしめつつ、何となく緊張して、少しの不安と期待が混ざって、自然と早足になっていた。いつかのように揺れる木漏れ日を爪先でつついて進むと、いつもの四阿が見える。そしてそこには、いつかのように、いつものように先客がいた。

ゆるく縛った髪に、セーラー服。間違いなく彼女だった。

思わず数歩駆け寄って、違和感を覚える。そして数秒もせずにその正体に、彼女の向こ

う側が透けていることに、気付く。薄く靄がかつたほどの存在感がなく、足先に向かうにつれて薄くなり、足首から下は完全でない。ひ、と喉がひきつって、緩んだ手元からノートが落ちる。その音に反応した彼女がおもむろに顔を上げる。そこで違和感がまだ残っていたことに気付いた。

「……？」

瞼の中の空の色は僕を捉えていない。彼女はこちらが、というよりそもそも目が見えていないようだった。きよろきよろ首を動かす彼女にゆっくりと近付いて、横に座る。それでも彼女はまだ僕を認識していないようだった。そこで少し強引な手段に出る。閉じたノートで机を数度叩くと、彼女はびくつと肩を揺らす。

「な、何？ 誰？」

戸惑う彼女の近くにノートを近づけ、シャーペンで適当な線を書いて音を立てる。すると彼女は狼狽えるのをやめて、少し考え込む。気付いてくれるだろうか。

「……もしかして、鳥の……？」

ノートで机を一度叩く。こういうのは、大体。

「はいなら一回、いいえなら二回叩いて……さっきの音は偶然鳴ったもの？」

ばんばん、と叩く。

「じゃあ、やつぱり……きみなの？」
ばん。

一年振りに会った彼女は、全く変わっていないかったというべきか、変わり果てていたと
いうべきなのか。

「なんか、死んじゃったみたいで」

あっけらかんとした態度で彼女は言った。色々な意味で返事のできない僕に対して、こ
うなる直前までの記憶はあること、こうなってから視力が無くなったこと、その原因もあ
る程度心当たりがあることを教えてくれた。そして説明を終えた彼女は改めて僕の方へ向
き直った。

「ね、続きを聞かせて。たぶん、それが私の未練なの」

この目は嫌われていた。冷たい色。外国の血が混ざった母と同じ色。父と私を置いて、

他所様の家庭の父親を奪って出て行った母と、同じ色。

こちらを見る目も怖かった。この目を見て母を思い出す人に、哀れられないよう、蔑まれないよう、怒られないように振舞わなきゃいけないかったから。でも繕えば繕うほどにほつれてった。私自身も、家庭のかたちも。

特に、父は何かの拍子に私と目が合うたび不機嫌になった。一番母に傷つけられた人だし、仕方ないと思う。ただ運が悪いと目が開かなくなるまでぶん殴られたり、そのせいで殴られない日もときたま視界はぶれたり霞んだりした。でも、唯一の抛り所だった本だけは手放せなくて。机上の紙と向き合えば、垂れる髪は自然とこの目を隠してくれたから。読む内容は様々で、近所の図書館の本棚から、日本文学に海外の古典、雑誌、絵本、事典も辞典も、ぱつと惹かれたものを片っ端から手に取った。

ほんとはね、私もたまに、ほんとにたまにだけど、書く方もやってたんだ。最初は読んだ本の感想のメモだったかな。それから、自分の思ったことを書くことと楽しいことに気が付いて。愚痴とか文句とかも書いてた。家の空気が悪いとか、書くことすつきりするから。このB5のノートは私を否定しない。この中でなら、誰の目も気にせず振舞える。

誰にもわからなくていい。抱えたノートの罫線上のインク溜まりはすなわち、そういう

自己満足の塊だった。

で、ね。そういう日記の延長線みたいなことだけじゃなくて、ちょっと創作にも挑戦してみたくなって思ってた。でもてんでだめだった。要素は浮かんでも、上手く繋げられなくて。それで、零から物語を生むのって難しいなあって思ってたときに、きみのノートを拾ったの。

だからちよつと嬉しくなっちゃったんだよね、鳥の話を見て。あれ多分、きみ、すごく苦しいときに作ったものでしょ。頁の端にぼつぼつ濡れた跡があったもの。私それを見て、これを……誰かの魂の欠片と言えるような物語を、読んでみたいなって思ってたの。だからきみがちよつと引いてるのはわかってたけど、食い下がっちゃった。ごめんね。

それでまあ、あの日のことなんだけど。あの日は特に運が悪くて。書き溜めてたそれが父に読まれてしまって、それで……それで、瞼が両方、いつもより腫れあがってしまった。ひどい雨が降っていて、だからもう、ほとんど見えなくて。でも、どうしてもきみの言葉が聞きたくて。聞かなきゃって思ってた。とにかく、はやく会いに行かなきゃって、……早く会いたいって、思ってたの。

色々重なっちゃったんだよね。気持ちとか、状況とか、色んな要因が。だから、道路に反射するライトに、空回るブレーキ音に、横から来る車に、気付けなかった。で、それからしばらく、三か月ちよつとぐらいいかな、体は頑張ってたみたいんだけど、だめだったんだね。気付いたらここにいた。

結構な雨だったから、きみが来れない可能性もあったのにね。一番やりきれない結果になっちゃった。今思えば、なんであんなに……

あんなに……何から急いで……

……あー、そっか。

私、逃げたかったんだ。

続きはある。続きを伝えたい気持ちもある。ただそれを伝える手段だけが、いや声を出す勇氣だけが足りなかった。この重い沈黙が僕の心の迷いによるものだと、きつと彼女にはもうばれている。

「ね、きみの言いたいことを聞かせてよ」

彼女がゆつくりと手を伸ばす。細い指が顔付近を彷徨って、膝元に置いたノートを通り抜けて落ちる。体温と感触の代わりに、触れられたところを柔い風が撫でた。

「きみの言葉で聞きたいんだよ」

見えていないはずの目が、まっすぐにこちらを捉える。いつかのように心を掴まれる。

「……、……」

くつくつと音が鳴る。湧き出す言葉で喉が焼けるように熱く、痛む。力んだ顎と拳が震えた。二、三度小さく深呼吸してる間も、彼女は急かすことなくこちら耳を傾けてくれる。

「み、み、水溜まりは、……蒸発して、く、雲になる」

それは文字通り絞り出されたような声で。でも彼女は小さくうん、と頷いて、ただじつと次の言葉を待ってくれた。

「く、くもに、雲になったら、あ、雨になって、……かわ、川に流れて、う、う……海に……流れる」

吃り、繰り返し、たまに上ずって震える。自分の心音が嫌に煩い。

「そしたら、そしたらまた、蒸発して、雲になっ、なっ、雨になって、また水溜まりに

なる。……な、なるから、あなた、あなたも」

でも、どうしても、これだけはちゃんと伝えなくちゃ。

「あ……あ、あ、会いに、きて」

ぼやけた視界に映る彼女の目からもまた、同じように雫が落ちて見えた。ただ、流れたそばからそれは透けて消えていく。今度は僕が、ちゃんと、ずっと、

「つ、ず、ずっと、まって。待ってる、待ってるから」

狙ったのか偶然なのか、彼女の手の甲が胸の真ん中に当たる。ここにあるのは、今の彼女にはもうないもの。情けない声の代わりに、どくんどくと痛むほどに強く鳴っているそれを、優しい風が撫でる。

「……うん。よく聞こえた。ありがとう」

満足そうに小さく笑うと、彼女は先の涙と同じく、元の場所に還るように空に溶けていった。間もなく、七つの子が鳴った。

「本日はありがとうございました」

インタビューを終えた記者が深々と頭を下げる。そんな、わざわざ立ち上がってまで、と慌ててこちらにも立って頭を下げ返す。

『こちらこそ』

『懐かしい気持ちになりました』

言葉を打ち込めばぽこんぽこんとかわいい音が鳴り、相手と自分のパソコンの画面上に、吹き出しに括られた同じ言葉が浮かぶ。

「いやあ、楽しかったです。家帰ったら読み直します。天先生そらの作品全部」

『ありがとうございます』

新作の発表に合わせて行われた、文芸雑誌のインタビューは無事に終わった。

対談形式なんてどうなることかと思ったが、チャットを使ったお陰で随分テンポ良く進んだ気がする。使いやすいならノートでも、と彼は言ってくれたが、取材なら結局彼は僕の言葉を記録しなきゃいけないわけで。僕のノートの字をデータに起こすのは二度手間だろうと、今回はパソコンを使うことにした。

『でもまあ、全部結局ただの自分語りなので』

「いいじゃないですか、自分語り。案外、独り善がりであればあるほど誰かの為の物語に

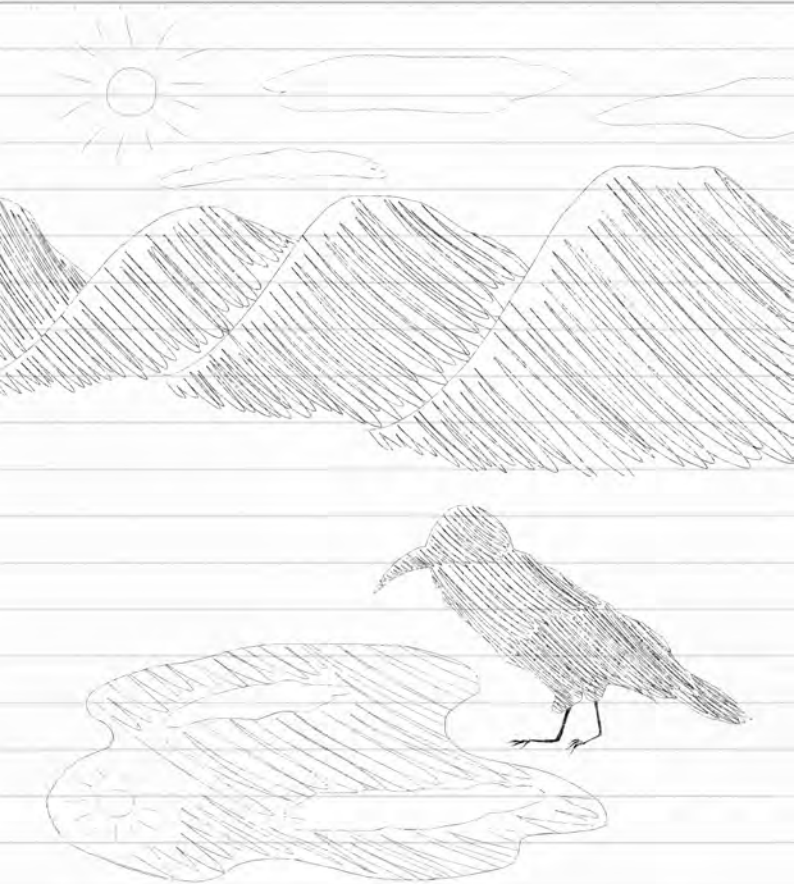
なったりするもんですから」

自信持つてくださいよ、と彼が笑う。そういうもんだらうか。そうなれただらうか、この物語は。

出入り口まで見送ってくれた彼に頭を下げて図書館を出ると、夕立はもうすっかり上がっていた。暑さは入道雲と共に去り、ちよほど過ぎしやすくなった外を歩く。道路端の水溜まりが、暮れかけの深い青を映していた。

Name _____

Date _____



青色と2人の声に寄せて

ひと夏の思い出という言葉は、いつからか目にも耳にも、よく飛び込んでくるようになった気がします。懐かしさや楽しさが眩しい暑さ、もくもくとした入道雲と共に思い出されるのが夏でしょう。ですがこの作品の夏は、第二の出会いと別れの季節だと感じました。短く濃密な出会いと別れの季節です。濡羽天氏の言うベタな展開の場となった四阿や、二人を引き合わせた文字という声、めくられた頁とそこに残されたインクと物語も、水溜りと青空。これらを思い出す度に二人は出会い、そして別れると思うのです。

そんな季節の物語だからこそ、また、濡羽天氏が誰かのために書く楽しさを知ったきつかけだからこそ、「第一稿」というタイトルが一層輝いてみえます。それにやはり友人を想って祈った二文があるからこそ、文字が声となって聞こえてくるのだと思います。

そして大きな題材を濡羽天氏らしさ全開で描き切っているのが、ただただ純粹に素晴らしく、羨ましかったです(どの目線からもの言っているのか、と思われるかもしれませんが素晴らしい以外の言葉が思い浮かびませんでした)。作中の二人は吃音と目の色というそれぞれの悩み、そして自分の居場所という共通の悩みを抱えています。そんなお互いを

繋ぐもの、救うものとして機能するのがインクの文字なのです。このインクの文字のもつ複数の意味付けが、私は最大の濡羽天氏らしい要素だと感じました。声であり、居場所であり、逃げ場所でもあり、誰かに贈る言葉なのですから。

もちろん先述したような二人の設定や、幽霊と人間という不思議であたたかい展開も濡羽天氏らしい要素だと感じます。しかし今の私では特に二人の設定に関して、ここに書けるほどの知識などがありません。ですので、書き記すのは遠慮させて頂く次第です。

さて、読了感の良さのままに書き連ねてしまいました。夏に「第一稿」と出会い、夏にこのあとがきを書いているのが嬉しくてたまりません。そして私の夏もまた、出会いと別れになりそうです。これほどの作品に出会った夏、その夏から離れて秋になってしまいましたから。作品と離別することはありません。来年の夏、雨のようにこの作品に戻り、作品に綴られた文字に私は再び留まるでしょう。最後になりましたが、素敵な作品のあとがきを担当させていただけたこと、非常に嬉しく思います。素敵な作品が多くの人目に触れますように。

編集後記

本誌作成において、三つのチームに分かれて校正を行いました。創作をお読みになってからこちらの編集後記を楽しんでいただければと思います。

編集長

司会者 (ご協力・階口窓)

チームちいかわ (リーダー・濡羽天 入鹿るいか、階口窓、黒土萌音、吹風佐梨)

チームハチワレ (リーダー・ニコゴリ 小夜紫雨、千紘、田中楓夏)

チームうさぎ (リーダー・阿智坂しゆき 藍鏑薰衣、九条桜蘭、百珈)

【各チームごとの活動について】

司会者…じゃあ誰から行く？

ちいかわ…やっぱ編集長でしょ。

編集長…じゃあ…編集長はうさぎだったんだけど……。

一同…ちよつとまって笑。

ちいかわ…編集長カミングアウトがすぎるだろ。

司会者…てか一人称編集長なんだ…。

編集長…あんまりグループの中ではあんまり喋ってなかったかな…穏やかなチームでしたね。

うさぎ…うんうん。

編集長…なんかあるか聞いても全部褒め言葉しか返ってこないの。だ、大丈夫なのかなって思いながら色々聞いてた。

うさぎ…そして別にトラブルもなく終わったよねえ。

編集長…ふわ〜つとね。気まずくなるのかなあと思ってたんだけどね。「もつといっぱい言っ方がいいよ」って言ってたけどなんも出てこない。

ハチワレ…全肯定だ。

編集長…この表現がわかりづらいとか、わかるけど考えちゃうとか、そういうのは指摘してくれただけ…そんな感じでした、チームうさぎは。

ハチワレ…続けてうさぎいく？

うさぎ…うさぎは…

司会者…（一人称うさぎに） なっっちゃうね笑。

うさぎ… 本当に割とほのぼの…でも庄かけちゃったかな…みんな優しいから「庄なんてそんな〜」って言うかもしれないけど、途中で鬼のように「何月何日第校正（締切）だよオ」「どうするウ!？」みたいなの。

ハチワレ… 後ろの監督出てきたかな。

うさぎ… 締め切りとか細かく設定しちゃったから…「こいつうぜエな…」って思われてたかな。

編集長… いやあでも、ゆるゆる〜と来てたから、最後の方はちよつと締める感じで。

うさぎ… そうだね。でもみんながもう、結構はやいから。「じゃあこの日に提出してください」って言ったら次の日に「できました!」みたいなの。

ハチワレ… はや〜!

うさぎ… ね、本当に…あとコメントは、誰が言い始めたわけでもないけど、皆、校正と感想を分けてくれて。ちゃんと読み込んでくれてるんだなあって言うのは伝わったし、それでもうすぐ来るから、とんでもねえ奴らだぜって笑。

司会者…バトル漫画だ。

うさぎ…私がすぐやらかすから、ラインの機能で「何日までに締切デス。アナウンスし
ておきマス」ってできたのは助かったかな。

ちいかわ…ちよくちよく知らない人出てくるな…：締め切りの人格がある？

編集長…あとゆるすぎて、自分の解釈があつてるのかなってすっごい焦ってた、一人で。
うさぎ…それはね！ ある！

編集長…読み手にこう思わせたいって、その意図がちゃんと伝わっているから私が困って
いるのか、文章的に上手く書き表せてなくて私が困っているのかわからなくて、感
想に「この解釈であつてるの？」みたいなことを書いてた笑。

うさぎ…でもみんな優しく「これこういうことであつてますかね…：？」って。

編集長…ふわつとしてたかな。ちよつと長くなつちやつたけど、うさぎはそんな感じでした。

ハチワレ…次…：じゃあ伝説のハチワレは最後に。

うさぎ…なんだ笑。

ちいかわ…ちいかわはね、「(私と同じ)チーム(だなんて)かわいそうに」から始まったん

ですけども……ね〜……プロの方が多くって、ま〜じではやかっただの！ チーム全体の動きが！

司会者…私遅かったよ……

ちいかわ…いや〜ちゃうちゃう、あんたはやかっただよ。裏切ったって言ったらあれだけど……私たちはね、最初どうしても受けなきゃいけない試験があつてね、それに向けて頑張るのにどうしても遅れますってね。

一同…うんうん。

ちいかわ…でも最初の時点だね。他の人たちはもう「とりあえず一通り、一万字書きました」が「みたいな感じでパァンって出されて、ひよえ〜！」って笑。

一同…笑。

ちいかわ…二人して「ちよつといましけんおわたたばつかでえ……」みたいな、一緒にもじもじしてる、仲間いて嬉しいとか思ってたらね、翌週に「書きましたア！」。パァン！ っ出てきてきてヒョア！ っとなったよ。

司会者…次のゼミは胸張って来れたから。

ちいかわ…私チーム「かわいそうに」のかわいそう担当だったもん。

司会者…見えない敵と戦ってたよね笑。

ちいかわ…リーダーなのに一番進捗遅れてたから…皆優しかったのね。なんでみんなあんな文才も性格の良さも兼ね備えてるのか知らないけど、どっか悪くあってくれねえかと思いつながらね。

一 同…笑。

ちいかわ…みんな「自分のはもう書けたから、何回でも何でも見るよ」とか言ってくれて、でも「あのそう言っていただけるのはたいへんありがたいのですが、見せられるものが何もなくてですね」みたいな。情けねえでござえます…って感じで。で、なんか気付いたら終わってた。

一 同…笑。

ちいかわ…急になんかどうるんって出てきて。

司会者…なんか（不適切な発言）

ちいかわ…不適切だぞ！ カットします！

※カットしました

ちいかわ…これだから小学生男子は…で、そう。なんか、終わってた。

司会者…多分うちのグループで一番頑張って生き抜いてた人。

ちいかわ…どうせ他のチームも全員出来上がるとるんやろ、みたいな感じで思っていました。

どうぞハチワレさん。

ハチワレ…さつき伝説とか言っただんですけど。多分いっちなばん遅かった。チーム全体の動きが。まず私がもう……全然笑。

一同…笑。

ハチワレ…「大丈夫大丈夫」とか言って、ラインも全然動いてなくて。中間報告にはみんな大体出来上がってたと思うんですけど、前日に怖くなっちゃって笑。皆にラインで「あの、私全然終わってないんですけど……皆さんどうですか……？」って聞いたら「私も！」って。

ちいかわ…助けられたんだよね、その雰囲気。

ハチワレ…そんでまあ、全然書けてないって話で「四捨五入したら八割八割笑。」とか言って大盛り上がりしてまして。

うさぎ…高校生のテスト前みたい。

ハチワレ…そう笑。当日皆のチームのスレッドみたら「ここの校正終わりました」とか言

って。私たちのスレッド、その時点で一個も投稿無い笑。

ちいかわ…全員終わってるか全員終わってないかどっちなんだ……？ って思ってたもんね。
ハチワレ…もう、皆一周回って晴れ晴れとした顔で「終わってないよね笑。もういいよね笑。」
とか言ってる。でも多分私と同じ気持ちだったんだろうけど、次に見たとき五割
ぐらい完成してて笑

一 同…笑。

ハチワレ…最初がそんな感じだったから、私が圧をかけることもなく。ゆるく最後まで行
って校正もしたって感じですね。

うさぎ…うんうん。

ハチワレ…校正は結構、結構ずば言ってる人もいたんだけど、同じぐらいの熱量で感想
も送られてくるから。全然ギスギスもしないし、指摘してくれてありがたいって
感じ。

編集長…いいねえ。

ハチワレ…後半敏腕編集者みたいなのがいっぱいいて。

司会者…かっこいい笑。

ハチワレ..校正とかは予定詰めたんだけど、全部するつと行って完成までいきました。最初がスロースタートすぎてちよつと心配だったけど……。

ちいかわ..覚醒したんだ。

ハチワレ..そう覚醒して駆け抜けたって感じ。

司会者..みんな同じようなタイミングでスタート切ったけど、ハチワレはスタートラインでしばらくピクニックしてたもんね笑。

ハチワレ..キヤツキヤツて笑。

ちいかわ..私は終わつてないことに罪悪感を持つてたら隣で楽しそうにやってたから。「おわつてなくてもわらつていいんだ」って。

編集長..間に合えばいいから。

うさぎ..そう間に合えばいいからね。

編集長..何週間か押すんだろうなあつて思つてた。

うさぎ..そしたらなんか、終わつてンじゃん……笑。

ちいかわ..そう、書いてンじゃん……つてね笑。

【ペンネームについて】

編集長…ペンネームの話しようか。

うさぎ…どうやって決めたんだろうね。

司会者…私わかるよ。一字上げと一字下げでしょ。

うさぎ…そう。本名の一字上げと一字下げ。

ハチワレ…私は作品自体がもう、自分の性癖のにこりだったから、あとカタカナの方がクカクしていいなって思ったから、「ニコゴリ」笑。

ちいかわ…私はメタな話を書きたくて、この作品を登場人物が書いた物としようっていうのは元から決めてたかな。ただ最後まで名前は伏せとこ〜って。

うさぎ…オタクが皆好きなのやつだ。

編集長…みんなね、素敵だから注目して読んで欲しいね。

【作風について】

編集長…私はあんまり長いのが得意じゃなくて……。映像を思い浮かべて書くタイプだから、途切れちゃうんだ、どうしても。だから場面転換、繋ぎが不自然にならないように

するのが大変だった。けど、意外とみんな（一場面が）長くて……。

司会者…私一番長い笑。

編集長…イメージをこねたのはあるけど、自分の中ではあんまりかわいいイメージがなくて……でもみんなから返ってくる言葉はかわいかったから。

うさぎ…かわいかった。

司会者…言葉選びがメルヘンだった。

ハチワレ…高級なお菓子みたいな笑。

編集長…あと第三者視点で書けない……だから（第三者視点の作品を）すげ〜ってね。いなあつて。（作者を見なくても）わかる人はわかるよね。

司会者…わからない人は全然わからなくない？ 結構わからない人いたよ。

うさぎ…この人こういうの書こうとしてるんだなってだけじゃなくて、こういうのが好きなんだなあつていうのが全面にでるから、（読んでて）色あるわあつて……笑。でも純粹な恋愛もの書く人いなかったもんね。

ハチワレ…そうだねえ笑。

ちいかわ…みんなの恋愛もの読みたいよ。

編集長…書きたいね。

司会者…そいえばハチワレ（メンバーの作品）さあ、めっちゃSF多くない？

ハチワレ…そうだね、ちよつと古風なやつ、いかにもSFなやつ、日常系のやつ……って感じだったからね。

ちいかわ…私は一人称視点しか書けないから一人称で、違う人物の視点にころころ切り替わるみたいなのをよく手癖でやってしまうんだけど……読者からしたら読みにくいよなあと思いつながら、校正で何度も突っ込まれて直しながら書いてた。

編集長…章立てできればねえ。

ちいかわ…そう、自分の都合でころころ頁変えられないから、なんとか一章を長くするようにしてた。

司会者…でもうちのチーム（ちいかわ）、作風のにこごりみたいな感じじゃなかった？

ちいかわ…たしかにみんな書き慣れてるからね、作風が確立してたよ。

司会者…そんなことないよ。私めっちゃつっこまれてたよ。

編集長…つっこむのも難しいよね。

うさぎ…疑問もわからないんだよね。

ちいかわ… 人文学部の特性なのかもしれないけど、他の人の意見とか思想を「あくさういうもんなんだ。あなたの中ではそうなんですわね」って何でも一旦受け入れるところがあるじゃん。

ハチワレ… 確かに。正解求めてないからね。

ちいかわ… どれだけ突飛な展開とか設定が来ても「ああ、この世界ではこうなんだ」って受け入れちゃえるんだよね。

編集長… 私つつこまれてない設定を喋りたくてうずうずしてるもん。

【物語を書く上で大変だったこと】

司会者… みんな何から書き始める？

編集長… 私は人物。物語の起承転結を思い浮かべて、じゃあ誰がいたら面白いかなって。ちいかわ… 私も近いかも。クトゥルフ（TRPG）に近くて、シナリオとキャラを思い浮かべてロールプレイして、みたいな。

編集長… わかる！ 書いてるときに登場人物に乗り移るからすっごい疲れる。

司会者… 二人は？

うさぎ…私ガチガチに書く。私、人物が一番後。

一 同…後!?

うさぎ…こういう物語が書きたい! って言うのから決めて、じゃあ誰にしようって。だからどれも似たような感じに……笑。

ハチワレ…舞台の方がしつかり整えられてるんだ。

うさぎ…そうそう。

ハチワレ…私はプロットを書けないので……ほぼ白紙で笑。何を書きたいかってところから決める。今回は焼かれるところが書きたくて。

司会者…焼かれるところからなんだ!?

ハチワレ…そう、本当はおかしな村の儀式が書きたくて。だから儀式の内容から考えて、S Fと絡めたら面白そう、私の好きな人外をいっぱい出せるぞって。

司会者…場面があつて、そこに到着するまでの過程を後から考えるんだ。

編集長…私もそう書いてるときあるかも。登場人物を考えて点を置くんだけど、書けるところから書いてるから……

ちいかわ…私も書きたいところから書くタイプだけど、書き進める内に矛盾が生じて作業終

一 同…ああ。
盤に最初に書いたところを大きく書き直すっていう……笑。

【編集長・副編集長だからわかるチームの他の人の作品の良さ】

編集長…百珈ちゃんが「かたいな」って思ってた。もうここからあまり動かないだろう
みたい。あんまりふわふわしてなくて、現実でも起こり得そうなリアルさがある感じ？

うさぎ…わかるわかる。

編集長…直接人の感情を書かないし、それを想起させる言葉も無いけど、全体を通して読み終えると登場人物の心の動きがわかるのがすごいなあって。

うさぎ…本人も意識したって言ってたね。

編集長…桜蘭ちゃんはね、最初分からなかったの。人にとってはめっちゃ怖いと思うし、何回読んでもぞわぞわするのは消えなかった。

ハチワレ…あまりに短すぎるから怖いんだよ。

編集長…しゅきちちゃんはスピード感があるんだよね。すらすら読める感じ。

司会者…チャリ（乗ってるとき）の下り坂だつて笑。

編集長…誰が読んでも面白いと思うけどね。小学生から読めます、みたいな。小学生も大
人でも楽しく読めるのが良いと思う。

うさぎ…笑。

編集長…疾走感つて出すの難しいから…：自然に出せてるのがすごいなあって。
ちいかわ…書いてる方はどうなの？一回書いたら止まらないみたいなのあるの？

うさぎ…あるけど、行っても千、二千字ぐらい？途中で怖くなって止まっちゃうから
…：逆に疾走感ないかなって。

編集長…でも綺麗に収まってて、色がばちばちしててポップだなんて。

うさぎ…編集長は人物設定から入ってるからなんだろうけど、人物と文体が一致してるの
が綺麗だなってね。

編集長…乗り移って書いてるからね。

うさぎ…多分一番書き直しがあつたと思うんだけど、雰囲気はそのままに研ぎ澄ま
されてる感じ？話の纏まりが綺麗なんだよね。

編集長…比べてね、百珈ちゃんね、（第一稿から）全然動いてないよね。

うさぎ：そう、大幅な変更もなく。あとおいしそう！ っ。ヒューマンドラマみたいなき感じだけど、直接心情書くわけじゃないから読み手によつて印象は変わるのかなって。それで言ったら桜蘭ちゃんも。

編集長：誰目線かでね。変わってくるよね。

うさぎ：桜蘭ちゃんと百珈ちゃんは割と身近にあるものを題材にするのがうまいなあって。うまいっていうのも上から目線だけど……。

編集長：絶対自分の世界とルールがないと書けないよね。

ちいかわ：るいかちゃんがまさにそんな感じだったなって。突飛な設定を挟まずによくあそ

こまで面白いこと書けるなって。オチもよくて、やわらかい落語みたいな。

うさぎ：わかるかも。

ちいかわ：うちの博士とメイクの二人はね。何食って生きてたら思いつくんだろうって。短編ドラマとか映像化できそうって感じ。場面の明暗がはつきりしてるよね。心情が追い付きやすいっていうか、読者の心を綺麗に導けるからすごいなって。演出が上手くて映画っぽいかも。

編集長：うんうん。

ちいかわ..あとシンプルに話の構成が上手い。

司会者..絶対にここでバレちゃいけないって心で書いてた。

ちいかわ..犯人側の心情なんだ笑。

ハチワレ..ちゃんと騙されたし、読み終わってすぐ二周目行きたくなった。

司会者..殺意を持たなきゃね、殺せないから。

編集長..ハチワレは？

ハチワレ..ハチワレはね、私と千紘ちゃんは世界観が独自のSFって感じで、楓夏ちゃん紫

雨ちゃんは今現代、日常っぽくて。紫雨ちゃんは日常系書きたいって言うて、う

ちらに「何食べたい？」って。

ちいかわ..あと飯テロエグなかった？

ハチワレ..飯テロエグかった。あれは夜に読んじゃ駄目なやつ。

一 同..笑。

ハチワレ..千紘ちゃんはね、一見古い感じの作品なのかなって思わせただけど、ちゃんとSF。

なんか、童話みたいな。

編集長..『銀河鉄道』みたいな。

ハチワレ…うんうん！ 人間関係のほろ苦さもあるから、うちの年代が楽しめる童话みた
いだったかな。あと二人ともほぼ直してないね。

うさぎ…もう決まってたんだ。

ハチワレ…楓夏ちゃんもはじめからあんな感じで、タイトル回収がすごい。そこ繋げんの！
うまいなああってね。ミステリーというよりサスペンス寄りだったけどすつきりし
てて読みやすかった。あと明言しないの、ヒントだけ上手く散りばめとくのもう
まいなああって。

司会者…じゃあ、あと我がリーダー（ちいかわ）へ。すごい好きなんだよね。大分完成遅
れてるって言ってたじゃん。でも完成度かなり高くて。確かに場面もいっぱい変
わるけど、置いてかれないよう感情移入させてくれるの。モチーフとかが繋がっ
てて、すごく素敵な、色を感じさせる作品だった。

ちいかわ…ホア~~~~…

司会者…ニコゴリのはね、良い意味でカオスを感じてさ。本当に「ニコゴリ」って感じで。
いろんな良いところを詰め合わせたらできあがったって感じで。あとカオスだけ
ど秩序立てて進んでくから、起承転結の転もしっかり感じさせてくれて。そもそ

も題材の選び方がとても秀逸だと思つてました。

【みなさんで縮めてください】

ちいかわ…これ多分読んではさ、主に来年これを書く後輩だと思つたので。がんばつてく

ださア~~~~い笑。

ハチワレ…でも後輩のやつよみたいや。

うさぎ…読みたいね普通に。

ちいかわ…読みに行きまゝす。

編集長…おわりまゝす。

ここまでお読みいただきありがとうございます。何か月もかけて作り上げるこのゼミ誌も、現在はあと少しで刊行というところまで来ております。編集後記で話したことを読みながら、ここまで長かったような短かったような、そんな気持ちです。

田中先生含めゼミ生の皆さんには感謝でいっぱいです。立派なことは書けませんが、編集長にさせてくれてありがとうございます。貴重な経験ができてとても嬉しいです。何

年後かにまた皆でゼミ誌持つて集合したいね。新作書けたらまた見せてください。

最後に、ここまで読んでいただいた貴方へ。お読みいただきありがとうございます。いかがでしたか。十三人の個性豊かな物語は楽しんでいただけただけでしょうか。

田中先生をはじめ、先輩方、本誌に関わってくださった皆様へ深く感謝申し上げます。『あやいと』第三号はここまでとなりますが、この先も続く『あやいと』でも多くの皆様と繋がれることを祈っております。

北海学園大学人文学部一部 田中綾ゼミ
『あやいと』第三号 ゼミ長兼編集長・副編集長

四年

児島菜津子

濡羽天

ニコゴリ

阿智坂しゆき

ごあいさつ

まず何より、猛暑の中、創作と編集に尽力してくれたみなさん、本当にご苦労さまでした。そして、読者のみなさまにはご高覧に感謝申し上げます。

このゼミでは、二〇一〇年度から文芸誌を発行していますが、今回初めて「ペンネーム可」としました。大学のゼミ名で発刊するため、学生の氏名そのもので公表するのが望ましいのですが、代々、ゼミ誌を公共図書館等にも謹呈しているため、個人情報考慮してペンネーム可としました。匿名性を武器に、よりいきいきとした表現、ストーリーが可能になったのではないのでしょうか。

さて、ゼミは三、四年の二年間ですが、三年時はコロナ禍で活動にも制限があり、初めてのゼミコンができたのも四年生になってからでした。当初はゼミ生同士のコミュニケーション不足が案じられましたが、どうやらそれはまったくの杞憂に終わったようです。編集長はじめ、計画的に校正や編集にあたったゼミ生一人一人の力と思います。

早くから準備にあたってくれた表紙デザイン、イラスト担当メンバー、面倒なレイアウト処理にも率先して取り組んでくれたメンバーたち、どうもありがとう。会計・監査、謹呈作業など一連の作業の経験は、今後の社会人生活にも活かせるものでしょう。

作品と批評とは車の両輪ですが、今回、一作品に対して他のメンバーからの「あとがき」|| コメントを試みたことも、貴重なものと感じます。一人一人の個性、ユニークな側面がいつそう可視化されたのではないでしょうか。

創作という行為は一生もの。数年経って、ふと、この『あやいと』をひもとき、学生時代の感性の「いと」を次なる創作の「いとぐち」にしてほしいと願っています。

熱のこもった第三号の刊行を祝して、乾杯。

演習担当教員 田中 綾

北海学園大学人文学部 I 部田中綾ゼミ『あやいと』第三号

発行日：2023年12月9日

発行所：田中綾ゼミ『あやいと』編集部

編集代表	児島菜津子
表紙・イラスト	角口舞、佐々木円香
レイアウト代表	若林優生
会計・監査	根田栞、齋藤穂乃花

〒062-8605

札幌市豊平区旭町4丁目1-40

北海学園大学人文学部日本文化学科 田中綾研究室内

E-mail: aya-ta@hgu.jp

印刷：株式会社ポプルス

※乱丁・落丁及びご意見・ご感想・ご指導等ございましたら、お手数ですが書簡もしくは E-mail にてご連絡下さい。

サークル@オンライン

201

丸条桜蘭

『地球の歩き方 改訂版』

231

ニコゴロ

スパイスラック

271

百珈

咲いて灰になる
そして春になる

297

階口窓

胡蝶の夢

335

黒土萌音

第一稿

361

濡羽天

